
removed core for answer survey the desert

鈴木シキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

armored core for answer survival
eye the desert

【Nコード】

N1711I

【作者名】

鈴木シキ

【あらすじ】

進行する大気と土壌の汚染、永遠と繰り返られる経済戦争、激動する世界。

粗製と自称する中堅リンクスは戦いの果てにどのような答えを見出すのだろうか。

armored core for answerの世界観で描かれる物語。

「人はそれでも空を憧れる。」

chapter 0-0 (前書き)

この小説には二次設定や自己解釈などが含まれます。そう言ったものが嫌いな方は全力でモデル事をお勧めします。

フロムの万歳、コジマ汚染万歳、AMIDAかわいいよAMIDA。といった感じの人ならだじょうぶじゃないかな。

追記

ニコ動的ノリでコメしてくれて結構です。これやってくれとかあったら一報お願いします。

独り言、地上を爆走する巨大戦車はやっぱり男の浪漫だよね。

追記その2

この物語は、全てのArmored coreユーザーと、フロム・ソフトウェアに捧げる。

現在の延長線上にある未来、近視眼的な開発と広がる貧困の差によって国家による社会秩序は崩壊し、見切りをつけた軍事企業体によって世界規模のクーデターが発生した。

国家軍の主力兵器であったアーマードコア（AC）とマッスルトレーサー（MT）は最新技術の髄を惜しみなく採用した30機程度のネクスト・アーマードコアの前には手も足も出なかった。

この戦いでACと呼ばれていた兵器は決戦兵器としての立場を追われノーマルと呼ばれるようになりその搭乗者であった搭乗者レイヴンの多くが武装勢力や半ば捨て駒として企業軍に身を置くことになった。

のちに国家解体戦争と呼ばれたこの戦いの4年後、ネクストがネクストである要因を作り上げているコジマ技術をめぐり企業は対立初の企業間戦争となったリンクス戦争により多数のネクストと『繋がる者』という意味合いを持つ搭乗者リンクスを失い多くの企業が大規模な改革を行わざる得なくなった。

この戦いでもう一つ特記しておくべきことがある、『伝説のレイヴン』であるネクストに敗れたレイヴンであった彼は『アナトリアの傭兵』としてその名をとどろかせこの戦争を終結させる大戦果をあげるにいった。

その伝説はすべての戦争生活者にとって畏怖と尊敬の対象となり支配者にとっては最大の危険要素となった。

そして数十年の未来かねてから危険視されていたその圧倒的個体依存性と兵器としての信頼性の低さをかんがみた企業によりそれを補うに値する巨大兵器アームズフォート（AF）を開発した。

それを開発する様子は兵器を組み立てるといふより巨大な建造物を建築していく様子に似ており初めてAFが実戦投入された時は各企業体も新たな雇用口と市場に喜々したという。

そのAFがネクストに変わり企業の主力兵器と各企業の象徴となつて数年の月日が流れた。

「ミッションを依頼します。

ミッションターゲットはGAグループ、中東砂漠地帯をMSACインターナショナルの輸送部隊の排除となります。

輸送部隊は複数のノーマルと有沢重工社製の大型輸送車両からなります。

本来であればネクストを持ち出すミッションでは無いのですがこのミッションに我社のリンクス候補生を参加させます。

ユニオンは貴方の実力を高く評価しています。良いお返事を期待していますね。」

chapter 0・0 (後書き)

「フロム脳からコジマ粒子が逆流する。ギャアアアア！」
失礼取り乱しました。鈴木シキです。

この度は二週間に一度の更新ができる見通しが立ったので投稿に踏み切った次第です。

さて、おまけの方ですが登場させようのないレイブンやACについて紹介しているかと思っています。

さて、エース君いじめできるか確認してみよう

iの字をモチーフとしたエンブレムが描かれた大型長距離輸送機の中で一機の蒼い巨人^{ネクスト}が膝を折り背中を丸める形で待機していた。

四角いプロックを組み合わせたようにも見えないこともない外見の細い脚(legs)、先鋭的で小さくまとまった印象を与える胴体(core)、昆虫の足を思わせるフォルムの腕(arms)、いくつかの棒状のアンテナが伸びたバイクのヘルメットのような頭部(head)、全体的にはほっそりとしたフォルムを持ち、ある意味人間みを帯び左肩には輸送機と同じようなエンブレムが描かれていた。

両の手には先鋭的なマシンガンが握られ背中には横から見れば半円をさらに割ったような形状のパルスキャノンが装備されている。

コックピットにオペレーターの声が響く。

「間もなく予定地点に到着します。機体の最終チェックを終わってください。」

「了解。AMS接続する」

年のころは25ぐらいだろうか。男は水に入って力を抜いた時のような姿勢でシートに座り、全身を覆う形でシートにがっちりと固定され固定具の下のバルーンに対Gジェルを充填するようにアレゴリー・マニピュレイト・システム(AMS)を介して命じた。

全身がバルーンによって圧迫され体はキノコのような形状の操縦桿がある部分以外動かせなくなる。かなりきついGでベルトに体に食い込むより幾分ましだ。

狭いコックピットには必要最低限の光源しかなく首を守るためにシートと一体化したHMDが頭を覆い対塵マスクの役割を果たしていた。

HMDには機体が見ている外の様子が映し出されAMSの接続に伴い体に不自然な重みを感じた。それは機体が自分の体になったか

のような感覚だった。

「各部、動作チェック。」

機体の各所に設置されたブースターがイメージに従って動き異常がないことがHMDに表示された。

格納庫にアラートが鳴り響いた。

「レーザー照射！？そんな射程が長すぎる」

「あらかたそこらへんに観測気球でも飛ばしていたんだろ。いつものことだ。」

「スモークを散布して離脱するあとは任せた。」

機長の叫び声がヘルメットのスピーカーから響いた。

「機体を投下します。よろしい」

「ついでにフレアを散布してくれ全兵装オールグリーン。発進準備よし。」

操縦桿に添えた手に力を入れるとネクストの手が武器のグリップを握りなおした。

「投下します。」

輸送機の後部ハッチが開き機体に乗っていたパレットごと空中に放り出された。パレットはハッチに取り付けられていたレールで止まりやがて回収されていった。

空中における迷彩効果を期待した青い塗装がほどこされたネクストが砂漠の太陽に照らしだされる。

操縦桿とAMSを用いてネクストの姿勢を直し大量のフレアとスモークを展開しながら飛び去っていく輸送機の姿を確認しながら、機体を覆う膜のイメージと急激な加速のイメージをAMSに伝える。

機体各所に設置されたコジマ粒子噴射口から大量のコジマ粒子が放出され整波装置が放つ磁気がプライアルアーマー（PA）を作り上げ、背部の保護カバーが開きキューンという独特の起動音とともにオバードブースターにコジマ粒子が充填される。

殺人的な加速とともにHMDに表示された外の映像がはるか後方に吹き飛んでいった。

「こちらはストレイドオペレーター『セレン・ヘイズ』。こちらは別方向から進行する。せいぜい揉んでやってくれ。」

「『セレン・ヘイズ』か。これは御大層な御仁がでてきたな。」

そんなことを考えているとミサイルがこちらへ襲来してきた。

「邪魔だー！」

A M S に銃を打つイメージを伝えつつミサイルに狙いを定める。

砲門から弾幕が吐き出され弾幕となりいくつかのミサイルの迎撃に成功する。そうしてギリギリまでミサイルを引き付けステップをするイメージをする。

ネクストが肩に取り付けられたブースターから爆発的な推進力を生み出し機体を500km/強引に横に移動した。クイツクブースト(QB)と呼ばれるネクスト特有の機能だ。A M S によって条件反射並みの反応速度で機体に急制動をかける。

A M S とはまさに搭乗者リンクスと機体ネクストを文字通り一つにする技術なのだ。

「いつ見てもでかいぜ。」

O B を続けながらミサイル弾幕とグレネードによるをQ B で回避しこちらの射程まで無理やり接近する。

輸送車両と言われているがその大きさはA F と変わらない。タンク型A C とグレネードで知られている有澤重工らしく戦車をそのまま大きくしたような外見だがキャタピラではなくネクスト技術を流用したホバー装甲を使用し毎時200km近い速さで地上を爆走している。

これはA F 相手の補給を想定し積み下ろしなどという面倒を省くため直接補給できるようにした結果がこれだという。

遠距離攻撃用のレールガンが装備された上部装甲にはミサイル発射口とクレーンを格納するためのハッチと他のA F とのかけ橋になる部分が確認できる。

そんなことはともかく、こいつの固さは身にしみて理解している。凄まじく固い重量タンク型ネクストに搭乗する有沢隆文とは幾度か戦った経験があるが正面から撃ち合って勝てた試しがない。背後に

回り撃破するのがやっとだった。閉鎖空間で戦うことを考えるとぞっとする。

ミサイルを迎撃しながら砲塔の死角へと潜り込み甲板に着地すると集まってきた右手に質量弾を打ち出すバズーカと左背中の中のハードポイントに6連ミサイルポットを装備したGA製ノーマルACに銃口を向けた。

chapter 1-0 (後書き)

どうも、鈴木シキです。

序章だけではあまりにさびしい気がしたので投稿しちゃいました。ガンダム戦記やってからACFAやってCG酔いしたりビジュアルアセンのつもりで組んだ機体でハードのソルディオスオービットと正面から戦って初めて勝ったのは内緒w。

さて、おまけですが。AC3のランク1『エース』についてです。中量機に軽量グレネード、チューンガン、後の連射スナ、月光(最強ブレード)と見た目優秀ですが。AIがあれw。

常にトップアタックを狙いこちらの頭上を飛び回りますがこれが祟りチューンガンの瞬間火力もグレネードの火力も生かせない残念な仕様。拳句の果てにこちらの頭上を飛び越えようとしてくるためどこでもいいので角に誘い込みそこで止まっていると頭の上に乗っかってきます。そこを火炎放射機で燃やしてあげましょう。

それが嫌な人は引き打ちで安定します。

まあ、同じ様な方法で倒せるACがACNXが復刻されているのですがその詳細はのちほど。

それでは二週間後に会いましょう。

ノーマルにサブマシンガンの砲門を向けながら時速500kmで背後に回り込むようにして横移動を開始する。

「！」

言葉なき気合とともに電氣的に伝えられた命令が雷管を起動させ凄まじい勢いで弾丸が吐き出される。初めのうちはノーマルの装甲がはじき返すが砲弾が当たるたびに装甲が変形し捲り上がってついには装甲に穴があき最後には中身をグシャグシャにしてノーマルは煙を上げながら首の後ろの辺りにあるコックピットブロック搭乗者もろとも脱出させを衝撃であおむけに倒れながらその機能を停止した。

さらに別の一機に砲門を向け物の数秒で人型兵器を鉄屑に変えた。その背後でASAMAの砲塔が旋回し500ミリにもなる砲弾がレールガンの電磁加速によって音速を軽く超えた速度で発射された。候補生のネクストが捕捉され暇を持て余していた主砲担当の士官によって迎撃のため発射されたのだろう。

その砲弾は途中まで超高速で飛行し途中で分裂、無数の小型爆弾が弾幕となってネクストに襲いかかるはずだった。

「防衛対象接近、留意してください。」

「はいよ。」

彼も「まあ避けるだろう」などと思いながら最後の機に引導を渡す。

連続的な爆発音、いくら小型爆弾とはいえMTぐらいなら大破させる威力はあるらしく満載されたミサイルポットを破壊した時のような爆発がいくつも発生していた。

「生きているか？」

返事は主砲砲身の大破という形で返ってきた。候補生のネクストに左背中の子三枚に下ろした魚の骨の形状のプラズマキャノンから発

射された青白い光を放つプラズマが装甲が薄くなる砲身の根元に着弾し、独特のESM場を発生させながら駆動部を破壊したのか凄まじい衝突音とともに上部装甲に砲身が落下した。

その時見えた候補生の機体は大昔に地上を走っていたというF1カーを模した上半身と歩くことをほとんど考慮していない細く流線的なフォルムの脚部を持った機体、旧レイレナード社のA03 ALIYAHだ。

中量機にももかかわらずこちらが搭乗している軽量機と同等の機動性を持っているがエネルギー消費が比較的激しい上に積載量が少なく非常に扱いにくいフレームのはずだ。

現に候補生の機体は右背中の杓しやくを3つ配置したような形状のライダーに左背中のプラズマキャノン、薄い長体形のような形状のライフルといった比較的軽い装備している。

彼の機体は放電でもしているような音を立てるPAを緑色に輝かせながらそのまま砲塔に着地し周辺を緑色の爆風が包んだ。装甲が焼かれ周辺にミサイル発射口が完膚無きにまで破壊される。

「AA、思い切ったことをする。」

そう言いながら背中のパルスキャノンを起動させ背後に回りネクスト技術を流用したと思われるブースターにパルスレーザーを叩き込む。当たった先からブースターが爆発しそれが連鎖し内部の燃焼構造までその爆発がおよび大爆発を発生させ船体はその勢いで横滑りを始めた。初めから大破させるつもりはない。

実の所、これは戦争ではなく労働、その労働も敵がいなくては成立しないクライアントも市場の確保のため過剰な殺戮は控え彼らにもそう徹底している。

候補生の機体はその横滑りする船体に乗ったまま警戒を続けた。そうしていると上部ハッチが開きタンク型の脚部に両腕がグレネードランチャーに変更されたタンク型ノーマルが包囲するように現れ一斉に訓練生の機体めがけ対AC用グレネードを発射した。訓練生の機体は連続QBでこれを回避し先ほどいた場所で大爆発が発

生した。

幾度か戦闘したことがあるが比較的厄介な部類に入るノーマルだ。機動力は皆無だがノーマルとしては比較的頑丈で両腕に装備されたグレネードはMTを一網打尽にするだけの威力がある。集団で配備された時にはネクストでも油断できない物に化ける。

AAの使用後でPAが消失した状態のネクストなどノーマル以下の耐久性しかない。直撃したらただでは済まないのは明白だ。

訓練生は即座に反撃に転じ空中に躍り出るとライフルでノーマルの両腕を破壊しにかかる。被弾したグレネードは変形し使い物にならなくなる。誘爆という二次被害は発生していないさすがは有沢重工のノーマルだ。

彼はすぐにOBで距離を詰めパルスキャノンで上空へ砲門を向けていた余り物のノーマルを次々に戦闘不能にする。

輸送車両から白色のスモーク弾が発射され砂煙をあげながら船体が接地した。

「敵方より降伏信号を確認、機関の停止と各ハッチの開放を確認しました。」

彼は冷や汗臭いコックピットのなかで安堵のため息をつきながらほとんど動かせない体を伸ばした。機体まで背伸びするような肩を落とすような動きをした。

「さすが熟練のリンクスだ。お前も見習っておけ」

セレン・ヘイズが賛美の言葉とともに弟子へ新たな目標を課した。「いいセンスだ。今度は味方で会えることは祈るよ。」

機体をそちらに向けるとエリアの頭部の複眼が搭乗者の心理を表現するかのようになり暗した。ネクストはリンクスが強く何かを思ったり考えたりするとその行動を再現するかのようになり動くことまあある。

そのあたりはリンクスのAMS適性や心理状態に左右されると同時に戦闘中に思わぬ効果を発揮することやQB自体がそのあたりの物を利用してあるため、その気になれば除外できるところをあえて

残している。

そのA A L I Y A Hはその言葉を聞くと少しだけ身を引き右手を上げながらお辞儀をしある程度の高度を取ってからO Bで離脱した。「何がいいセンスだ。天性の化け物じゃないか。」

いくら行動を再現することがあるとはいえあそこまで忠実に再現できるのは遙か雲の上のA M S適性を持ったリンクスだけである。

chapter 1 - 1 (後書き)

どうも、鈴木シキです。

N64時代からNキューブ時代のバイオハザードが復刻されるよ
うなのでwiiを購入しついでにシユマツシユブラザーズXも購入
した今日この頃、画像の荒さといい、初見殺しと言い任天堂は相変
わらず任天堂のままのようなのでいろいろな意味で安心しました。

それにしてもMH3GかMH3の廉価版はいつになったら発売さ
れるのだろうか、個人的には太刀が改悪されたことが許せない。

さて、おまけです。

予告した通り初代よりNXの過去ディスクに復刻されたヴァルキ
ュリアCの話でもしましょうか。

軽量機に射程距離に定評のあるスナイパーライフルとあの背中シ
ョットガンだけとシンプルな機体構成です。

NXには二つのミッションに登場し特記すべきはチートじみた連
射力を持った背中ショットガン、ライフル並みの威力と衝撃力の
ある弾をマシンガン並みの速度で複数発同時に連射してきます。N
Xで連射力が落ちていたようですが。

ともかく、一つ目のミッションでは突進してくるのである程度射
程のある武器で引き撃ちつづけるかタンクにE砲を積んで片付ける
のが無難。

何よりも問題なのは次のミッション、足場の悪い建造物上部で
この機体を相手にすることになります。

まあ、シキの攻略法ですがとりあえず最初はブリーフィングどお
り自立兵器もとい特攻兵器を相手にすることになるのでうまくここ
る地形にぶつけて弾を節約しましょう。

その内にヴァルキュリアが登場し加勢してくれます。しばらくは
逃げ回っているだけでいいです。

その後、味方だったヴァルキュリアが攻撃してきます。ただそれ

が開始されるまでの時間がミソ、周辺にいくつかエリア外から伸びる高層ビルがあるのですがそこに敵機が着陸します。どうやら着陸するビルは決まっているようなので後を追いつながら足元に回り込んでしましましょう。

そこを火炎放射機2機で燃やしてしまうのです。すると熱暴走を起こしENは無くなり飛び立とうとした時に飛べず墮ちてきます。あとは煮るなり焼く掘る(干くs(ry)なり好きにしてください。「ゲド、お前にはおおとりをやってもらう、アリーナで待機している。それとあれのレイブンは女性だ。」

それにしても、過去ディスクのキャラクターはみんな濃いひとばっかですね。濃いと言えば面倒が嫌いな人も濃かったなあ。

それでは二週間後に更新したいと思います。

chapter 1 - 2 (前書き)

そう言えば皆さん。

ジノ×アグとムー×ケロどっちが好みですか？

僕は前者かな。

そう言えばあの未使用音声収録されていれば、あのリンクス二人も同じネタにされていたのだろうか。

彼は腕の立つ新人の登場を喜びながら、自らが降伏させた輸送車両を見据えながら砂漠を見渡した。

彼がまだ学生であった頃はこのあたりはまだ荒野で砂漠になるとは考えてもみなかった。それでもここはまだましな方だった。通常サイズのビルは砂の下に沈み、高層ビルだけが地上に突き出ているような場所もある。

放射性重金属粒子であるコジマ粒子によって汚染された大地は場所によって放射能を放ち砂塵を吸ったら最後、コジマ粒子は生涯体外に排出されることなく放射能と重金属としての毒性が人体をゆつくりと蝕む、そうやって多くの木々が枯れ果て、野生動物の多くは死に絶え、今やそう言った環境が残されている場所は重工業を行うために残された地上のドームコロニーや地下に進出することで事なきを得た農業プラントぐらいた。

そう言えばつい先日、グローバルアーメンツGA社の食糧プラントに、この機体の多くのパーツを生産しているアルゼブラ社のAF部隊が侵攻を開始したとニュースでやっていた。

その内に、何処かのリンクスに排除依頼が入るだろう。まあ、アスピナに所属する彼には関係ないのだが。

「ランサー、間もなく企業の物資押収部隊がこちらに到着するとうことです。機に帰還してください。」

それを聞くと手元の操縦桿を操作しオープン回線を開き返答した。「ランサー、これより巡航出力で帰還する。」
ネクストを操るリンクスだって労働者である。こういうところで宣伝しておかないとほかのリンクスに差をつけられてしまう。

AMSに永遠と飛びつつけるイメージを送りながら機体を浮かばせ、シヨックウェーブで余計なことにならない高さまで上昇するとOBを起動させると衝撃的なGと共にPAが強引に音速の壁を突き

破り空中で待機している輸送機の方へ飛んで行った。

巡航出力は航続時間を無視して機動力を優先した戦闘出力とは逆の位置にあるもので、ジェネレーターから供給されるENとコジマ粒子の量より少ないレベルでOBを動作させ推進剤が切れるまで飛びつつけられるように出力を落として使用する状態のことだ。

おもに長距離を移動するとき使用するのだが機体ネクストに積める推進剤の量は多くないためその距離もそれほど長くはない。

5分も飛行を続ければ輸送機の影を確認できた。しかし、このままでは機に格納することはできない。せいぜい機の背に立つことぐらいが限界だ。

かといって、こんな砂地で一度機を下すなどという愚行は持つてのほかだ。ならばどうするか機にぶら下げて行けばいいだけである。そうしたうえで最寄りの基地により改めて機体を格納し帰還すればよい。

まあ、大きな戦争が起きた時にはそこで整備し吊り下げた状態で再出撃する場合もあるが彼はそれを経験したことはまだない。

「プライアルアーマ解除、速度を同調させる。ガイドを頼む」

「了解しました。」

HMDにガイドラインが表示され、機からは巨大な電磁石が分銅のように垂れ下がったワイヤーが4本ほど下されそちらへ機を接近させる。そのたびに「あと1メートル左です。」「0、5メートル機体をおろしてください。」などとオペレーターから指示が飛ぶ、操縦桿を微妙に傾け額に汗をにじませながらさらに接近する。

「まもなく、接触します。」

ガラン、ガランと音を立てながら電磁石と装甲が接触し電磁石から放たれた磁気が機体を保持する。実のところ戦闘中よりこの瞬間の方が疲れる。下手に機体が振れるとそれだけで輸送機がバランスを崩し機体もろとも輸送機が墜落することがあるのだ。

この場合、こちらが速度を合わせたがタンク型のようなごく一部の重量機体は初めから航空機で運ぶことをあきらめ、地上を輸送す

ることもあるそうだ。それもままならない場合は輸送機が速度を合わせ拾ってゆくという。

「接触を確認。ブースターの出力を徐々に落とす落としてください。」

ブースターの出力が落とされてゆく、やがて出力が重量より小さくなった時衝撃と共に輸送機が揺れた。やがて出力が0になった時オペレーターから安どにも似た通信が届いた。

「リンクス、無事着艦が完了しました。」

体を保持していたバルーンから緩衝ジェルが抜け、体が自由になる。

「AMS接続解除」

体に押し掛かっていた重さのような感覚が消失しずいぶん楽になった。あとはHMDから砂埃が舞う砂原を眺めていればいい。

そこは紅海に面したオメルサイエンス社の駐屯地、国家があった頃は激戦地になっていたのであろう。ここは非戦闘地域に指定されており半径数キロ先に別の企業の駐屯地がある特殊な場所だ。

というのも、砂嵐の発生件数が大幅に増加したことにより海運による輸送が軽視できなくなったこと起因する。加えこんな狭い海を本気で奪い合っていたら、大規模な拡張工事がなされているとはいえずエズ運河が沈んだ船や機雷で使い物にならなくなってしまいかねない、と予測された結果だ。なんとも企業らしいと言えば企業らしい。

そのころ、彼はというと航空機の格納庫で機体をパレットに座らせていた。機に同乗していた整備長らがライトと無線を使いこちらに指示をし、こちらは多少揺れてもびくともしないようにパレットに正しく座らせた。

chapter 1 - 2 (後書き)

どうも、鈴木シキです。

W鳥ができるありがたさを痛感した今日この頃、左手のショットガンがほしいですw。

さて、おまけですが。予定通りステインガーについて紹介します。非常にめんどろ嫌いな性格で断ることに「面倒」と言い放ち去っていく。

搭乗機はカスタムACの「ヴィンセン」と特殊MTの「プロトタイプファンタズマ」の二機。

前者はアレサのような扱いのかなり特殊なACだったそうだが、NXでは、高機動特化型に燃費だけはいい高機動レーザーガンと双発のレーザーブレードにデコイとシンプルなアセンに変わってしまった弱体化したらしい。

地形に機動性を殺されている上に紙装甲なので普通に戦っていれば負けることはない。

「できれば、違う形で出会いたかった。」

後者は動きの遅い上にデカイので機体中心部に装備されているプラズマガンにさえ注意していれば、適当にミサイルを撃っているだけで楽に勝てる。

ちなみにヴィンセンのフレームはNXおよびLRで使用可能であり、優秀なフレームであることが知られている。

中身の人はメイチエルと同じなんですよね。やっちなまおうかな。さてと、対大仏生デコイを確実に倒せるアセンを研究したのでこれにてしまいにします。

次回の更新は2週間後を予定しています。

追記

しばらくこんな調子が続きます。別に飛ばしてしまってもいいのですがそれをする、内容が薄くなる……。ORCA旅団員の

誰かさんじゃないですか…

機体を完全にパレットに座らせると作業用MTがクレーンでは消してまねできない複雑動きをしながらワイヤーで機体をパレットに固定していく。それが終われば高所作業車のバスケットが人に乗せて機体の首筋の辺りに添えられた。

首の後ろの辺りの装甲がスライドしあまりにも狭いコックピットブロックごと搭乗席が押し上げられた。

「お疲れ様です。」

鎧のように体を固定していた固定具がガバと外れ、ビラビラとベルトが縫い付けられた分厚い耐Gスーツを着こんだ屈強な体があらわになり。HMDを外す、そうしたうえで体をほぐすとオペレーターの方に向き直り口を開いた。

「ピルクの損傷の度合いは？」

「若干、ミサイル爆風で装甲が焼かれた程度になります。問題ないでしょう。」

ふと、首筋に手をやりシリコン素材で覆われたAMSの端子をなでた。

「そうか了解した。」

パレットの上にワイヤーで固定された青いネクストは無言のまま鎮座し、両手のマシンガンもしっかりと固定されている。

「合成燃料が満タンになり次第、コロニーアスピナに帰還しますのでそれまで機内で待機しててください。それから駐屯地の皆さんがピルクと一緒に写真撮影をさせてくれ。と言ってきています。」

まあ、珍しいことではない。MTとノーマルを駆け砂まみれになりながら戦っている最前線にしてみればネクストとリンクスは雲の上の存在、敵にすると手をつけられず同時に居てくれるだけで非常に心強いものだ。そんなモノが駐屯地に居るとなれば必然的にお祭り騒ぎになる。その上、訓練しかしない駐屯地となれば相当暇にな

るのがそれを助長していた。

ふとパレットの周囲を見回してみると、作業着を着た整備兵やスタイリッシュな軍服を纏った下士官、鍛えられた肉体が印象的なMTおよびACパイロットがわらわらと集まり始め、がやがやと騒ぎながら、ある者はこちらを手の平大の多機能携帯電話で撮影し、ある者は談笑に花を咲かしていた。

ふと、口が綻び、口が弾む。

「ランク17の粗製がそんなにすごいか？」

「その位が一番多忙なランクでしょう。」

位が低すぎると雑用レベルの低所得のミッションしか受けられない。高いと企業が出し惜しみし、ミッションより企業からの生活保護で生きていく方が効率が良くなる。結果的に前線での知名度は上がり上位ランカーより知られる場合もある。そういった意味ではいちばん潤っているランクといえた。

手に持ったHMDを操作しコックピットブロックを装甲の下に格納すると、バスケットに搭乗しゆっくりと地面に降りて行く。足元で歓声が響く。

悪い気はしなかった。そしてこんな歓声を聞くたびに思うのだ。

「もつと、上を目指さなくては」と、自分にもつと実力があれば必然的にアスピナ機関とコロニーアスピナの知名度も上がりより高い収入が得られるようになるだろう。そうなればアスピナの防衛部隊の予算も上がり、より治安が良くなる。

そしてそれは、オーメル陣営の兵士の生存率を上げることにつながる。

バスケットから降りると彼らは前に出てやれ写真だの、どんな暮らしをしているかだのと質問を始めた。

これも今のような比較的平和な場所だから起こることだ。リンクスになれる“可能性”のある人間は1000人に1人いるかないかともいわれるほど少数なのだ。仮にAMS適性があっても精神的な面で不合格とされればそこで落とされるし、リンクス養成所に入

るにはそれこそ1000C^{コム}単位の費用が必要になる。その中でも淘汰されるため。リンクスという職業に就ける人間は非常に少なくなる。

そうなるとその価値は計り知れないものとなり、かりに通常戦力相手に敗走するレベルであつても数000C^{コム}の捕虜交換費を払つてもおつりがくる。

必然的に士官にはこう教え込まれる。「リンクスに部下を近付けるな。」

ズケズケと体格のいい初老の男が大声を上げながら格納庫に入ってきた。

「貴様ら、何をやっておるか!!」

集まっていた者たちが蜘蛛の子を散らすようにその場から逃げだしていく。これも企業の軍だから許されることだ。

「逃げられましたね。」

「ニーナ。分かつて言っているだろ。」

表情はビジネススマイルのままだが、目の奥をきらきらさせている時点で魂胆はまるみえだ。綻んだ口が戻らない。

初老の男は恨めしいような憧れるような表情を浮かべながら、軽く敬礼しその場から去って行った。

「パレットの格納開始、作業員は安全地帯まで退避してください。」

MTからそんな声が聞こえ、回転灯を回しながらサイレンを鳴らし、輸送機に機体が押し込めてゆく。

「とりえず、対Gスーツを着替えてくる。」

バスケットのそばに、作業着に身を包んだガタイのいい男が歩み寄り口を開いた。

「給油はすぐに終わりそうだ。滑走路が空くまで待幾だな。」

「ザン、いつも済まないな。」

「お互いさまよ。あんたが報酬を稼いでくれればこっちはうまい飯が食えるだろ?」

整備長のザンはそう言いながら、ウォッカの入った水筒を煽り、

飲まないかと手振りで誘った。飛びつきそうな彼にシスが釘をさす。

「アスピナへの出発時刻は一時間後になります。酒など飲まれないように。」

「そんなモノ飲んでも、ナノマシンが分解しちまうよ。」

そう言いながら、機のロッカールームへ足を運んだ。

AMSは体内に注入した有機物でできたナノマシンを活用し信号の受け渡しを行っているのだが、アルコールなどで信号に齟齬が出た場合どんな動きをするか予想できなくなるため。安全管理の一環としてアセドアルデヒドとアルコールを分解するナノマシンの撮取もリンクスには義務図けられていたりする。

どうも、鈴木シキです。

オペ子の命名法則が無いかと少し調べてみたら伝説のロボットア
ニメGの女性陣がモデルかもしれないという話がありせつかくなの
でオペレーターの名前を変更し、ウィリモのバッテリーがデット
ライジング、プレイ中に切れワンミスした今日この頃。

あ、おまけを始めます。

まさか、大仏戦をクリアしていないという人は少ないと思いま
すがクリアできない事が無いように用意されたと思われる救済ラ
ンカーにしてACC3最強のカイザーのアンチアセンを紹介しようと
思います。

まず、カイザーはたいがい場所は開幕早々に合計8機ミサイル
を連続発射してきます。これをよけきれないと開幕早々に熱暴走、
冷えたところにはAP差3000なんてことがざらにあります。とい
うかこれだけで死ぬる。

ましてや相手は小ジャンプ移動する軽量機並みの高機動重量機な
のでこうなってしまうっては削り合いではまず勝てません。

接近するとショットガンと投擲銃のダブルトリガーで猛烈なイン
ファイター型に化けます。

つまり、引き撃ちに徹すればつねにサイトにおさめられ、ミサイ
ルも封じられるということ、そこで僕が導き出した答えですが。

まず、ある程度の機動力のある機体を用意し、それに火炎放射機
と500マシあたりを積みましょうエクステンションにはSLのO
P機も装備しているステルスを積んで、というよりこのための用意
されたのでは？。

なお、立ち回りですが開幕すぐにステルスを起動しミサイルを封
じましょう。そして一気に懐に飛び込み至近距離から炎と銃弾を浴
びせます。そうするとインファイター型に戦い方が変化するため、

そのうえAIならではの鬼畜サイテイングで大体の位置に弾を撃つてきます。うまくいけばこの時点で熱暴走を始めるためかなり削れます。

そうしたらステルスがきれたタイミングで引き撃ちを始めてみますると食らいついてくるためロックによる位置把握をしながらつかず離れずの距離で炎と銃弾を浴びせてやりましょう。

いちよう回避運動はしてきますが、すぐに自分から炎を浴びに来ます。

結果 熱暴走 回避 ある程度冷える 炎を浴びる 最初に戻る。のループが成立しよっぽど下手でない限り勝てるはずです。

さて、今度のおまけはSLで登場する名前自体がある意味死亡フラグだったレイブンでも紹介したいと思います。

それでは、今度の更新も二週間後を予定しています。

3第萌え嬢（リリアム、メリーゲート、エイ＝プール）も出せないこともないですが出します？

コメ返信

AC Wikiで確認してきました。

確かに『ヴィクセン』と『メイツェル』でした。後日修正しておきます。

輸送機は砂漠を眼下に飛行していた。

といつても、今の時代岩か、礫が、砂かという違いはあつてもどこへ行つても砂漠である。

機内は過ごしやすい気温に保たれ、暇を持って余し操縦席の後ろの席で紙のように薄いディスプレイを片手にネット上から落した新聞を読んでいた。

書かれている内容は今とそれほど変わらない。アスピナとかかわりの深いオーメルサイエンス所持のクレイドルやコロニーで起きた事件やタレントのスクランダル。中小企業の株価の変化、先日中に起きた戦線の変化、あとはアスピナでの御当地情報が掲載されているぐらいだ。

「もう間もなく、アスピナに到着します。」

身を乗り出し確認すると砂砂漠と大河が接する場所に紫色に塗られたドーム状の人工物が確認できた。といつてもそのサイズは半端ではないその高さは200メートル近くある上に直径は2キロほどある。町が余裕で収まる広さがある。さらに上部には東西にのびた空港があり、砂嵐になればまとめて格納できるだけのスペースが広がっている。

そこから少し離れたところを重装備の軽量二脚機と、羽のように見えるマルチレーザー砲を背負った中量二脚機が空中戦を繰り広げていた。そのマルチレーザー砲は天使の翼のように見えることから破壊天使砲などという俗称が付いているがこれは、ノーマルパイロットらがその性能を皮肉ってつけたものらしい。

「なんだあれは」

副操縦士が驚きを口にし、シスネがレーダー上の識別信号を確認し結論を出した。

「アステリズムとノブリス・オブリージュですね。」

「なんだ。あいつが来ていたのか。」

「ということは……、今晚は面白いことになりそうだ。口が綻び想像するだけで酒がすすみそうだ。機長がコンソールパネルそ操作し回線を開いた。」

「管制塔、こちら第923L号、大型輸送機。アスピナ機関のリンクス『ランサー』とその関係者4名とネクストAC『ピラム』を乗せ接近中、滑走路の使用許可を願う。」

「こちら管制塔、4番滑走路の使用を許可する。模擬戦闘地域を迂回して接近せよ。」

「こちら923L号了解。」

そうやって通信を切ると改めて二人の戦いを見た。両者一進一退、機動力でかき回し武器を撃ち捨てながら常に自分の距離で戦うアスリズム、右手のライフルで牽制つつ隙あらば背中への破壊天使砲で致命傷を狙うノブリス・オブリージュ、模擬戦用の低出力レーザーと模擬弾が交錯するたびにQBで巧みにかわし直撃弾を発生させない。

はたから見ればただ撃ち合っているようだが、そこには努力だけではどうにもならない天性の才と自らの戦い方への自信がにじみ出ている。

その様子を見ながら一つのことを思った。「いつか見ている、いずれはランク10以内に入ってる。」と。

二人のリンクスが両者球切れとなり、小休止をしに専用の区画に入っていく時間とこちらの機体が同様の区画に運び込まれる時間はほぼ同じだった。

今度は楽な服装で武装を外したピラムに乗り込み、ハンガーへと操縦桿を操作しながら機体を歩かせていく。

HMDからは先んじて到着していた。速さだけに特化したアステリズムと象徴としての意味の強いノブリス・オブリージュは作業がしやすいようにハンガーに座らされており、装甲に余計な重量がからないように上から頑丈なワイヤーと強力な電磁石で吊り下げら

れていた。

機体の周囲には専属のスタッフが機体の整備を開始し、その足元にはジュリアス・メアリーとジェラルド・ジエンドアンが模擬戦の様子を記録した映像がながれるモニターにかぶりついていた。

よく見ればフラジールを操るリンクス兼アスピナ機関の名誉研究員のCUBEの姿もある。どうやら二人のデーター、特にAMS関連のデーターの内容についてほかの研究員と共に議論をかわしているようだ。

さらにその隣には完全に別規格のハンガーに立った状態で固定されたアスピナ機関が誇る実験機フラジールの姿が確認できた。その横には『ピラム』用のハンガーがあり、すでに推進剤とコジマ粒子を抜き取る作業を行うための専用車両がスタンバイしていた。

なんとといっても、推進剤は可燃物、コジマ粒子は放射性廃棄物並みにたちの悪い金属粒子であることにはわりはない。保守管理という面では当然といえる。

機体を座らせると、作業員が手慣れた様子で作業を始めたのだ。た。

格納庫近くにフリーフィングルームには、自動販売機や観賞用植物が設置され、ソファアに腰掛けで待機していると、収支報告書をもったニーナが現れた。一回の出撃にかかる費用が修理代と弾薬費だけであるわけもなく、輸送機のチャーターに始まり、推進剤やPAの形成に必要なコジマ粒子などの消耗品、場合によれば細部のパーツの買い替え費用などんでもない額が動く。

「今回の報酬は40000Cだったな。いくら消費した？」
「いつもと同じほです。」

ニーナは詰まらなそうに書類を手渡した。書類といっても極薄のディスプレイだ。それを受け取り画面をスクロールしていくとアスピナに持つていかれる額と自分の手元に残る額が記入されていた。

「まだ、LATORNAラトナのCOREには届かないか。」

「また、機体を組み替える気ですか？」

「ソフレロSOBREIROをあれだけ組み替えたんだ。今に始まったことでもないだろ」

機体を強化していくたびに自分も強くなれる気がする。そんな高揚感が屈託ない笑みにかわり、ニーナはあきれ顔で笑いながら答えた。

「でしたね。」

chapter 1 - 4 (後書き)

——様の動画を見ながらもネームレスを倒すまで五日もかかってしまった鈴木シキです。

ところで皆さん、『ラインの乙女』を撃破した動画はご覧になりましたが？

どうにも、『ラインの乙女』視点の動画も上げられたみたいですが教授自ら削除した模様(本日)。

え？何それだつて？今すぐ『ラインの乙女』でグーグル検索してみてください。これだけならアカウント無しでも見れるはずですよ。

さておまけです。

SLのミスター 噛ませ犬、某所では登場早々に切り捨てられているシューティングスターについてです。

軽量二脚に中量EOを乗せ自身はブレードとパルスガンそしてロケットを装備し積極的にボバブレを狙ってきますが、EOの方が怖い。

何気よく動く(行き過ぎる事がほとんど)ので初心者は苦戦するかもしれませんが落ち着いて引き撃てば初期ライフルでも十分いけるはずですよ。

そしてこの言葉を贈ろう。

「こいつに苦戦するようじゃ、このゲームを三月(LRP発売予定月)までにクリアできないぜ。」

さて、次は登場が早すぎた？もどきでも紹介したいと思います。

追記

活動報告で『ブロク的な何か・・・』始めました。あまり期待しないてくださいね。

AMSとは、本来兵器を動かすものではなく身体障害者の社会復帰のために開発されたシステムだった。

有機物で造られた自己複製可能なナノマシンを体内に注入し、それがシナプス間の伝達物質を感知、電流へと変換しそれを制御システムとやり取りすることで、文字通り人間と機械を一体化することで従来の義手では再現できないレベルの高い義手などを作れるはずだった。

しかし、脳に電流を流すという特徴のため使用者に精神的な負荷がかかり本来の意味では失敗作となった。

そのため、AMSによる負荷を受けにくい体質のをしめすAMS適性がいくらか高かろうとも、このストレスによって総合的な適性が低下リンクスを引退する場合もある。

ここ、コロニーアスピナはアスピナ機関の管理の元、同技術とネットワーク技術を研究するために地上に残されたコロニーだ。残された理由はいくつか挙げられるが、最も大きい理由は高度7000mの空でACのような重いものを本気で研究するのは原価割れが過ぎたためだろう。

このコロニーを砂嵐と高熱から守るために建造されたドーム上層部には空戦のノーマルや空戦MT部隊が駐在する空港と、ネクストACを保管するためのガレージがある。

さらに、そこにはアフリカ大陸にあるアルテリア施設にもしものことがあった場合、急行できるようにいつでもスクランブル発進可能な状態を保たれたVOBや、アスピナ機関の実験段階の新型AMSの実用試験を兼ねた収入源の一つであるリンクス派遣業に必要な設備が一式そろっており、軍事関係者はここで寝泊まりしている。

かつて地上にあった都市は再開発され、オーメルグループとオーメル・サイエンスとかかわりの深いインテリオル・ユニオン社の外

注がネクスト技術を研究、開発するための工場や実際に動かすためのアリーナなどの施設が所狭しと並びそこで働く労働者の胃袋と精神を満たすために大規模な歓楽街が広がっている。

さらに地下に下りていくと、コンピュータ管理された大規模な農業プラントが広がり、植物は栄養素が溶かされた水に根を張り、赤紫色の光を浴びてすくすくと無農薬で育ち、食肉はそこで育てられた家畜用作物とビタミン剤で健康に育てられている。なおここで生産される作物だけで1年は自給自足できる造りとなっている

最下層部にあるのは藻を利用した空気洗浄施設兼、炭化水素工場やコジマエネルギープラントだ。いくら電気エネルギーが便利でもやはり炭化水素のかわりは効かない。もはや石油の代用物すら大量生産可能なのだ。

単純に済ませれば、宇宙コロニーのテストケースとして再開発が行われるのではないかと憶測が飛び交ったほどに、この施設は経営せいじの仕方次第で半永久的に自給自足できる造りとなっている。

時は夕刻、日は砂丘に沈みかけ夕陽が砂漠を小麦色に染めていた。「それで、整波装置に砂とコジマ粒子が堆積しているから、一度バラすということでもいいのか？」

ランサーは防護服姿の整備担当者たちが検査をしているピラムの前で検査履歴を片手に持つザンと話し込んでいた。銀色の防護服を着込んだ人間に青い巨人が各所を検査されている光景は飴玉に群がる有りのようにも見えた。

「おう。第一、A級消耗パーツ指定されているアクチュエータ複雑系の交換もせねばならん。」

そういうところは他と比較して頑丈に作られる事が世の常だが、負荷がかかるところには負荷がかかる。ネクストの整備と言ったらQBの多様で酷使されているブースター関連の部分および足首や股関節など超重量がかかる部分がメインとなる。

ザンは検査履歴を一瞥しさらに付け加えた。自分が見てもさっぱりだがザンの眼にはまるで写真のように見えていることだろう。

「もしかして今度の依頼でAAの余波を浴びなかつたか？」

心当たりはある。ストレイドというACと共闘したとき、味方の位置も考えずにAALIEYAHフレームのPA性能を活用した高威力のAAを使用してこちらも巻き添えを貰うことになった。

しかし、その程度で壊れるほどネクストACは脆くはできていない。おそらく長い間使ってきたツケが貯まりコジマ粒子を循環させるために使用している磁気に異常が生じていたのだろう。

「そう言えばそうだな、任せるよ。」

「二週間以内でいいんだな？」

「動かす時には呼んでくれよな。こいつは俺以外では動かない。」

冗談混じりの笑みを浮かべながらザンにくぎを刺す。そもそも生体認知のセキルティーが存在するため自分以外か乗っても起動すらないのだが、ザンは笑みを浮かべ防護服を着込んだ部下にインカムを操作し作業内容の変更を伝える。

「それじゃあ、用が無いならあがらせてもらっていいかな？」

「おう。お疲れ様」

たしか、ザンたちの宿舎のクーラーボックスから酒が無くなる頃だったか、屈託ない笑みを浮かべながら付け加えた。

「あとで上手い酒を差し入れるよ。」

「できたら、日本酒がいいな。」

さすがに国家が無くなってもこのあたりは変わらない。個人的にはウオッカのような強い酒が好みだがいつもの事だ。

「分かっているって、銘柄もいつものでいいんだな。」

「おう！！」

景気のいい返事のあと、その場を後にする。そうした後、ガレージを出ようとした時ピラムの方から歓声が聞こえた。ザンが新しい酒が奢おこられるという話が伝えられたのだろう。

chapter 1 - 5 (後書き)

どうも、私物のパソコンがピーピーピー、ボボボツした鈴木シキです。

早いところ販売店に持っていかねば大事に触りそうだ。そういえばこの頃兄弟にPSP持っていかれて触れていないんですよね。3年目だしそろそろ新型PSP買おうかな。

おまけは想像を絶するネタ機と化したマーウオルスについてです。ご存じのとおり、軽量機にカラサワにグレ二機、そして月光という小説版ニンボール決戦仕様をモデルとした超ビジュアルアセンで小説に登場しましたが、3PではスタンダードEライフルに月光完全空気のインサイドとEO、おまけに無駄に飛びまわるAIと下手な初心者よりも動きが悪い。

本家ニンボール並の動きを期待した人は少なくないはず。

そもそもAIが行うトップアタックには完全に対策が立てられているとはいえ、せめてSLなら軽E砲が追加されてほかとニンボールのパルスガンに酷似したパルスガンが復刻されているので、見た目だけは少しはマシになったかも知れない。

なお、彼が装備しているヘッドパーツだが、重さに見合わない軟さとほとんど全ての機能を内蔵した完全な廃産仕様（いくらなんでもやりすぎです。フロムさん）であることで知られている。漢字で表記するなら『丁』頭といったところだろう。

ミッションでは使えないことはないが、積載量に余裕のある機体なら固い干頭として使えるのか？

さて、次回の投稿は二週間後を予定していますが、どうなるか分かりません。

追記 PC復旧しました。それと面白そうなので『風雲 新撰組 幕末伝 P』を購入しました。やっている感覚はもう少し視野が広がったら臨場感あったかな。それ以外はこれといった汚点は見当

たりません。

大体クリアしたらどこかで報告しようかと思えます。

ここ、コロニーアスピナは他の場所と比べて驚くほど潤っている。これにも理由があるのだが、一つはネクストという消費があること、さらにネクストが100000C単位の安定した収入を得るため、二つ目は人材を含む大企業の合同出資があるために、そのほとんどが労働人口であるためだ。

食糧は配給制ではなく、店頭に並び、映画館をはじめ国家支配体制の黄金期に建造された大規模な博物館や美術館さらには大規模なアミューズメント施設まである。

歓楽街には、終業後の労働者が集まる居酒屋や普段の食事に使われるレストランやカフェなどが軒を連ねている。

軍事施設と住居区をつなぐエレベーターが下りていく。四角いエレベーターには腰かけが常備され外を覗ける窓はMTの機銃を受け止める頑丈さを持つ防弾ガラスだ。計画的な都市開発がなされた町並みは暮盤の目のようでは有沢領にあるというキョウトという街を思わせる。

住居区の階層にあるエレベーターホール周辺には終業を迎えるであろう軍事関係者を待ち構えて複数のタクシーが待ち構えていた。そのうちの一台に予約を入れておいた真黒なタクシーがあつた。

住居区から天井を見上げると鍾乳洞の中に居るように思えるのはなぜだろうか。直径二キロ近いこのドームを支えるために一定距離ごとにたてられた柱は鍾乳石だとすると夕陽を模した光を放つ天井のLED群は洞窟を作り上げてきた水の一滴だろうか。

その天井は完全なドーム状ではなくある一定の高さで傾斜が緩くなりアーチ構造になっている。これは上部にある軍事施設の重量を吸収するためだ。

今は動きやすいラフな服をきている。ふと車の往來を見ながら肩から掛けている護身用として渡されているフルオートでの連射が可能なハンドガンの重さを確認した。聞く所によれば銃社会として知られていた大国でもこのような銃の所持は国の最高指導者を護衛するSPぐらいしか持てなかったものらしい。

つまり、リンクスにはそれと同等もしくはそれ以上の価値があるということだ。ただし、これを人に向かって使用したことは無いし、できればそんな状況に飛び込みたくなどない。命がけの戦いをするのは職場（ミッション）の中だけで結構だ。

黒いタクシーに近づくと馴染みの運転手がビジネススマイルを浮かべながら運転席から立ち、「お待ちしておりました。」といつも通りの言葉をかけた。

「じゃあ、いつも通りの場所へ。」

「かしこまりました。」

タクシーのドアを開け、後部座席に乗り込む。これはただのタクシーではない。ハンドガンぐらいなら受け止められるように装甲車化されたタクシーで、この運転手も以前は戦場で軍用車両をはしらせていた元軍事関係者だ。

職人芸すら感じる落ち着いた雰囲気をもつ車内には手に収まるような小さなシャンデリアが光源としてあしらわれ、床に敷かれた絨毯やベルトに至る内装のすべては火炎瓶を投げ込まれても引火しないような耐火素材であり同様の素材で編みこまれたシートは標準よりも大きめに作られている。

座席に座ると、柔らかなシートに体が沈み体に合わせて生地が変形していった。運転手が運転席に座りサイドブレーキを上げてアクセルを踏むとタクシーは、今や過去の遺物と化したエンジンの動作音を模した音をスピーカーから出しながら夕焼け色の光が注ぐ街へと出発していった。

「ランサーさん。今回の仕事はどうでした？」

「どうも、こつも話せない事は知っているだろ。まあ優秀な新人に

会えたかな。」

これは所謂、守秘義務しひひつるというものだ。運転手は笑いながら相槌を打ち、二人で雑談を始めた。

実質の移動時間は15分ほどしかかかっていない。十分に歩るいでどうにかなる距離だがやはり、背に腹は変えられない。ここの治安はいい方だが超高所得者であるリンクスをねらう犯罪が無くなっているわけでもなかった。

「着きましたよ。」

そこは年収が10万Cを余裕で超えるリンクスが入る場所とは到底思えないような歓楽街の喧騒から少し離れた所にある小さなバーだった。すぐそばには工場の労働者とその家族が暮らしている住宅街があり、傍目にはなぜこんなところにつぶれないで店があるのが不思議になる。

タクシーから降り、笑顔で料金とお礼を込めて多額のチップを運転席の窓越しに手渡した。

「いつも悪いな。」

「いえいえ、それでは一時間半後にお向かいに上がります。」

「よろしく。」

タクシーがそこから走り去って行った。バーへと体を向け出入り口であるドアを開けた。カラncカラncと心地の良いベルと音が鳴り、マスターが「いらつしゃいませ。」といいながら軽く会釈をした。

ほかには客は居らず店内にはクラシックが流れ、オレンジ色の優しい光が店内を照らしている。

「マスター、いつもの。」

マスターはにっこりと笑いながら、一つのグラスが被せられた飲み残されたウオツカの瓶を棚から取り出し、グラスをひと洗いするとそこに砕いた氷を入れウオツカをなみなみと注いだ。

「どうぞ。」

「ありがとう。」
「
お礼を言い、琥珀色の液体を一口すすった。

chapter 1 - 6 (後書き)

どうも、鈴木シキです。

「ばかな、こんなに伸びるはずでは。認められるか認められるかこんなこと・・・」

でなんか言っていますますがマジでそんな状態です。というより一章目でやりたかった事を次でようやく書けました。まあ、皆さんなら大体予測できているでしょうけれどね。

さて、おまけです。

今回はSLの隠しランカー、ネームレスについてです。

このACは、旋回性能に優れた準軽量機にダブルマシという至近距離ではデタラメな火力を持っています。逆にそれが弱点でもあります。

それは致命的な戦闘持続時間。適当にいなしてマシンガンを撃ち切らせてしまえばこっちの物、背中の武器の命中精度はたかが知れているので煮るなり焼くなり好き放題できます。ちなみにターンブースターはほとんど飾りです。

結論は例のごとく、ここまで来たあなたなら確実に勝てる相手です。

さて、今度はSLで先生と崇められる方でも紹介しようと思いません。

琥珀色の液体を啜りながら、ランサーはほろ酔い気分に戻っていた。入って来てからというもの今店内にいるのは5名ほどの客とマスターだけだが、こんなところに居るのはそういう環境に居たくて来ている人ばかりなので当然と言えば当然であった。

ここに来ているのと言わば願掛けのようなもので、ミッションが終わってから必ず来るようにしている。心もとない願掛けであるが「またこの酒を飲める」そう思うだけでずいぶんと気が楽になるのは確かだった。

駆け出しの頃はミッションの報酬を使って700・0mCミリコートムの酒を5Cコートムで出すような店で関係者と共に飲み明かしたのだが、今にして「思えば何をやっていたのだから」と馬鹿らしくなってくる。

「いら！？しゃいませ。」

普段は微笑を浮かべながらグラスを磨いたり、客と雑談をしたり、稀にはあるがオルガンを弾いたりしているが少なくともランサーはこのマスターが気を動転させる所を始めてみた。

ほかの客にも静かな動揺が広がり、カウンターに背を向け振り向いてみると黒のワンピースがよく似合うジュリアス・エアリーと白のスーツがよく似合うジェラルド・ジェンドリンが腕を組みながら入って来ていた。

心なしかメアリーの強したたかな胸元が心なしか豊かになっている気がするが、物凄い着膨れする対Gスーツ姿しかほとんど見たことがないためだろう。おそらくは気のせいだ。

メアリーに押される形でジェラルドが隣の席に座る。

「お邪魔かな」

そう言いながらおつまみの入ったお皿とグラスを持って席を変えようとした時、同じようなタイミングで声を掛けられた。

「気にするな」

「気にすることではないよ」

二人は顔を見合わせ、クスリとほほ笑み合った。ジェラルドは「マスター、おススメは何かな」と口出した。

以前、「落ち着いて時間の流れを楽しめるような店はないか？」と聞かれこの店を二人に紹介したことがあったが本当に来るとは思ってもみなかった。

その様子は見ているだけで心が温かくなるような光景だった。

二人は笑いあいながら、或いは小突き合いながら酔いを楽しんでいるようだ。こんなアットホームな事は高級バーでは倫理的にできないだろうが、命懸けの職場で日々を過ごす彼らにとってはそれはどんな酒より旨いまさに天上の美酒なのだろう。

そうしている間にほほを酔いで赤くしたエアリーが改まって口を開いた。

「なあ、ジェラルド。それからランサー、二人とも宇宙を見てみたくはないか。」

ランサーはボーとした頭で宇宙開発の話など有っただろうかと思いきこしてみていた。国家解体戦争後間もなくの間は企業もライバル他社のマストドライバーを一基破壊するのに大量の自爆兵器を送り込む程に宇宙開発には積極的だった。

しかし、最近になってそんな話はめっぼう聞かなくなり企業も宇宙開発に充てていた予算をA Fの開発と生産に振り向けるようになってたはずだ。

「ジェラルド、お前なら企業が宇宙開発をやめた理由を噂程度に聞いているんじゃないか。」

「国家政権時代に発生したケスラーシンドロームが原因だ。と聞いている。」

「宇宙のゴミ、デブリが軌道上を埋め尽くしてしまつてその軌道が

使えなくなるあれか？」

ジェラルドは肩をすくめ、あくまでも噂だという意思を示した。

「だがな、ジェラルド。それならクレイドルが高度7000mで飛んでいる理由が説明できないだろ。」

「重いからではないのかい？」

クレイドルはどんなに小さくても総延長1kmはある。その上、数千万単位の人間がその中で暮らしているのだ。その総重量は計り知れない。

「残念ながらそうでは無い。原因はもつと別のもの、アサルト・セル衛星兵器であると聞いたらどう思う？」

「それなら、面白そうだ。その排除で食いつぶれなくなる。」

「残念だが、ランサー。お前にはその依頼は入ってこない。我々がそれを排除するからだ。」

ジェラルドは重々しく口を開いた。

「我々……。組織で動いているということかい。」

ジュリアスが周囲を気にしながらこちらに滲みより、耳打ちするように促し二人はそれに答えた。

「我々は、エレンベルグ衛星軌道掃射砲を使い軌道上のアサルト・セル衛星兵器を排除し人類に宇宙への道を作る。動力の確保と誤射の危険からクレイドルを守るためにに主要アルテリア施設を制圧しクレイドルを地上に下ろす。

「については二人に我々の側について貰いたいのだ。」

「さて、そんなを事したら数億もの人間が飢え死にするぞ。」

ジェラルドが小声で食つてかかり、ジュリアスはジェラルドの腕を抱きかかると先ほどの言葉に別の言葉を付け加えた。

「私たちの子供の世代が地上と大気の汚染から逃れ、幸せに生きるためだ。協力してくれジェラルド。」

ジュリアスはそう言い切るとジェラルドの腕をさらに強く抱いた。

ジェラルドは口を紡ぎ場の空気を切り替えるために俺は口を開いた。「俺はリンクスだ。正式な依頼であれば何時でもそちらについてやる。」

「ジェラルド・・・」

ジェラルドは苦い顔をして黙りこんだ。彼の中ではアルテリア・カーパルスを守護する者としての義務感と一人の人間として子供たちの世代の未来を危ぶんだ時の気持ちかせめぎ合っているのだろう。

chapter 1-7 (後書き)

どうも、鈴木シキです。

製造業は年始早々に修羅場だぜ。(残業原則禁止的な意味で)そういうえば皆さんあの一分アニメ見ました？。

あのクオリティー、粗製のリングズでゴミナントな僕にはうらやましい限りです。AC Wikiにもそれに感銘を受けた同士がちっちゃなACを使ったアニメの製作に乗り出したようで、こんな駄文を上げている者としては負けられないなんてことを思ってみたり。

比べるだけ無駄だったことも分かっているんですけどね・・・。

さて、おまけです。

今回はSLのテスト先生、ラストバーニングについての紹介です。重量機にカラサワ、実盾、デュアルミサ、肩連動ミサとルーキキラーなアセンだがその実力は確か。

ふざけていると序盤のミサイル弾幕で乙、なんとかしのいでも今度は至近距離からのカラサワが突き刺さる。

ゆえに、彼に正面切って勝てるようであれば中級者を名乗っても恥ずかしくない。主な対策はそのほかの重量機と同様に旋回し続け背後を取り続けること、デコイなどでミサイル対策を取っておくことでしょう。

さて、今度の更新も二週間後、次はウサギ頭の紹介でもしようかと思えます。

P.S、

この場を借りてメッセージを、明栄先生、生きていますか？僕がやるうとしてしている事と、先生がやるうとしていた事が多分同じなのでその話をしたいのですが。もし生きていたら返事を下さいませんか。

ユニークアクセスして下さった1000人のみなさんこんにちは。

僕個人でもいくつか考えてはいるのですが、一人で考えることには限界があります。そこで、この度はストーリーリー中盤で行うミッシェンなどを募集したいと思います。

特に、制約は付けません。皆さんのフロム脳成分を作者へのメッセージ欄や本来、感想を書く部分にぶつけて頂き、それを反映する形をとって行きたいと考える所存。

勿論、批判やアンチの類でも構いません。それが無いと、何処がいけないのか自分では判別しきれないので。

それでは最後に「皆さんよりの高濃度コジマ粒子（熱いメッセージ）を心よりお待ちしております。」

ジェラルドの立場はリンクスの中でもかなり特殊であると言いつけるだろう。

ローゼンタール社のリンクス養成校を出て、そのすぐ後に『アナトリアの傭兵』や当時の？1らも参戦し、最大で7機ものネクストが入り乱れる大乱戦となった『ピースシティーの戦い』で復帰不可能と判断されたレオハルトに変わり、ノブリス・オブリージに搭乘することになった。

まさに、リンクス離れが進んでいる現在の状況では珍しい、筋金入りのエリートであるわけである。

それゆえに、愛社精神も強く持っている。さらには、『大いなる義務』の名を冠す彼の愛機がその意思をさらに強固なものに変えているともいえた。

だからと言って、このままの体制では危ないという自覚ぐらい彼にもあるはずだ。人類を宇宙へ上げ新たな楽園フロンティアを構築する。その意思には感銘を受けるものがあるし新たな楽園フロンティアの構築にあたっては企業間や中小諸勢力間の武力交渉を伴ういざこざが発生し、新たな職場シモンが用意される事は想像に難くない。

その過程で多くの人が死ぬことになるかもしれないが、消費するための経済戦争が続けられているこの社会では珍しくない事、リンクスとしては負になる要素はまるで考えられない。むしろ正に働くはずだ。故に私はそれに協力すると宣言した。

「本当にすまない。ジュリアス。私はそちらの力になれない。」
ジュリアスは残念そうな顔をしたがその表情はすぐに喜びに変わる。

「そうか……。だが、私は嬉しい。それでこそ私が惚れたジェラルドだ。もし、この計画が成功して二人が生き残っていたのなら私と沿ってくれるか。」

男を見せる時だぞ。とジェラルドの肩をやや強めに叩いた。
「もちろんだとも。」

その言葉を聞きながら、「彼女とは職場で会いたくない。」と本気で願った。

上位のランカーになってくるとコジマ汚染の心配がない一等地に芝の庭に観賞用植物が植えられた豪邸を構えていたり、弾道核ミサイルのサイロを改造したようなガレージとソルディオス砲の直撃も耐えるようなハッチでガードされた核シェルターじみた地下の大邸宅を持つたりしているが、リンクスの寝場所は立場にもよるが、基本軍事関係の宿舎だ。

ちなみに良くも悪くも中堅リンクスであるランサーの部屋は軍事施設の一角にある上級士官用の相部屋を一人で使っている。

本来、二つのベットが並ぶ1LDの部屋はベット一つが撤去され、兵装や弾薬、消耗パーツ、さらにはミッションの受注の商談をブローカーと行うためのリビングが用意されており。

個人的思考を凝らした調度品は、ポップな或いは可愛らしい小物や人形はニーナからは子供っぽいのだ、20を超えた男の部屋だとは思えないだの言われているが、これが性分である以上仕方がない。まあ、インテリオルのブローカーにはそれなりの評価を受けているのだが。

バスローブを着こみ、ユニットバスとリビングを繋ぐドアを開け髪をタオルで拭きながらリビングへ出る。

机に埋め込まれたパソコンを起動し、新着メールの有無を確認する。その大きさは国家政権時代からほとんど変わっていない。いつの時代も使うのは人、いくら小型化できたとしても扱いづらくては何の意味もない。

大半は会員登録してある接客業社の宣伝だが、オペレーターを介してブローカーからの商談依頼のメールも混じっている。その中の

一通は個人へのプライベートフォルダーに送信されたおり、ここへメールを送信するアドレスとパスワードを知るのは血縁者とオペレーターとの二ナやごく親しい友人だけだ。

送信元はすら暗号化されているということは公にできないようなたとえば数百人単位の死者はやもおえないような仕事である場合だけだ。

開くためにパスワードを打ち込み、続いて表示された暗号解読のために使用される鍵のナンバーとそれを使用するための生体情報を認識させるため、USBを専用の端子に繋げAMSに繋げる。

べつに、AMSで無くとも非侵略型のインプラントはパソコンなどの操作に普通に市販されているので手首にそういうバンドやチヨーカーをはめればいいのだが、セキルティ―強度としては侵略型のインプラントであるAMSにはかなわない。

「さてと・・・」

それは、宛先不明からの決闘予告だった。

『優秀な前衛機と聞いている。

対戦が楽しみだ。

AFにも飽きたところだ。

私を楽しませてくれ。』

「その気になつたらこちらへ来い、ということか。」

さもなくば、依頼を出すに値するかテストだろう。周囲に相談すべきかとも思ったが向こうが勝手に仕掛けてくるだろう事は文面から予測できるし、仕掛けてくるなら全力でたたき落とすのがリンクス同士の挨拶のようなものだ。

そして、敗者は機体と場合によれば命を失う。そうやってこの社会は動いているのだ、今更気にする事ではない。返信のメールを打ち込み送信する。

『一人のリンクスとしてお前を撃破する。』

その一文だけだ。

chapter 1 - 8 (後書き)

どうも、鈴木シキです。

ACの二次創作なのにACが全然出てこない始末、本当に申し訳ない。これが終わって、しばらくしたら急転直下に盛大に大暴れする計画。それにしても、Aランカーは化け物じみた腕前ですね。破砕者さんは腕が落ちたと言っていましたたが実力だけでアルテリアカールス占拠をクリアしてました。

AC5のOWは両方の背中ハードポイントを占拠する模様、PV見る限り、スペックが様変わりするのだろうか。うむ、負荷的な意味で軽量機ユーザーにはつらい時代になりました。両腕にレイブン時代のチェーリングンの様なものを装備するタイプやマッセル(GAの8連ミサイルポット二機+肩に同様の連動ミサ)×4的なミサイル弾幕を張れるOWがあればぜひ使ってみたいですが。さておまけです。

予告通り電撃からの刺客ウイクトリアについてです。高起動型軽二脚にカルサワと弱王愛用のハンドグレ。絶望的に火力不足であり、その身軽さを生かし飛びまわるその姿はカラーリングと相まって逃げ回るウサギそのもの。命中率と相まって弱気に見えるのはなぜだろう。

新規パーツMHD-HH/ARSHは重量化したOP機装備のCHD-MISTEYEと言ったところ。これを装備するとしたらそれなりの、覚悟が必要。無理せず後者を使うほうがいい気がする。あのロケット野郎の紹介でもしよつかと思います。

トウン、トウン、トウン、トウン……。

機体が機能停止寸前だと伝えるアラートが耳障りだ。ミツシヨンならこの時点で逃げ出すところだが今回はかりはそうはいかない。

目の前で踊るのは、白が美しい逆二脚の中量機。かのリンクスは組織戦を得意とする彼だが、単騎での戦闘能力はそれほどでもないと評価される。

そちらの動きも、それ相応の物だった。自身が槍となり、盾となり、通常軍が活躍しやすい環境を作って行く。

ゆえに、徹底的に攻勢に出続ければ容易に勝てる。

あれから数日たったある日。

ピピ、ピピ、ピピ……。

何かを連呼するバケツの様な形状のヘッドパーツを装備したノーマルACの群れを何故か雷電でボコボコにしている夢から覚めると、湿気を帯びた朝の空気が空調から流れ込み太陽光を模した光源に照らされた自室が目に入った。

アルコールランプを使いお湯を温める愛用のコーヒーメーカーをセツトし、ドアのポストに押し込まれた新聞紙を取りに行く。そうして、テレビ兼パソコンの電源を入れ朝のニュース番組を聞きながら、新聞に目を通し、時折思い出したかのようにルアクコーヒーを啜る。

選りすぐりのコーヒード豆を熱帯に生息していたルアクという獣の腸内環境を完璧に再現し発酵させたこのコーヒーは、普通のコーヒーとは一段上の味わいと香りがある。かつては野生のルアク限定であつたらしいが、今の技術があればこの程度大学の実習で行える程度になり下がってしまったが今なおその銘柄は多くの富裕層に今は

無き、自然への思いと共に愛されている。

大量量産できる体制が整っているとはいえ、これが高級品であることには変わりなく。物に豊かさを求めるタイプではない俺にはちよつとした無駄遣いぜいたくとなっている。

仕事着に着替え、朝食を取るべく財布の中身を確認してから自分の部屋から出る。

一般的なリンクスの平時の仕事と言えば、1に健康管理、2に訓練、3、4も訓練、5も訓練だ。強くなる為にはそれが一番手っ取り早く、収入を多く手に入れるためにもそれが一番確実だった。

立場や、所属先にもよるがリンクスとしての訓練メニューは大きく分けて二つある。一つは通常軍相手の模擬戦もとい、連携演習。もう一つは、リンクス同士の実機を使った模擬戦もしくは、シミュレーターを使った模擬戦だ。

後者のほうには誰の遊び心か、ある程度の人間より強い疑似標的（AI）を作れなかったためか。人間では物理的に不可能な挙動をとるACや、機械的に不可能な常時OBを吹かし続けらるACや、実際にやったら腕がへし折れるような動きをするACが少なからず登録されている。

ただし、下手な人間リンクスより強いことは確かで、こいつを一方的に撃墜できるようになって、やっと中堅などと無責任な野次馬には言われていたりもする。

ちなみに、俺は勝ないほうのリンクスだ。努力はしているが上位ランカーはこれをさも当然のように撃破するという。さてはともあれ、今の目標はランク15以上に食い込みいずれ抜けるであろうジュリアスの穴埋めをできるようになる事だ。

いかに、企業合同出資の研究施設とは言えネクストが一機無くなつたときに損害は計り知れない。しわ寄せがフラジールやこちらに回ってくるだろう。

「さて、今日もお仕事に足を延ばすとしますか。」

コーヒーメーカーを一通り洗浄し元の場所へ戻すと財布の中身を

確認し、軍の食堂へと足を進めた。

食堂は、軍関係者であふれ返っていた。サラダに齧り付く者、朝から大盛りカレーというへビーな物を平らげている者、そうして相変わらずジェラルドらの机は明らかに浮いていた。

俺の朝食は目玉焼きに、サラダ、トーストそして、飲み物に牛乳とごく自然な物だが健康管理が仕事の様な物なのでこうもなる。

「おはよう・・・」

かすかな酒の臭いとともに、聞きなれた男の声が聞こえた。

「おはよう、酒臭いぞ。」

「新しい酒が入ったんだ。古いのは飲まなきゃ損だろ。」

「違いねえ。」

笑顔でそう言い返す。こいつの酒好きは皆の噂だ。今更、止める人間もいない。さらに彼と相部屋のメカニックがぞろぞろとその後についてきて、口々に挨拶を交わしていった。

香ばしい焼き立てパンにバターを塗り、シンプルながらも味わい深いその味を楽しみながら、来るべき人を待つ。

「おはようございます。」

今度は聞きなれた女性の声、ニーナの声だ。

「遅かったじゃないか。」

「息子が寝坊しまして。」

彼女は申し訳なさそうにそう弁解し、こちらは苦笑で答える。いつも通りのスーツ姿の凛々しい姿の彼女はファイルを抱え、物言いたげな様子でたたずんでいた。牛乳で口の中の物を飲み込みそちらへ体を向けた。

「本日の予定は、ランク14、イルビス・オーンスタインとのシミュレーターでの模擬戦になります。あちらも、本気で戦わせてもらうと意気込んでいました。オーダーマッチでの成績不振を拭い去るためでしょうね。」

「彼か、こちらも怠けられる状態じゃないな。フッフ・・・」
強敵に会えた喜びの含み笑いをしながら、自らの拳を打ち合わせ
た。

chapter 1-9 (後書き)

どうも、鈴木シキです。

雪が降り続き、道路は塩カルで白化粧した今日この頃。

いやはや、あれ見ました『国家解体戦争 portable』カ
ワユイACが動き回っているあれです。mugenで白栗作つてみ
うかななんて考えた事もありましたが、美術の成績が軒並み2であ
った僕にはCGを作るなんて無理な話ぶっちゃけ幼児のほうがきれ
いな絵を描けます。

ちなみに僕の中のジュリアスのイメージは小柄で黒髪を短めに
カットしているイメージがあります。服装はやっぱ黒系、クールな
お姉さんと言ったところでしょうか。

さて、おまけは例のロケット野郎、アモーについてです。

ACネクサスに序盤から搭乗し、バースボムから何かされたついでに機体も変えてエンドボムに乗り換える。彼との初戦のセイフ「そんな機体で勝負するつもりか。舐められたものだ。」は何かと用途があるのでよく見かける。

一対一では、バースボムの方はどうとでもなるが、エンドボムの感動的なサイティング能力を有している。

ちなみに、両機ともロケット主体であるため対処法は基本的に同じと考えていい。普通にフットワークをしていればかわせる。後は例のごとくトップアタックを狙ってくるので引き撃ち推奨。

それより厄介なのがミッションで敵機として登場した時、進行具合にもよるが僚機と共に参戦しザコや固定砲台に散々削られた後、連動ミサイル持ちと共に攻めかかってくる。油断しているとミサで熱暴走 ロケが刺さる ループ オワタ！なんて事になりかねない。どちらかを大穴に誘いこんで可能な限り一対一の状況を作り上げよう。どちらかを撃破するとムービーが流れそこでミッション達成。

このミッションに向かう時にはデコイを忘れずに。ちなみに同施

設では狭い所でNX版AMIDA（熱特化の自爆型）の大群と戯れるファン狂喜乱舞のミッションがあり、開幕直前に頭の上に落ちてくるAMIDAが何ともキュート（こいつのせいでいきなり熱暴走の危機に瀕するはめになる。）グレを持ち込むと某色とりどりのスライムを4匹並べて消すゲーム状態になり、かなり楽しい。

さて、今回は親子二代で同じ機体を使用していたトラウマメーカーでも紹介しましょうか。

ネクスト用のシミュレーターは航空機のシミュレーターを比較すると非常に小さい作りとなっている。あれと同じように複数のジャッキで支えられたそれはGや実弾発射時や着弾時の衝撃を除き、非常に高い精度で再現される作りとなっている。

ネクストのコックピットは外の映像はHMDヘッドマウントディスプレイで見えるため、大型のモニターを設置する必要が無く、かつ下手な突起物を置いて機動時のGでそれが外れリンクスに刺さっては元も子もない。故にそれは卵の内側の様な作りになっておりACという兵器の特性上、実験機を除き全てのネクストACは共有のコックピットを採用している。そうする事で機体を乗り換えたときに操作法を一から学びなおすなどという非効率甚だしい行為をせずに済み、実戦への即時投入を可能としている。

そこは、シミュレーターの動作を監視する為のモニタールーム兼操作室ここで様々な現象を発生させる事が出来る。シミュレーター自体を監視するための大窓のほか、オペレーションに必要な物が一式入ったこの部屋の一部である小部屋にはオペレーターが入りそこで実戦さながらのオペレートをする事になる。

上中央にある大きなモニターは第三者のアンクルから戦闘の様子を見れる様になっており、訓練生時代には落第したほかのメンバーと共に一緒になって様子を見ていたところが懐かしい。

「あれ？ジュリアス。こんな所で何をしているんだ？」

「やあ、久しぶりに他人の戦いを観戦してみようと思ってな。」

「悪いけど、下位ランク同士の戦いだぜ。上位ランカー相当の実力のあるジュリアスが見ても眠たくなるだけだと思うがなあ。」

おどけながらそう言うが、ジュリアスは至って真剣な様子だった。

「困としては文句なしのお前が何を言う。」

「きつい事言うな。ジュリアス。」

事実だし、それを否定するつもりはあまりない。通常軍との連携ミッションを受ける事もあるし、ベローノークやサバージビーストと組んでミッションを受ける事があるが、前者は見返りの少なさに後者は積極性のなさに問題アリだが砲台をさせていけば、此方の物こつちが敵をかく乱している間に味方がしつかりダメージを与えてくれる。

欲を言ってしまうえば、ジェルルドやジュリアスのように中遠距離から高火力兵器で狙い撃つてくれる僚機か、索敵性能に優れた狙撃戦型の僚機がいてくれればこちらとしても楽ができるのだが。まあ、居る事はあるがあの方は何かと多忙だろうし立場ゆえ関わりあいになる事はないだろうが。

「通信状態良好、すぐにでも始められる用意はできています。」

ニーナが呼び出しやってきた。あとはリンクスの対戦準備だけだ。「せいぜい楽しませてくれよ。」

「期待に答えられる自信はないぞと。」

つまり返すと、四角いシミュレーターへ向かう。今も昔も変わらない搭乗用の橋を渡り、シミュレーターの上からバルーンが内側に張られたシートという名の拘束具に座り、HMDを被り、見た目だけの酸素マスクを付けた。

「拘束具、閉鎖。対G緩衝ジェル注入開始。」

拘束具が閉鎖し、バルーンにジェルが注入され体をがっちりと固定する。

「AMS接続開始、動作チェック」

本物とは綿と毛布程の違いを残す圧迫感が全身を覆い。HMDが起動すると目の前に青いフィールドが映し出される。自分の視点はピラムの頭部から画面上を動き回るマーカーは自分の視点つまり、ネクス機体が銃口を向ける位置である。

オペレーターが確認するまでもない速さでチェックは機械的に進み、ディスプレイに全機能オールグリーンの表示が現れる。その中に普段見慣れない表示があった。APという文字と共に30000

程の数値が表示されている。あんまりあてにはならないが、機体の活動限界を0として装甲の強度を数値化した指数概念だ。むろん、機体にも装甲が薄い部分（間接や頭部）と厚い部分（コア前面）があり同じ条件で被弾してもその数値は被弾した場所によって大きく変動する。

「戦闘エリアのデータを送信、表示します。今回の戦闘エリアは建造物が立体交差する架空都市です。ただ突っ込むのではなく地形を利用しかつ、機体が建造物に衝突しないように留意しなければなりません。なお、建造物へ衝突した場合、機体が破損APが減少します。また、同演習はカレード公認の賭け試合となっておりこの演習に勝利すればさらなる依頼を受領されることが予想されます。この際です。遠慮なく撃破し、また一つ勝ち星を付けましょう。」

危険のない危険は娯楽であると言ったのは誰だっただろうか。かなり前まだ、歩兵が戦争の主力であった頃「血の通わない戦争は戦争ではない」と誰かが言っていた。

間違っではないかと思う、今の企業間の戦争は消費するための戦争。こんな楽しい（ゲーム）を止める者もいなければ止めようとする者も不在、誰かが根本から正さなければ次の次の世代までこれは続くだろう。

そうして、俺はその戦争に新たな風《要素》を吹き込もうとジュリアス達に加担しようとしている。

「ぜってい、負けられないな。」

戦闘フィールドが形作られ、はるかなビルの屋上に白い逆二脚が太陽を背に仁王立ちしていた。

chapter 1-10 (後書き)

どうも、鈴木シキです。

久しぶりにNXやってSLPとの操作感の違いに戸惑った今日この頃。(軽二脚ってこんなに早かったけ)

さて、LRPの発売まで、二十日を切りました。そろそろ追いかけていかないと、AC5は秋以降ですかね。それまでには青パルを叩き落とし、メモリーも回収したいのですが、復刻されたゲームにネタばれもない気がしますが x に勝てるかな。ハンドレールが廃産になったのはこれのせいだという話もあるくらいだしなあ・・・。

さて、おまけです。

予告通りバレット・ライフ(NX)の紹介です。LRに続投している彼ですが、NXの初登場時にはコアが初期コアではなく。見た目、装甲の巡航OBコアで肩の連動ミサ装弾数20発の弱連動でした。

中量4脚に武装はフィンガーマシ二機にと格納マシン二機、チューンガンにミサイル、にミサ連動と一対一に特化したアセン、コアの弾薬費はいかほどなのだろうか。

特記すべきはフィンガーマシの瞬間火力、一瞬で3000は削れ、アイアン先生すら瀕死に追い込む。

強化人間には珍しくトップアタックをあまり狙わず地面を突っ走りこちらへ突撃してくる。おまけにN系の強化人間にはEN回復力2倍というチートじみた能力があり息切れ知らずもいとこ、上手い所逃げ回って頭上から鉄の雨を浴びるような状況にだけは追い込まれないようにしよう。

事、ザコの群れをばこぼこにした後、彼がOBを吹かしながら颯爽と出てくるムービー込みのミッションで登場したときにはこの瞬間火力が死神の鎌に見えて仕方がない。

ただし、突っ込んでくるためここを利用し高火力武器でのカウンターを楽に狙える上に、十字状の窪地に誘い込んでハメることも可能な典型的なストーリー要員である。

なお、親の背中を追い続ける息子（ すまん。フロム脳から特攻兵器^{ナユ}が出撃した。）がおり彼をミッション中で撃破すると息子が一対一で仇打ちもとい、対戦を事前のメール付きで挑んでくる。LRでの声を聞く分には生きていたみたいですね。

さて、今度はエンドボムの相方の紹介でもしようかと思えます。

大昔の兵器をそのままスケールアップしたような武装が施された白いネクストは開幕早々にビル群の影へと姿を消した。組織戦はつまるところ先の読み合いだ。実戦での経験を生かしビルの影に隠れながら僅かながら確実にこちらにダメージを与えてゆく算段だろう。だがこちらはそうはいかない。攻めて、攻めて、攻め抜いて一気に片を付ける近接戦闘特化型まずは距離を詰めこちらの射程に収めなければならぬ。

「いくぜー！」

気合の叫びと共にOBが起動し機体を覆っていたPAからコジマ粒子をもぎとるが如く、OBにコジマ粒子が充填されてゆく、その直後、本来発生するはずのGの代わりにシミュレーターがガク！と揺れ、機体は一気に加速し、機体を強引に持ち上げるとそのまま近場にあったビルの屋上に着地した。機体が着地したビルの屋上はネクストの超重量に耐えられず屋上が崩落し足回りを瓦礫で覆った。まずは、視界を確保し地形を利用した戦いをできないようにする。揺れと共に機体が大きく傾き「な！？」という驚きの声を上げた。ビルが根元から破壊され倒壊を始めたのだ。機体を持ち上げ状況を確認するが灰色の砂ぼこりの向こうから緑色に輝くPAに覆われたマロースが突っ込んできた。そのままゼロ距離まで接近しPAの内側へと押し込み発砲した。ゴリゴリとAPが減ってゆく。

「こなくそー！」QBを発動させ、右側に高速で移動するとその勢いを使いターンしながら今度は後退する方向にQBを吹かし両肩のパルスキャノン（PC01-GEMMA）を起動させ発射する。青白い閃光が断続的に走り、被弾したPAを形成するコジマ粒子を乱し減衰させ白い装甲に焦げ跡を作り上げた。

クイックターン

QTと呼ばれる技術だ。機体構成にもよるが180度の急旋回を一瞬で行いすぐに相手に振り替える対ネクスト戦闘では必修の技術

である。

大きな効果は期待していない、すぐに武器を両手のマシンガン（03-MOTORCOBRA）に切り替え追撃を加える。マロースは左手のマシンガンを横に向け乱射する事で牽制しながら後退と右方向の跳躍をしながらターンを繰り返し、機体をこちらに向けながらの自由落下を開始した。

体に感覚として染み込ませているため、いちいちEN残量を示すゲージを見る必要もないが。ENの残量が残り少ない、足場を探しそこへ向けて着地する。先んじてビルの屋上に着地したマロークの逆二脚が大きく腰を落としジャンプの体勢に入る。

「しまった！」

思わず声がこぼれた。直後、目を見張るほどの大跳躍でマロースが飛び、マシンガン（CANTUTA）とライフル（LABIATA）で攻撃を仕掛けてきた。頭上からの射撃はマシンガン（CANTUTA）がPAを減衰させライフル（LABIATA）が復元され切れていないPAをすり抜け装甲に弾痕を作り上げてゆく。ENはまだ回復していない。今QBを吹かせればEN切れを起こしてしまうだろう。

ビルから落下することを承知の上で後退しながらマシンガン（03-MOTORCOBRA）で迎撃を試みる。交錯する二種類の弾幕、撃ちあいの結果マロースのPAがこちらより早く消失し装甲に無数の砲弾が着弾する。そこで逃げる事をやめた。マロースのベール機体^{エク・ハザール}EKHAZARの旋回性能は決して高くない。軽二脚である特性を生かし背後に回り攻勢に出る事にしたのだ。加え、推進装置の類が集約されている背部はネクストの中でも装甲がかなり薄い部類に入る推進装置を破壊すれば実質行動不可能つまり勝利だ。

心もとないEN容量を気にしながら、飛び立ち足元へ回り込みQTで背後を狙う。確固たる否定の意思と共にマシンガン（03-MOTORCOBRA）から砲火が放たれ復元され切っていないPAを乱し、無数の弾痕を装甲に刻みつけてゆく。マロースも黙っては

いない、彼は自身の機体と所属する企業に絶対のプライドを持って
いるそれゆえに機体の弱点を把握しそれを補う戦闘スタイルを身に
つけてきた。

コアの装甲が開き一対四機のOBが起動する。すさまじい速度と
共にマロースがこちらの射程から脱し連続QTでこちらへ旋回する
とグレネード(SAPLA)と散布ミサイル(MP-O200I)
がこちらめがけて襲来してきた。グレネードはQBでかわすが散布
ミサイル(MP-O200I)が襲い掛かり、PAを減衰させ装甲
を焦がした。さらに同様の追撃明らか
にこちらのEN切れを狙っている。おそらく地上に落としお得意のゲリラ戦術に誘い込む算段だ
ろう。

バカの一つ覚えと罵られも仕方がない。OBで追う、そこに相対
的に加速したグレネードと散布ミサイルが当たる。ノーマルACを
両方ともノーマルACを大破させるほどの威力を持つ兵装だ。時速
1000キロで正面衝突したときの破壊力は通常のそれとは比べ物
にならない。

PAを突き抜け、APがさらに減った。だが気にしていられない。
脚部を破壊してゲリラ戦に持ち込まれても逃げ切れないようにする
ことが目的だ。さしものマロースもこれには驚いたのだろう、目に
見えた動きには現れていないが何となく機体に動揺がにじみだして
いた。

十分すぎる初速を与えられた砲弾がマシンガン(03-MOTTO
RCOBRA)から放たれ、股関節付近に弾幕が殺到しその内の幾
つかが股関節に食い込み、薄い装甲を突き破って内部のアクチュエ
ーターを破壊した。

chapter 1 - 11 (後書き)

どうも、鈴木シキです。

さつそくAC5リスペクトさせて貰いました。個人的には思いつきり市街地戦をやりたかったのですがそれだとマロースがランク上位の実力を発揮してしまうので断念。

やっぱLRは難しいですね。ACPとSLP、NXをプレイしてきた人間がこれですからLRから始めた人はどんな目に遭っているのだろう、やっぱいきなり主砲の洗礼を受けに行った人はこれを読んで頂いている読者の中にもいるのだろうか？

今度更新するときは青パルの撃破報告をしたいです。

さて、おまけです。

ミッションの進行度にもよりますが、エンドボムの相方として登場し後に決闘を申し込んでくるフェルムスレイヴについてです。

紹介文通り(分裂ミサが地面に当たらないように)跳ねまわるように動くが、殆ど歩く、そして重量機ゆえその足は遅い。一様OBも使うがそれでEN切れを起こしチャージングをする事も・・・。

アセンは堅めの重量2脚に強連動と分裂ミサに多機能リーダー、ブレードに黒レーザーと堅実なアセン。ミサイルを主力に戦うのでミサイル避けができればどうという事はないだろう。

ちなみにこいつには壁抜けをさせる方法があるがある。詳細はAWikiを参照の事。

今回は内気なおじちゃんに機体をモロパクされたランク1でも紹介しようと思います。

(あれ、まだ紹介はしていないような?)

次回の更新も2週間後を予定しています。

追記

LRのキャラクターはネタばれになるので当分控えさせてもらい

ます。

マシンガンによってその殆どを削り取られ、OBによってPAが消失した所にマシンガンの弾幕が殺到する。股関節に複数の砲弾が着弾する。装甲が変形し、捲り上がり、穴があく。その穴から飛び込んだ複数の砲弾はアクチュエーターを破壊し脚部の機能を大幅に低下させた。

マロースも負けてはいなかった驚きながらもOBの多用と先ほどの攻撃でPAが薄くなつたと判断するや、散布ミサイルを交えながら撃ち捨てるつもりでグレネードを連続で発射する。しかしそんな攻撃に当たるわけにはいかない。

QBで回避するがすでにENの余裕はあまりないビルから落下し、壁とする。マロースはこれを狙っていた。自由落下をするネクストを捉えることなど容易、逆二脚機のもう一つの特徴であるEN効率の良さそ活用し連続QBでピラムの頭上に回った。

ライフルが発射されグレネードが狙い撃つ。ライフルは仕方ないだがグレネードは回避せねばならない。先ほどの被弾でAPが大幅に減少し残り10000弱の数値を示している。次被弾すればレツドゲージだ。

回避を断念したライフルの砲弾が頭部にめり込み、衝撃でHMDにノイズが走る。

機体のすぐそばをすり抜けてゆく榴弾がビル着弾すると爆発によって発生し壁面がえぐれ、鋭角的に割れたガラスや、コンクリートの破片が飛散する。距離は近い、すでにこちらの距離だが今ブースターを使うと空中で身動きが取れなくなる。それは空中戦を得意とする相手と戦う時に注意しなければならないことの一つ。

距離が詰まり普段は使わない兵器の間合いに入る。

体からエネルギーを放つイメージをAMSに送り手元の操縦かんを操作すると、PAが鮮やかに輝きだす、マロースもこれに気付き

QBで後退し始めるが時すでに遅しコジマ粒子が放つ黄緑色の爆発が周囲を覆った。マロースの方ではカメラがホワイトアウトしロックが外れ、PAが消失している事だろう。

マロースが散布ミサイルを出鱈目に放ち、弾幕を作る。だが、狙いも付けず放たれたミサイルが当たるはずもない。ブースターを吹かせ落下速度をマロースに合わせ、ぶつかるとギリギリまで接近する。「凡人の意地を見る!!!」

マシンガンの銃口をマロースに突き付け叫んだ。マシンガンから砲弾が吐き出され、殆ど初速のままの弾がコアをえぐった。マロースはライフルをこちらのヘッドへ突き付けると砲弾を放った。

バイザーの様な部分が砕け、頭部を貫通し観測機器が落ちコアにあるそれらに即座に切り替わり、APがレッドゾーンに突入し警報音が鳴り響く。

だが、此方は近接射撃特化型近づけば勝機はある。もはや気にはしてられない、衝突するかのような勢いでマロースに食らいつく。損傷していたマロースの股関節が吹き飛んだ。勝負ありだ、バランスが崩れ落下してゆくマロースを追い止めを刺しにかかる。

「墜ちろ、墜ちろ、落ちろ!!!」

さまざまな感情と共に放たれた砲弾がマロースを穿つ、徐々に近づくとコンクリートの地面は流れ弾によって沸き立つ水面のようにポコポコになっていた。装甲に穴があき内部の機械が露出したマロースがお湯に落とされた豆腐のようにそこへ墜落し、損傷していた装甲が周囲に散らばり、HMDに“you win”の文字が表示された。

勝った。アルゼブラの最高戦力に勝った。

「見事でしたランサー。こちらは大騒ぎですよ。」

「そうかよかった……」

勝利の余韻に浸ろうとしたとき、警報が鳴り響いた。

「これは敵襲警報。ランサー機へ移動しスクランブル発進の用意を
！」

通信の向こう側でドタバタと誰かが飛び出した音が聞こえた。ジュリアスが機へ走ったのだろう。

「分かっている。」

HMDがシミュレーター内の映像を映し出し拘束具をAMSで外すとAMSの接続もそれに平行して切った。AMS適性が高いリンクスはこの際に肉体の損失感を覚えるというが、並みの適性しかない俺には無縁の話だ。シミュレーターのハッチが開くその時間すらも長く感じる。

そのまま、キャビネットに飛び移り管制室に飛び込むと叫びながらに命令を出す。

「ザンに何でもいいから使える武装を施して緊急発進できるようにしておくように伝えてくれ。俺はこのまま向かう。」

「分かりました。装備に注文か何かは？」

「ディアルレーザーがあつたら、撃ち捨てて来る。」

「分かりました。」

着膨れするGスーツはゴワゴワして走りづらいがそれでも走る。敵襲警報が出る時には大きく2パターンがある。一つはここに攻撃が加えられる時、戦闘禁止地区に指定されているが有事となったときにはここの様な施設が真っ先に戦略目標になることは明白だからだ。

もう一つがアスピナ所有のクレイドル及びその関連施設に襲撃があつたとき。前者の場合、この警報と共に非戦闘員にシエルターへの緊急避難命令が出るので今回は後者だ。ジュリアスの言葉がよみがえる。「間もなく、私はあちらに帰還する。」それはあのバーでの別れ際に聞かされた言葉だった。

「今なのか？ジュリアス。」

世界が変わる事への機体とこれから始まる大きな戦いへの恐怖が混じり合った狂気にも似た感情を抱えながら無機物的な廊下を走る。

chapter 1 - 12 (後書き)

どうも、鈴木シキです。

某MADを聞いていたら小島監督のロボットものをプレイしたく
なつて兄弟からPS2ごと借りた今日この頃。僕もあんな物語書き
たいなあ。(二日で攻略)

それにしても、AMIDAに続いて首輪付き獣も非公認マスコッ
トで定着しそうですね。このまま、輝美まで定着したりしないよな
?。ちよつと、後々出す計画のAC?のイメージを固めるついでに
書いてみようかな。

LR難しいです全然進んでない……。その割に日常パートの
盛り上げ方を研究しようとその手の小説を読んでいる今日この頃。
何をしているんだ俺……。

さて、おまけです。

レイブンは、ジノーヴィー。ACはディアル・フェイスの紹介で
す。

NXにランク1として登場し、ムービーと言うムービーがカッコ
よく根強いファンを抱えるがその実力のはいまいち、それでも彼が
カッコイイことには変わりない。

クレスト製パーツのみの中二脚に大グレ二機、ダガー、近接ライ
と隙のないように見えるがグレネード主力で頭上から狙い撃つよう
に戦うため良いように位置取りできる。

ストーリー中で2回戦闘するが、二週目にもなれば誰でも勝てる
だろう。

彼と戦う時は常に広い所で戦うようにしよう、そうでもしないと
グレに狙らわれあつという間に熱暴走を起こす。

ちなみに、地形ハメをすることが可能でありどうしても勝てない
人はこれを活用しよう。

さて、次回は彼がロリコン扱いされる原因となっている彼の恋人

でも紹介しようかと思えます。

けたたましく鳴り響く敵襲警報は今頃住居区にも流れているだろう。

ゴワゴワした対Gスーツは走りづらくて仕方がないがこの際仕方がない。

「よう、乗ってくかい？」

ザンがドラム缶に台車をつなげたような車に乗って後ろからついていた。元々はある市場で作業用に使われていた物らしいが広いが通路がそれほど広くないこの様な軍事施設で移動する際に便利だという事で移動用に重宝されている。

「ザン、こんなところで何をしているだ。」

「なに、向かいへ行ったらすでに出た後だといわれて取って返してきただけじゃ。」

「ジュリアスはどうしている。」

「今、緊急発進用の短距離VOBを機体に装着している所じゃで滑走路が空き次第、発進するはずじゃ。」

準備のいい事だ。と思いつながら彼女の意気込みを何となくだが察する事が出来た。どの道、企業相手に喧嘩を売るのだから半端な覚悟でリンクスを二人も誘ったりしてはいないだろう。まあ、雇い先がどこであろうと報酬さえもらえればそれで良しとする人間がここに居るのだが。

ガレージの中でジュリアスのオペレーターとジュリアスの通信が大音量で流されていた。

「アステリズムVOB装着完了、発進のタイミングは同機に移譲されます。」

「発進する……。」

風を切る音と共にアステリズムが飛び立ち音速突破の際のシヨックウエーブがガレージの壁を叩いた。次の発進準備に追われていたガレージに一報が届いた。

「砂嵐だと!？」

いかにネクストのPAとはいえ、どんな環境でも使えるというわけではない。国家解体戦争期の初期のネクストとは比べ物にならない。厚さのPAを張れるとは言え悪天候が天敵であることには変わらない。しかも音速の壁を超えて飛行するVOBの速度ではPAが変形するほどの力が掛かっているのだ。そんな環境でPAを張り続けられるわけがない。

「はい、戦闘エリアとなると思われる地点一帯からこちらの間には大規模な砂嵐が接近しています。先んじて飛び立った通常軍との交信も突然の妨害によって断絶しており、彼女一人で戦わなければならぬ事になります。」

少し考え込み、兵装の変更を検討し始める。今は普段通りの機体構成で近接戦における戦闘に特化した突撃型、しかし砂嵐となれば状況は変わってくる。視界が悪くなれば敵の位置が把握しづらくなり間合いの取り方が重要になってくる特化型にとって命取りとなるならば。

「レーダー(RDF-0700)とディアルレーザー(HLC09

-ACRUX)に積み変えろ。有効射程を広げるんだ。」

「分かった。すぐに取り掛かれ!」

ザンの命令に部下が景気のいい返事を返しすぐに装備の換装が始まった。

「これでよければいいが。」

一抹の不安を抱えながら、装備の換装の様子を見守った。

「有人MT一機帰還、消火班及び救護班は滑走路に集合。」

館内放送が鳴り響き、呼び出しをかけると躓き返してそちらのほうに駆けだそうとする異なるアナウンスが流れた。

「ネクスト反応接近、ピラムは緊急発進。」

スクランブル

現場に緊張が走る。ネクストは核兵器と同じ戦略兵器だ。それを二機いつぺんに運用される事はそれほど多くなく必然として今度の襲撃もネクスト一機で行われている物と考えたこちらのミスだ。

「クソ！！」

「どうしますか？」

「出るしかないだろ。」

コックピットに飛び込み、AMS接続を行うとザン達を避難させこちらの操作で外し途中だったパルスキャノンのパージした。機体を立ち上げらせ、AMSを操縦舵を使い足元の物を踏まないように外へ出るエレベーターへと歩かせてゆく。

「ニーナ、敵機の光学情報をこちらに後れ。」

すでにオペレーションルームに入っているであろうニーナに命令を出した。

「はい。識別信号は出していません。しかし、機体構成から旧レイナードのNo.33 スプリットムーンと思われます。」

特に抑揚もなく事務的に答え、HMDに拡大と映像処理が行われた画像が映し出された。白っぽいアーリア、マシンガンと見慣れないブレードを装備し背中には追加ブラスターを装備しているようだ。記憶の中からそれらしいブレードが無かったかと検索を始めた。

そう、確かあれはレイナードのEースが装備していたはずだACネームはオルレア。専用の装備が07-MOONLIGHT、通称は『月光』国家統治時代から続く最強のブレードのみに与えられる名前だ。

「敵は、クロスレンジ特化型。引き撃ちがセオリーです。」

「そのつもりだ。あんな物に切られてくはない。」
それができればな。とは言わない。敵は国家解体戦争を生き延びたりリンクス実戦経験に違いがありすぎる。それでもやるしかない、報酬でアスピナを盛りたて、自分はそのバーでもう一度酒を飲むために。

エレベーターがあがってゆき、乾燥し砂ばい外気に地平線の彼方

に砂嵐が見えHMDの片隅には管制塔が撮影した敵ネクスト画像が映し出されている。

「稼がせてもらうぞ!。イレギュラー!」

chapter 1 - 13 (後書き)

どうも、鈴木シキです。

「全ては、メイツエル様の手のひらの上」な回。前回の回は逆二脚らしさが出ていたでしょうか。世の中にはずっと逆二脚な人もいるわけですから、そんな方々に「うん。逆二脚だ。」と言って貰えるように頑張ってみました。

LRPの方はずっと兄弟に貸しっぱなし、先日少しやりましたがリム・ファイアーに二〇回ほど“穴あきチーズ”にされてきました。さて、おまけです。パイロットネーム(レイブンスアークに所属していていないめ、パイロット扱い。)はACはアグライヤ、ACネームはジオハーツの紹介です。ミッションでは二回戦闘する事になるのだが。N系統での強化人間の恐ろしさを身をもって実感する相手である。

かなり早い軽二脚にハンドグレ、水平二連のショットガン、垂直ミサ、重チェーンガンとなかなか高威力だが、実は重量多過。それでもその運動性能はさまざま。トップアタックを行いながら突っ込んでくるその姿は飛びかかる肉食獣を思い浮かべずにはいられない。

ただ、軽二脚の性からは逃れられずそれほど装甲は厚くなく。慣れれば開幕数十秒で撃破することも可能。

また、“アグライヤ”ジナイダー”説があり。LRのニューゲームに流れるムービーのジナが男性と間違えるくらい胸が無いため。アグも無いんじゃない。という話になり、結果「ジノはロリコン」という不名誉なイメージを付けられるてしまっている。

仮にアグ＝ジナだとしたら、名前やジナの動向からも何となく連想できるが存外、尽くすタイプの女性なのかもしれない。

さて、今回はMT乗りだったところにとっつきでよく掘られていたという話があるブレード使いを紹介しようと思います。

コロニー・アスピナを覆うドームの上に立つピラムの中にいながら誰かに踊らされている事を何となく感じ取れた。

敵は、リンクス戦争を生き延びたAC、勝てる気はしないがやるしかない。この際、守りの利を生かすのが得策だろう。

「管制塔に援護要請を……。」

「了解。5分以内にミサイル攻撃の要請を出します。」

「頼む。」

深呼吸を行い。気合と共に出撃コールを叫んだ。

「ピラム行くぞ！援護よろしく。」

OBを発動し気迫と共に一気に距離を詰め、しよっぱなから二機のマシンガン《03-MOTORCOBRA》で猛攻を駆ける。

しかし、スピリット・ムーンは体重移動まで使ったフィギアスケーターの様な華麗な足さばきを思わせる動きでやすやすと腕の可動範囲外に逃げてゆく。

それは本来ならばネクストのプログラムに入っていない動作でACの構造上、一度重心を外してしまうと復帰させることが極めて難しいからだ。それなのに目の前のACはそれを行っている。それだけで搭乗リンクスのAMS適性の高さと同様技術の高さをうかがい知ることができた。

マシンガン2機の弾幕を浴びないように位置取りし、十分な間合いを用意したスピリット・ムーンがブースターをいったん切り地面に足をつけて機体を停止させ、腕を振りかぶり腰を捻る。

ブレード《07-MOONLIGHT》を発動させる体勢だ。どうせ、追加ブースター《ACB-0710》を装備したブレード持ち相手ではQBでは逃げ切れない、HMDの片隅でその様子を確認しながらOBの起動を行う。スピリット・ムーンがQBの発動と共にブレード《07-MOONLIGHT》を起動させ、異様に長い

ピンク色の刀身が形成させる。その動きわ滑らかでサムライの居合を思わせた。

追加ブースタによりさらに高出力化したQBを活用したその動きはさながら飛びかかる豹の様、間一髪のところOBが発動し逃げ切りQTで射線に捉えるが、スピリット・ムーンはその勢いのまま足を軸に旋回し猛烈な速度で斬りかかってくる。

「早い。」

QBを発動させ、右方向に移動しながらその余剰出力でDTドリフトターンをきめ、すれ違いざまに至近距離から砲弾の雨を浴びせようとするがスピリット・ムーンは予想打にしない動きを行った。ブレードの発動時間を超えてブレードを展開しながら絶妙な体重移動と姿勢制御でその場で高速旋回し薙ぎ払ったのだ。

こんな動作を行えば、EN消費だけでなくアクチュエーターや、ACの姿勢制御の根幹をなすブースター類への負荷も馬鹿にはならない。

避けきれずに通過した大出力のレーザー光によってPAは乱され、掠れたコア《SOLUH-CORE》とレッグ《LG-JUDITH》の接合部がレーザーの熱で焼け焦げ、鈍く赤い光を放っていた。とっさにQBで後退していなければ今の一太刀で斬り伏せられていただろう。この瞬間ほどオーメルの技術力をありがたく思った事はない。

「無茶苦茶だ。機体をつぶす気が、こいつ！」

支離滅裂な罵倒を吐きながら、すぐにマシンガン《O3-MOT ORCOBRA》で反撃に出る。しかしスピリットムーンはある事か、ブレードをいったん停止させるとボディブローでも放つような体勢を取った。次の瞬間に来るであろう動きを直感が伝える。

「とっつかさせるか！！！」

この距離でならAAが最も有効に機能してくれるはずだ。

「ミサイル援護。行きます！」

HMDの中にニーナの声がこだました。レーダーの片隅には紫色

で表示される無数のミサイルの表示、企業合同出資による余りある財源から捻出された企業の意思が今形となって押し寄せている。緑色に輝くPAを見るや連続QBで後退したスピリット・ムーンにミサイル弾幕が襲い掛かるが、ギリギリのところまで滑るようにかわしてゆく。

見惚れるほどに見事な機体さばきだ。もはやACという兵器を見ている気がしない“人馬一体”そう表現する以外にこの動きを表現できるだろうか。

胸の奥底で炎が燃え上がる。いかに訓練を積みあそこまでネクストACを動かせるのか、上位ランカーはここまでACを動かせる物なのか、うらやましいそして、その域に上り詰め同じフィールドで戦いた。そのためにはまずこいつを打ち砕き、生き延びねばならない。

「援護を続けてくれ、このまま押し切る。」

PAが再生しきつていいないが、この際どうだっていい。一気に懐に飛び込み、猛攻をかける。

「落ちろ、墜ちろ、墜ちろ!!」

ミサイルと二機のマシンガン《03・MOTORCOBRA》、どちらかを取ればどちらかに喰われる。定石から行けばここは逃げるべきところだ。しかし、スピリット・ムーンは臆することなくマシンガン《03・MOTORCOBRA》でミサイルを落としながら切り掛かってきた。

垂直に飛び上がる様子を思いつき強く念じる、「これでもか」と思い描く。QBを下方向に吹かし一気に飛び上がるイメージ。

「跳べ!!」

背部のメインブースターが下を向き、QBが発動する。普段感じた事のない下方向のGが発生し舌を噛みそうになりながらスピリット・ムーンの頭上をとる。そこはACの装甲の中でも比較的薄い部分で敵のPAはさばききれなかったミサイルで大きく減衰していた。

「この野郎!!」

真下に向かって確固たる破壊の意思を持ってマシンガン《03 - MOTORCOBRA》を掃射する。スピリット・ムーンはこれの攻撃を無視しいとも簡単にQBを使った垂直飛びを行い一機にこちらの懐に飛び込んだ。

「斬！」

通信は聞こえずとも、リンクスがそう叫んでいる様子が思い浮かんだ。「斬られる！」しかし、目で追えても機体が反応できる距離ではなかった。一瞬の交錯で腕が切られ、二機のマシンガン《03 - MOTORCOBRA》が地に落ちこちらの攻撃力は実質0となる。

スピリット・ムーンは深追いは不利と判断したのか、そのまま取って返しOBで戦線を離脱した。勝ったのか？いや、戦略的勝利はこちらに有っても戦術的にはボロ負けだった。

HMDのマイクに向かって叫ぶ。

「すぐに、予備の腕と武装の用意を。このままアルテリア施設へ向かう。」

chapter 1 - 14 (後書き)

どうも、ブリーダーの皆さんが満足できるような文に挑戦してみた鈴木シキです。

今回の相手は、スピリットムーンですが。御覧の通り相当、手加減しています。ガチ機でブレオンにナマス切りにされた僕が言うのだから間違いない。

新作ACEが今年発売されるそうで、そのムービーの写真を見てフロムの変態さを改めて実感した今日この頃。

それにしても、フロムは今年大攻勢をかけていますね。もしか、バンナムが弱っている隙にロボットゲーム部門を横取りする気じゃあ、でもフロムのGならやってみたいかも。

さて、おまけです。

今回はレイブネーム、エクレール ACネーム、ラファールの紹介です。

最初は両腕にとっつきを装備した近接戦型のMTに搭乗しているが、撃破したときの声がエロイらしくよくとっつきで掘られているらしい。

後にレイブンとなり軽量2脚に腕ブレ、小型ロケ二機、ステルスと言うアセンで登場、特にSLで屈指の難易度となる無人要塞鎮圧では僚機として登場し彼女を生き延び最終エリアまで到着させると、残段数が危うい中このでの対無人AC戦で大活躍してくれる。ブリード主力なら関係ないのかもしれないが。

それでも、破壊目標は攻撃してくれないので弾は温存しておこう。積極的に切りかかってくるが武器腕の性ゆえ装甲は薄く、上手く立ち回れば瞬殺できる。また、この武器腕自体、月光と比較すると目立った攻撃力が無いため斬り伏せられるという事はないだろう。

装甲が無いに等しいんだし、月光 + ぐらいの性能があってもよかったですね……。

今度は、SLにてアリーナはに登場していなかったはずの、緑色の重二脚を紹介しようと思います。

次回の更新も2週間後を予定しています。

「ピラム至急、ガレンジへ戻り腕部の交換作業を受けてください。VOBの準備が整い次第、アルテリアに向かって貰います。」
「了解した。」

アスピナからミサイル攻撃を受けた地面はさながら月面のごとくクレーターだらけで、元が更地であったとはとてもではないが想像できない。

PAを切り腕が切断されたピラムをACガレンジまで飛ばすと、背中に大型クレーンを装備しコアの胸に当たる位置にサブアームが生え、スカート状のタンク型ともれる接地安定性を最優先とした一風変わった脚部をもつ作業用ノーマルが前もって武器（03 - MOTORCORA）を持たせた状態で腕（EKHAZAR - ARMS）を抱えた状態で待機していた。

そのノーマルの足元には黄色と黒の警告色で塗り分けられているほか、動作時にはパトランプが回転しながらピーピーと電子音を鳴り響かせ移動する。兵器としては考えられない機能ばかりだが、作業のしやすさを優先した結果こうなったのだろう。

ピラムに膝をつかせ外部スピーカーをオンにして叫んだ。
「腕部を爆砕ボルトでパージする。離れてくれ。」

コアとアームを連結している関節で連続した小爆発が発生し、アームが少し離れた所へ吹っ飛びバラバラと爆砕ボルトの破片や、接続していたパーツが零れおちてゆく。それを見たノーマルが左右に回り、小さな指にファーストバースコープがついたサブアームでパーツの破片をつまんで取り除き、スカート状の脚部の中にある格納ラックから油脂の吹きとりを使う布を取り出すと油をふき取って綺麗になった状態で腕を間接に押し込み接続してゆく。

続けて、背中にディアルレーザーとリーダーを取り付けた。
「接続、此方で確認しました。ノーマルは退避。」

HMDに機体の状態を示すウィンドウが現れ、接続状況がどうなっているが色とグラフで表示されている。

「動作チェックを開始する。」

チェックプログラムを動作させ肩を回し、手首を回し腕を曲げ伸ばしさせる事を幾度か繰り返すとオールグリーンの表示が現れた。

続いてノーマルが推進剤とコジマ粒子の供給パイプを床から機体に繋げたがほとんど動いていないのでそれほど時間を食う事もなく燃料はいっぱいになった、後は出発するだけ。

「ニーナ、OBを使った場合の到着予測時間はどのくらいだ？」

「おおよそ600秒です。」

「600秒、十分だな。これより、アルテリア施設へ自力での移動を行う。アスピナ機関にはそう伝えてくれ。」

「了解。では近くの前線基地から偵察機を出すことも要請しておきます。」

「ピラム、再度発進作業者は一時退避。」

館内放送が流れ、ピラムは解放された状態のエレベーターから空へと踊りだた。彼方に見えるのは砂嵐その向こうに目的であるアルテリア施設がある。

「OB巡航出力で起動、移動を開始する。」

「道中に砂嵐が確認されています。高度200m以上を常に維持し移動してください。」

「分かった。」

背部の装甲がパカと開きOB用のブースターにコジマ粒子が充填されてゆき、キューーンという独特の起動音と共にピラムは亜音速とはいえ猛スピードで移動を開始した。

激戦地いや、激戦地だった場所と言った方が最適だろう。コジマ粒子によって大量の電力を乗せられるようになった大出力のマイクロウェーブ発信機の集合体であるアルテリアはクレイドルに電力を

供給する機能を持ち、それがクレイドルそのもの軽量化を成功させ発電機の類を積む事無く永続的な飛行を可能とした施設である。

このアルテリアはアスピナからさほど遠くない場所に建造されたごく小規模なアルテリアで、飛ばすことよりはアルテリア施設間の穴を埋めるための施設であった。しかしここに大規模な防衛システムは存在しない。

周辺に広がる砂漠こそが砲であり、防壁なのだ。在住していた部隊も存在したが、一機のネクストによってスクラップになり果てていた。

ピラムはようやく視界にとらえたHMDの高倍率映像を眺めながら敵ACに見覚えが無いか考えていた。GA系統のパーツがふんだんに使われた重量機のネクストACで全面的に黒く、カメラアイなどが赤く輝いていた。

「イレギュラーを確認。アステリズムは確認できず。」

さらに、接近しながら調べてみるがアステリズムの機影もしくは残骸は確認できなかった。

「これは、面倒なことになった。」

低く安らぎすら覚えるような声が聞こえた。どうやら敵ACはオープン回線を使用しているらしい、だがこの声の主に会った覚えがある。そうあれは、企業連の依頼で各企業合同の大規模演習に参加したとき、オーメル勢の指揮官として参加していた。オーメル勢に一方的な勝利をあたえ、現代の諸葛孔明とまで揶揄され各企業からヘッドハンティングを受けながらもフリーの立場を守っていた。

「最悪だ・・・。」

よりにもよって、ジュリアス達は最高の指揮官を手中に収めているらしい。

「真改を退けてきたか。なるほど、ジュリアスが推薦した理由も分かる。だが、ここで戦う通りもないのでね。」

アルテリア施設の周辺でキラキラと光るアルミ箔と共に膨大な量の砂ぼこりが連続した爆発によって舞いあげられ、待ち望んでいた

かのように通信が入った。

「アスピナ業務課とオーメル・サイエンスから通信がありました。クラニウムは放棄、ジュリアス・メアリーとネクストアステリズムの搜索は断念するとの事です。しかし、イレギュラーネクストを撃退した貴方を評価しリンクアップの検討を行うとの事です。」

リンクスとして思考し結論に至り、大きく旋回しながら答えを返した。

「クライアントの命なら逆らう理由はない。帰還する。」
さて、どうなる事やら。そんな事を思った。

chapter 1 - 15 (後書き)

どうも、鈴木シキです。

本当は、アステリズムのダミーを爆破してその瞬間にランサーがたどり着くなんて話にしたかったのですが、メイツェルの性格ではそれすら許さないだろうという結論に至りこうなった。

さて、chapter 1はこれで終了。次はいよいよfa主人公が改めてカロード入りした以降の時間軸になります。

これまでは、序章であるリンクスの日常に重きを置きましたが、次からは経済戦争で成り立つ世界を描いてみたいと思います。

それにあたりいろいろなパーツをピラムに乗つけて、さらなる最適化を実際に動かしてを行いました。ロケットを始めて主力兵装として使ってみたのですがかなり強いですね。

おや、カノサワてこんなに優秀だったんだ。なんて発見がありました。とっつき？無理無理無理。

さて、おまけです。

集光施設破壊阻止に登場するレイブンネーム『デスクグリップ』A
Cネーム『ロングスピア』です。

緑色の重量機に、両肩追加弾倉、弱バズ、赤ブレと至ってシンプルな武装。このころから斬り合いを行う必要が本格的に無くなってきたのである程度離れた所から旋回戦を挑むのが個人的なセオリー。ただし流れ弾で集光装置を破壊しないようにしましょう。

そしてこいつは、アリーナに登場せず。ここのみで戦う事が出来る。

このころになればゲームにも慣れ、ある程度動かせるようになってるだろう。せっかくなら、集光装置を破壊せずにクリアに隠しパーツごといただいしまおう。

ちなみに、こいつは飛ばないため中央の構造物から地形ハメを狙える。

さて、今度は衛星内でチヨ 熱い展開を演出してくれるランク3を紹介したいと思います。

それと、ブレードの振り方について解説しておきます。ネクストは重2脚がはたき落とし、中二脚とライール脚は横振り、その他は突きとなっていますが、この物語では全ての足でこれら全ての太刀筋を行います。

あくまでも、プログラムにあるのはゲーム内でも見られる動作だけでそれ以上の事はAMS頼みになっています。

スピリットムーンがやったあれを解説すると、横降りの動作のまま旋回でその気になれば回転切りなんて事も出来るのですが中身が死んでしまうので多分やりません。

「久しぶりだな。ジュリアス。」

「久しぶりもないだろう、ついこの前も対戦したはずだ。」

「そうだったな。」

「それで・・・、彼はなんと?。」

「正式な依頼なら受けると言ってきた。どう転んでもあいつは傭兵リンクスという事だろう。」

「・・・。まあいいさ、あの程度のリンクスなら変わりはいくらでもいる。」

「・・・否定・・・。」

「ほう。お前が認めるとはな。どういう風の吹きまわしだ。」

「・・・。」

「そう言えば、企業のやつらは超大型フロートの動作実験に成功したらしい。上手い所隠しているが、情報屋達の間では有名な話だそうだ。」

「そんなもの、完成する直前で破壊してしまえばいい。出鼻と扱っ所を一度に奪える良い好機だ・・・。それより、アルテリアの襲撃プランの再確認を行おう。ここで中継施設を落としておくことが後に、事をスムーズに運ぶ布石になるだろう・・・。」

「アスピナの秘蔵つ子が戦闘中行方不明(MIA)か。なにが世界一の規模を誇るネクストAC研究施設だ。笑わせる。」

「口が悪いぞ。ダリオ。」

「事実を言っただまです。お前こそ、友人の失敗で愛人を失った割に平然としているな。俺の事を悪く言えるのか?。ん?」

「よさないか。二人とも。そんなことより、彼女が居なくなっってしまった以上。替えが必要だぞ。」

「そんなことなら心配いらん。わしが推薦するリンクスが居る。リ

リアム、代われ。」

「はじめまして。リアム・ウォルコットです。先日は歴戦の勇士たるローディー様にご指南いただき。光栄に思います。」

「ほう、ローディーを相手にするか。ただの箱入り娘というわけでもないようだな。」

「オツツダルヴァ様。貴方にもいずれ挑戦させていただきます。」

「良いだろう。その自信と老人への忠誠心、まとめて押し折ってくれる。」

「逆に押し折られないようにな。オツツダルヴァ、彼女の実力は本物だ。」

「なあ、これは笑えばいい状況なのか？」

CUBEとランサーは積まれた書類の前で、苦笑いを浮かべていた。そこは、ブローカーと商談を行うための部屋であり、やや金がかかった内装が印象的な部屋だった。

「分かりませんが、仕事がある事は良い事でしょう。」

ニーナは淡々と答えるがこんな量のミッションに関わる書類を見たのは始めてだ。業務課の連中仕事しすぎだぞ。

あの後、より多様なミッションに対応するため腕をLAHIRERライールの物に買い替え、撃ち捨て前提ではあるが重武装を施せるように脚部をSOULHソールフに変更したが、きつちり支払っているため金銭的な余裕は十分にある。第一に、その半端でない額の報酬は月に2回ミッションを受ければ喰うに困らない収入が得られるのだ。武人でもない限り好き好んで危険に晒されたがる職業人リンクスは少ない。

まあ、仕事がある事自体は喜ばしい事なのだが危険にさらされる率が高くなっている事を考えれば手放しに喜んではいられなかった。

「いや、しかしこの量はさすがに多いですね。」

さすがのCUBEキューブも呆れ気味だ。

「私がつぶれる前に、フラジールが潰れてしまいますよ。」

さすがの自信だ。まあ、その位の自信が無ければあんな変態じみたACを愛機と定められないのだろうが。

「安心せい。壊れたらワシらが半日で再起動させてやるわい。」

ザンは日本酒を煽りながら逞しい腕で厚い胸を叩き、そう答えた。頼もしい限りだが有事でもない限りそんな事態はご免こうむりたいやはり、命あつての物種だ。

こんな事態になったのには、訳がある。一つはリンクスが一人減った事でその一人分が二人に回ってきた事。二つは何を思ったのか知らないが、企業間での戦闘が再び激化してきた事だ。

「兎も角、俺は当面の間。GAの補給路を攻撃し続けていればいいんだろ。」

「ええ。大型物資輸送車両ASAMAを後3機。補給施設を4か所、それが終了したらGAが主戦場としているエリアに強襲をかけ駐屯部隊を排除します。」

「オーメルのやつらはジャイアント・キリングでも叩くつもりなのかあ。この前、ラインアークのホワイト・グリントが“カーちゃん”に追い返されたそうじゃないか。」

どこの企業の広報も現行最強のネクストとされるホワイト・グリントが老朽化が心配されているスピリット・マザーウィルに敗北した時の報道は印象的だった。

AFの優良性をうたい、ネクストACの時代は終わりAFの時代が始まると騒ぎ立てていた。結果として通常軍の士気は上がり、ラインアークの士気は底に付き止めに現在試験起動中の浮遊型AFアインサラーの事が大きく報じられ多くのリンクスが「こんなやつに手を出すのは願い下げだ。」と諦めに似た感情を覚えた。

「まあ、その為に武装を買い増したんだ。ランドクラブの大群ぐらいなら何とかしてやるさ。」

そうでなくとも、あれだけ用意しておけばどんな戦場にも対応できるだろう。こっちは稼げるだけ稼がして貰ってさらに上を目指すだけだ。

chapter 2 - 1 (後書き)

どうも、鈴木シキです。

なんか、ACの二次創作が盛んな今日この頃。負けてられないなんて思いながら、こつちよりこれが書き上がった後。つまり、ORCA戦争？、ORCA革命？が終了した後のネタが思い浮かんでしようがないです。

「王は、リンクスで彼の立場は『BFFの女帝』^{リンクス}を持っているから老人たちの中での立場も悪くないはず……。でも、AFが普及しすぎるとネクストの価値が低下、つまり女帝の価値も下がるわけで……。さてよ、どの道『首輪付き』は一ケタの上位3位ぐらいには入ってそうだな。

アンサラーは撃墜されているみたいだし要塞としてのAFの価値にも陰りが……。ん。ならやっぱACか。」

まだ、終盤までの満足いくテロップが出来てないのに……。ほんとココどうしよう。ゲームとしては存分に楽しめる場所なのですが小説でやると、すぐネタが尽きて困る……。とりあえず、10から5ぐらいミッションあれば十分かな。

さて、おまけです。

レイブネーム、フォグシャドウ ACネーム、シルエットの紹介です。

機動力にたけた軽二脚に、近接用のショットガン2機、ロケット、ミサイルと装甲さえ気にしなければそのままミッションに使えそうなアセン。

前進に、上下運動に、回り込み、と軽量機の基本となる敵の弾に当てられない戦い方を教えてくれる方。ただし、装甲が軽量機の性泣ける。上手い所引けばパターン化もたやすい。やられる前にやるそれが彼との戦いにおける鉄則になるだろう。

ちよつと、『首輪付き』について書きたいと思います。

ご存じの通り、AC主「プレイヤー」であり主人公にこれと言った設定はありません。故にしゃべらないし、決まった何かがあるわけでもない。

そういうわけで、この物語の中では『首輪付き』は喋りません。代わりにセレンが喋ります。どのくらい登場させるかもはつきりとは決めていません。もともと、あるルートを別勢力からというコンセプトで書き始めたのでニアミスする程度になると思います。

ん。会話は飛ばせないか。いっそ、一節当たりの文章量増やすか。

さて、次回はあの地下施設でかませ犬な目立ちたがり屋でも紹介しようかと思えます。

この世界で行われている経済戦争には、通常では考えられないルールがある。

一つ、戦闘要員としての歩兵の使用は原則行わない。これは、人間同士での戦闘は高確率で死傷者が出る、つまり労働力が失われてしまうため。

二つ、陣地には攻め入らない。これも似たような理由で敵を殲滅してしまうと次の仕事が無くなってしまふ、つまり需要が無くなってしまうため。

三つ、この戦争は、事前協議のもとで行われる。

「一先ず、この依頼を受けるとするか。」

ちかじか襲撃が予定されているミミル軍港からの部隊撤退を支援する依頼だ。と言うウル・トで入手した情報かは知らないが、被害を最小限にとどめ反撃するために部隊を逃がしたいので手伝えという事らしい。

大規模な艦対戦に加え、AFギガベースも確認されてため武装は充実させておくようにと言う事らしい。

「俺からの要望で、ギガベースの頭上からのヘイロー降下での奇襲を提案する。」

「伝えておきます。襲撃予定日時は一週間後ですので通るでしょう。」

「それは助かる。CUBEお前はどつする？艦隊相手のデータは取ってないだろ。」

「遠慮しておきます。私にもやる事があるので。」

「それは残念せつかく、歩合制で。弾薬費は向こう持ちで、支援“攻撃”つきなんだけどなあ。」

まあ、支援攻撃の下りはあくまで予測だが間違っではない。襲撃依頼を出したG Aは歩合制で弾薬費まで出したそうで、それに対抗するためにいい条件を出してきたのだろう。

「一隻、いくらですか？」

ほら、食らいついた。もつとも、「騙して悪いが（ry）」な所があるインテリオルの事だ。どこかに裏があるのだろう。第一、BF艦隊の本気の反撃はバカにならない。船一つがネクストのライフル一丁、或いはミサイルポット一機分の火力がある。単騎で突っ込んでどうにかできる自信など有りはしない。

「見てみるか？」

CUBEに書類を手渡すとにやつきながら、「この依頼は、私に任せてください。」と言ってきた。これで、弾避けは入手できた。

あの機動力ならいいようにひっかき回してくれるだろう。

「それじゃあ、支援機はフラジールでよろしく。」

「はい。」

ニーナは薄ら笑いを浮かべながら答え、CUBEは啞然としながら口を開いた。

「・・・計りましたね。」

「まあまあ、やるって言っただのはそつちだろ？」

ザンはその様子を魚に旨そうに一口酒を煽った。

フラジールは“飛ぶ”ためのネクストだ。国家統治社会が健全に機能していたころ、世界の空を鋼の翼で縦横無尽に飛び回りそれ専門の軍すら作られたという音速戦闘機をACで再現しようとした結果がこれだ。

歩くのではなく着陸するための足、ひじ関節が存在しない腕部、PAが風を切ってしまうにも関わらず極限まで空力特性を磨いた胸部、そして完璧なまでの紙装甲。

将来的には、この技術を応用して常時音速で飛びまわり、なお且

つ敵に確固たるダメージ与えるノーマルACを作り上げるつもりらしい。

リンクスとしては、そんなノーマルにやられる気も追いつける気もしないのだが集団運用されたらと思いとゾツとする物がある。

高度5000mを飛ぶ輸送機の中でアセンを変更したピラムがその時を待っていた。武装は変わらず、連射武器の塊で、結果として装甲は薄くなつたが、機体が軽くなりENにも余裕ができたのでさらに動き回れるようになった。

「ランサー連絡です。つい3時間前、ランク31ストレイドが同艦隊が護衛するギガベースを破壊したそうです。指揮系統は混乱、貴方達は半月状に展開する敵艦隊の中央を穿ち突破口を開いてください。また、敵艦隊の損害に応じてボーナスが支給されます。遠慮なく破壊してやってください。」

「ほええ。よくやったな。」

感嘆の声を上げるのも当然、駆け出しの頃にはギガベースのレーザガン避けきれずえらい目に遭ったのは今となればいい思い出だ。情報筋の話では、オペレーターが100%回避できるようになるまでシミュレーターに水だけ残して閉じ込めたそうです。」

「それはまあ、気の毒に……。ククク……。」

もはや苦笑するしかあるまい。

「さて、フラジール。用意はいいな？」

別の輸送機で護衛目標の方向から接近しているであろうフラジールに通信をする。

「はい、そのつもりです。私一人で突破口を開いて見せますよ。貴方こそ、ご自身が投げ槍ピラムにならないように気を付けてください。」

こいつはこういうやつだ。ACに搭乗する直前まで不満をタラタラと言っていた様子からは想像できない。

「そつちこそ、潜水艦の対艦ミサイルに掘られるなよ。」

まあ、固定目標用の対艦ミサイルにネクストが被弾する事は少ないが船を一発で沈めるミサイルだ。その威力はネクスト用の武装と

比較してもバカにならない。

「間もなく作戦開始予定地点です。時計合わせ準備、発進準備をしてください。作業員は所定の位置に退避してください。」

背後のハッチが開き、パレットごと機体を外部にはじき出すための蒸気がカタパルトに充填されてゆく。

「時計合わせ、3、2、1。投下！」

パレットごとピラムは大空に投げ出され、眼下には圧倒的な物量を生かし半月状に展開する事で包囲殲滅を試みるBFF第8艦隊が確認できた。

「敵に展開されてしまつては、飽和攻撃オウルレンジを受けてしまいます。あなたは部隊を分離し、攻撃その物を阻止してください。また、インテリオル部隊からの情報で海中戦力が確認されています。可能ならこれを破壊し安全を確保してください。」

「了解した。」

「敵の通信を傍受、サブ回線に接続します。」
敵艦隊の通信が響く。

「上空にネクスト確認、対空迎撃用意。各艦一斉射！」

その叫びと共に、艦隊から一斉に対空ミサイルが発射され、無数の帯のごとく白煙と共に鉄の矢じりが殺到する。が、所詮は音速で飛びまわるMTを想定し機動力を優先した地对空ミサイルPAを展開するネクストの装甲には塵程度の問題しかない。まあ、軽量機にはその塵が冗談にならないのだが。

「迎撃するのも面倒くさい。押し切る！」

ピラムを倒し、MBが上に向くように操縦権とAMSで操作し一気に落下速度を上げた。瞬間に近づく青い地面、PAの内側にまで侵入してくる大量の水はPAの天敵あれに不用意に着水しては首を絞めることになる。速度を殺さないように水面ぎりぎりのラインでピラムを持ち上げ、その衝撃波で背中に向けて広範囲に水柱が立つ。これで一時とはいえレーザー照射によるロックを妨げられるはずだ。それに、いかに天敵とはいえ霧程度でどうにかなるほどPA

は脆くない。

敵は多数、この間に少しでも数を減らす。まずは目の前のノーマルを10機は甲板上に積載できるのではないか思わせる全長400は超える空母に襲い掛かる、攻撃力はなくて制海及び制空権の要となる船だ。こいつを落として制海権を確保したい。そうでなくとも、艦載機に出られたら後でつらすぎる。

ピラムを浮かばせ、甲板を飛び越える様に四角い艦橋の前に躍り出る。PAに引っ掻けた人間が蒸発して影になった気がするがいつもの事だ。

「こちら、第15番空母。敵の攻ゲツ!？」

通信先はそこで事切れた。接近しながら起動させておいた使い方次第ではAFにすら甚大な損害を与えるパルスキャノン《PC01-GEMMA》が艦橋ごとCIC（戦闘指揮所）を抉りそこごと中に居た人間を蒸発させたのだ。機体各所に取り付けられたカメラがこちらに向く砲門を捉えロックオン警告がHMD内で鳴り響く。

「撃つて!!！」

近くを航行していた複数の船のMTを一発でスクラップに変える艦砲が火を噴く前にQBで急速後退しQTをきめマシンガン《03-MOTORCOBRA》を射程に入つた船の艦砲と艦橋にみまう。10数発着弾した砲弾によって頑丈な装甲はめくり上がり、艦砲は爆散し艦橋はCICを破壊され戦闘能力を失った。

これが、絶対の防空力を持つ事と人数を大幅に減らせるようになった為ほぼ全ての船に採用されているイージスシステムの弱点、このシステムは大昔に作られた物だがそれが昇華され兵装に人員を割く必要が無くなりCICだけで兵装の管制ができるようになった。ゆえにCICさえ破壊すれば後はどうにでもなる。

まだ戦闘は始まったばかり、ボーナズ対象は山ほどいる。レーダーを確認し、次の標的を、さらにその次の、さらにその次の標的を設定していく。

「次!!！」

凶暴さを秘めた声が自然と口から飛び出した。

chapter 2 - 2 (後書き)

どうも、鈴木シキです。

進行が遅い気がしたので文字数を3000文字にまで増やしてみた。ついでに、武装を変えたパターンで幾つかつくってみたが見栄えの良さでミッションでの効率を両立させようとしたら結局、ネタ機にしかならず。ために、戦艦の砲撃にあたってみたり、ローディーにボコされた今日この頃。

さすがにカノサワメインの重武装(笑) 軽二脚、x鳥は無理があった。

すこし、オールレンジ飽和攻撃について説明しておきます。ここでいう飽和攻撃とは攻撃目標の処理能力の限界を超えた量の攻撃を行う事を指しミサイル迎撃機能が確立した近年において開発された比較的新しい艦隊の戦い方である。

そして、あんな大艦隊がA C f aの世界で生き残る戦い方はこれしかないと思った。そうでなければ大艦隊である必要もなく、利益目当ての企業があんな金食い虫に投資するとは思えなかった。それこそ、A Fを量産した方がいいでしょう。

さて、おまけです。

レイブンネームオーリー、A C ネームムーンサルトの紹介です。

S1には「機密データ先取」で登場し、A C 三連戦の一機目として登場する。

軽二脚に追加B、両手レーザーライフルとネタの極みなA C で無駄に飛び回り、一戦目の戦場となる巨大エレベーターという狭い所で戦うのだが よく壁際の構造物に引っ掛かるため、ここヘラツシユをかけ一気に落としてしまう。こいつ自体にはあまり手間が掛かりはしないのだが、そうでなければ後がづらい。

「次!!」

レーダーを見て愕然とした、レーダーを埋め尽くすほどの紫色の点、映像のデーターが輸送機に送られ一瞬でミサイルの種類を割り出す。それらは全て対地爆撃用のミサイルで、その中には無数のクラストーボムを抱えている。そのミサイルが雨のごとく降り注ぐ、QBで回避しようとするがミサイルが突如分裂しぎりぎりまで接近さらに弾頭から円柱状の部分が爆砕ボルトで分離し無数の対物クラストーボムが十分な加速を加えられ重力に従って高速で落下してきた。

PAと装甲ごしに伝わってくる爆発の音と衝撃波、思わず身を縮め爆発によって真っ白に染まったHMDを細目で見る。数秒間にわたって続く辺り一帯を覆い尽くしネクストの推進力すら負かし動きほ封じる爆発、無数の爆発によって減衰していたPAに水がかぶりあっけなく消失してしまった。

「ランサー、戦艦の艦砲が狙っています。」

直接照準或いは山なりに一斉に300mmを超える大口径砲によって艦砲射撃が開始された。

「水中に潜る!!」

MBをカットし、ほぼ落下するように水中へと飛び込む。再形成されてかけていたPAに水被さり、装甲にも等しい硬さを与えるため高密度に圧縮され、光を放つほどのエネルギーを帯びたコジマ粒子に水が触れる。それは一瞬で水を蒸発させ、さらに次の水を沸騰させ蒸発させる。しだいにエネルギーが奪われコジマ粒子の循環が保てなくなつたPAは、いとも簡単に圧壊してしまった。

だがこれでいい。

水中で見える物は、船の船底と光が差し込む水面、深く暗闇に染まった海、幸い潜水艦はおらずまあ機関を停止させて潜んでいるだ

けかもしれないが敵艦隊はこちらが水中に入ったと見るや、魚雷と爆雷で応戦にかかる。

「魚雷の進入深度を上げすぎるな。あいつは僚艦を盾にするぞ。」
「爆雷を落とせ、艦に近づけさせるな！」

こちらが居るおおよその場所に向けて魚雷が投下される。水中ではQBが使えないが亜音速で移動する魚雷ぐらいなら楽に迎撃できる。はずだった。

「な！？音速魚雷だ！？」

水は、大気以上に強い粘性をもつ。それが抵抗となり魚雷であっても音速域に到達できないでいた。それは音速域での戦闘を可能としたネクストACにとって脅威にはならない事も指していた。だが、目の前の物はどうだ。ロケットエンジンの点火で音速域に突入した瞬間、魚雷周辺の水が蒸発しそれが膜となり大気中に居る状態に似た状態を作り出し、水中にソニックブームが走りピラムが煽られそれに続いて次の魚雷群が音速域に突入しすさまじい速度で各方位から接近してきた。

水を文字通り裂きながら直進するそれらに狙いを定め「当たれ！」そう念じながらのマシガン撃つ、一発でいいそれさえ迎撃できできればその衝撃波が周囲に伝わり水と言う粘りの強い物の中を音速で進むそれらはバランスを崩し自ら発生させた水の壁に激突して自爆するはずだ。

水を引き裂いて無数の砲弾が魚雷へ向け殺到する。

着弾。

水が浸入するより先に爆薬に砲弾が進入し起爆させる。海上には水柱が発生しその爆発が別の魚雷を煽り制御不能に陥った魚雷は水に激突し自爆するとさらにそれが新たな爆発を生み、やがて大爆発を発生させた。

「さっきの礼だ。水中から数を減らさせてもらおう。」

「フラジールから通信、水中戦力がこちらへ集まっている。デコイも爆雷も足りない。援護も求む。」

「敵は3Dで展開してきたか。あと20隻沈めたらいく。持ちこたえろ」

さっきの爆発でソナーはやられているはずだ。ピラムを反転させスクリューの代わりにハイドロジェットを搭載した船底の後尾へと砲弾を撃ち込み、航行機能を奪い。

続けて、三胴型船体をもつ戦艦の航行能力を奪った。しばらく前までは過去の遺物だった戦艦だが、今は艦隊全体の火力を底上げするという十分な役回りがある潰しておいて損はない。

「ネクストが海上に出たぞ！」

「全弾撃ち尽くしてもかまわん。どうせ奴は攻撃能力を失った艦を攻撃できん。」

「同じ手が通用すると思うな。全て避けられる事を念頭に入れて攻撃しろ。」

そのまま海上に躍り出ると待つてましたと言わんばかりに各艦から一斉にミサイルが発射された。レーダーには空中戦力やノーマルの存在も表示されている空母から発艦した物らしい。ENに気を使いなからQBでミサイルと回避し、巡洋艦を戦闘不能にする。

そうしている間に太った雀の様な形の21機編成の空戦MT群がこちらをロックしてきた。装備しているのはネクスト用のスナイパーキャノンもMTでも運用できるように改造された物、数で押す。戦略兵器であるネクストには上道手段だ。

加えバズーカにミサイルと標準的な装備のGA製のノーマルがミサイルの援護射撃を受けながら包囲してきた。しかし、一定の距離を保ってそれ以上近づこうとしないAAによる攻撃を警戒しているのだから動きがやたらと機械的だ。どこかの船で遠隔操作している無人機だろうか。

「CUBE、しばらくかかるがすぐに終わらせてそっちに行く。」

着弾しそうなミサイルだけを撃ち落としながら一機だけパルスキャノン起動させノーマルに照準を定める。

「攻撃を絶やすな。こいつをここで釘づけにするんだ。」

バズーカとレールガンそして艦隊からのミサイルを避けながら旋回しパルスキャノンの一斉射と上空に向けてのマシガンでの射撃、パルスキャノンは的確にノーマルを捉え股関節を撃ちぬいて、浮遊能力を封じ有人機は脱出ポットが射出されそのままポットとなり、無人機は浮かぼうとあがき続けたがやがて沈んでいったがMTは重量の軽さを生かし一糸乱れぬ急旋回を集団で行うとさっさと射程距離から逃げ出して行った。

そのすぐ後に離れた後でこちらへ向かって突撃してきた。ここまですべて組織的に動かれるともはや生物のようだ。しかし、近づいてくるなら好都合だ飛び上がりMTの砲身が向かない頭上へと陣取った。そのまま後退しながら上昇しMTを待ち構えた。しかし、MTは左右に分かれロールを行い砲身がある腹をこちらに向けてと一斉にレールガンを発射してきた。超高速で飛来する砲弾はPAを突き破りお世辞にも厚いとは言えない食い込んだ。

「MT程度の出力でネクストの装甲が突き破られるか!!!」
そこにマシンガンで反撃を行う、いくら早かろうとMTはMTマシンガンが数発当たっただけで煙を上げ海上に落下していった。当たった先から次のMTが飛来しレールガンを放ちそれをも叩き落とすしかし、同時に攻めかけられるため全ては落とすしきれず背後へと半数以上が抜けていき、その半数はまた急旋回を行い攻めかかってくる。

その間にも艦隊からミサイルが放たれ、足元のノーマルが命中弾を当てようと集まって来ていた。

「数が多い。」

chapter 2 - 3 (後書き)

どうも、鈴木シキです。

AC Wikiが新しくRAVENWOODに名称変更されましたね。それにしても、なんでMUGENにはニンボール・セラフしかACが居ないんだ……。だれか俺に絵心と知識を分けてくれ『ビットマン』（完全にネタキャラ）とか『フォックス・アイ』（ネタ抜き）とか、『AMIDA』（数の暴力）とか作るから。

え？排除君（いるらしいがみた事無い）やファンタズマ？あれは“AC”ではないだろ。

さて、おまけです。

初登場はAC3、ストーリー上での登場はACSLのACネームサイプレス、レイブネーム、テン・コマンドメントについてです。熱ハンドに、青ブレ、弾薬費が何より脅威の両肩チェーンガンのフロートACで彼自身は管理者を神のように崇める狂信者です。

強化人間である故に、構え無しでチェーンガンを撃ちまくってくる。しかも、フロート故なかなか早い。そして装甲が決して厚くない。しかも、チェーンガンはライフル並みの破壊力を持ち、それを連射してくるので連続での被弾は命取りになる。

ただし、SLの機密データ先取では崩壊した管理者の手前での戦闘となり複数の障害物が移動エリアを制限しているため機動力を生かすきれないでいるだけでなく、たまに障害物に引っ掛かっている。ここは装甲の薄さに付け込み、引き撃ちで距離を保ちながら切り返して攻撃を避け、高火力武器で一気に畳み込んでしまう事をお勧めする。

さあ、これを倒せば今度は管理者頭装備（興）のACがやってくる。これを倒せば『機密データ先取』は目標達成だ。

あ、今回出てきたMTのモデルはAC3及びNX系に登場し、NXで撃墜したヘリに轢かれたり、地味に痛いプラズマ？やミサイル

を撃ってくる変形型MT10-BATです。こいつなんか可愛いので結構好きなMTだったりします。こいつが僚機に3機ぐらいいてくれたら心強いことこの上ないのだが、今度のACは小さいらしいのでこんなやつが僚機にならないかなあ。

EN残量に気遣いながらそのままパルスキャノンを撃ち切ると爆破ボルトを動作させることでパージし左右を切り替え、MTを無視してノーマル集団へ突撃をかけ突破し視線に入った戦艦に取り憑きゼロ距離でマシンガンの砲弾を浴びせCICを破壊し沈黙させるとロックオンもせず手でパルスキャノンを視界に入った船の船底に当て沈めてゆき、接近してきたノーマルへ向けて飛びかかるように飛び立ち、装甲が薄いブースターへ向けてマシンガンを発射し内部構造を破壊した。

「わるいな。ルール通りに戦うわけにはいかなかった。」

ロックオン警報が響く、QBでの緊急回避を行うとOBをどうさせすり抜けざまにより脆く二次破壊の予測が困難なミサイルランチャーや主砲に向けてパルスキャノンを浴びせるとたやすく装甲を貫きミサイルに着弾するとレーザーの熱でミサイルが起爆し一機のミサイルの爆発が次のミサイルの爆発を呼び瞬く間の爆発の連鎖で船がキノコ雲を形成するほどの大爆発と共に二つに押し折れた。

「次!。」

OBは停止させない。衝撃波で後方に水柱が発生し、HMD内の映像ははるか後方へとすっ飛んでゆき遠慮なく各艦をすり抜けざまにパルスキャノンをミサイルポットに当ててゆく。

その瞬間、戦場は虐殺の場へと変わった。黒煙を上げながら沈んでゆくどてつぱらに大穴をかけた船、現在進行形の形で甲板の消火に当たっているパワードスーツの姿も確認できた。船の爆発の巻き添えをもらって水中へと放り込まれブースターが不完全燃焼を起こしそのまま沈んでゆくノーマル、対してこちらは余裕あるEN環境は息切れする事のない連続QBを可能とし音速域での戦闘行動を可能としていた。

「また、何か言われそうだ。」

そう、この戦争は敵を倒すことが目的ではない。戦う事で物資を消費し需要を発生させることにあるそういった意味では敵を全滅させる事はクライアントの意思に背いているともいえた。

PAがずいぶん薄くなっている事を確認するとOBを切り、残弾少なくなつたパルスキャノンを上空のMT群に浴びせパージし、マシンガンの残弾数を確認する。およそ、500発、損傷度は指数(AP)換算で50%といったところか。まだ十分戦える。

「どけ！どけ！どけ！。AFのお通りだ　！！」
「まったく。起動した途端元気になりましたよ。轢かれないでくださいねランサー」

やけにテンションの高い男の声に続きCUBEのやる気があるのかないのか分からない淡々とした声が続いた。レーダーに味方の緑色の表示で距離を引き離し接近している物が二機、一機はフラジールだと表示されているが一機は不明機の識別表示がなされていた。

「ありがとよ。あんたが大暴れしてくれておかげで正面の敵を気にせずに済んだぜ。」

猛スピードで接近してくる不明機、その機動力からOB中のフラジールかと思つたが通信とつじつまが合わない。とりあえず、ココは進行ルート上になりそうなので移動を開始した。

「なんであれが起動している。」

「後方の部隊はどうした！。水中戦力もいたはずだ。」
フラジールがオーブン回線で答えた。

「あれでしたら、全艦航行不能にさせていただきました。潜水艦隊が出てきたときには焦りましたがなに、フラジールの機動力があればどうという事はありません。」

「何気にひどい事を言っていないかCUBE。」
自然と声が弾み、CUBEは淡々と返した。

「敵部隊の中核に単機で飛びこんでこれほどの戦果をあげられる貴方もなかなかです。フラジールでは最初の爆撃で大破ですよ。」
「違う。」

「そこどいて、引いちゃいますよ。」

「ランサー、左です。」

今度は女性の声で、すぐにニーナが指示を出す。

気がつけばすぐそこまで識別不明機の信号が近付いているではないか、咄嗟にQBで回避するとそのすぐ横を水柱を立てながらあれほど苦戦していた艦隊を掃除機で吸い取って行く、船首？のレーザーブレードで船体を斬り裂き進みながら黄色く巨大な物体が通り過ぎて行った。

「あれが、ステイグロ。実際に稼働している姿は始めてみました。」

「ああ、勝てる気がしねえ。」

さらにある程度斬り進むとそのままの勢いでドリフトでもするかのように旋回し敵艦隊の攻撃を完全に無視してさらなる突撃を開始した。

「出鱈目だ」。それが正直な感想だった。軽量機のOBでも追いつききれないほどの速度で海上を爆走しているだけでも驚きだが、あのサイズでスピードを殺さずに旋回している。しかも、船の船体をバターの様に切り裂くレーザーブレードの出力、一体どれだけの大きさのレーザー発振機を搭載すればあの出力を維持できるのか。

敵艦隊の通信はもはや地獄絵図のごとく混乱し、断末魔しか聞こえない。我先に退避する艦隊を巻き込みながら決死の抵抗を試みる敵艦を露でも払うかのように青白い光を放つレーザーブレードで真っ二つにしてしまった。

こちらへの攻撃はなく。艦隊はステイグロの相手だけで限界のようだ。考えを切り替え通信を開く。

「これより、インテリオル艦隊の護衛行動に移る。ステイグロの援護が必要になったら言ってくれ。」

OBで艦隊のもとまで引き返し、損傷状況を確認してみると無傷でない物の沈んだ船はないようだ。

そのほとんどはでっかいコンテナとクレーンが印象的な補給艦ばかりで、損傷が激しい巡洋艦ばかりで戦闘能力はないと判断してい

いだろう。

現在進行の形でミサイルか何かで船体にあけられた穴を外からMTが水中溶接機を使って鉄板を溶接して栓をしている所を見ればまだ自力で動けるで動けるらしい、そうしている間に敵艦隊の方向から水柱が高速で接近してきた。

「音速魚雷です。こちらの艦隊を狙っています。味方艦デコイ投下でもこの深度じゃ。」

「それこそが狙いだ。やつら味方艦に被弾する可能性が無くなったから安全装置を外しやがった。」

さらに水柱が7本まとめて接近してきた。逃げながらも瞬時に味方の援護を行うとはたいした組織力だ、ネクストACやAFが無ければこいつらには勝てないのではないだろうか。

「フラジール！！」

「貴方も。」

つづけて、山なりにミサイルが飛来する。

「対艦ミサイル接近、迎撃を！」

「フラジール上！！」

「下。」

ミサイルはフラジールでなんとかできるだろう。接近する音速魚雷はこちらで迎撃する。前方向のQBを発動させ、一気にトップスピードまで機体を加速させると音速魚雷と艦隊の間に入り、フラジールは対艦ミサイルへと突っ込んでいった。

「墜ちろ、墜ちろ、落ちろ！！」

戦略目標の達成を目前に確信にも似た感情を覚えながら、叫ぶ。しかし、魚雷は突如より粘性の弱い大気中へと踊りでると、水中で音速域に達するためのロケットエンジンの炎を噴射させながらさらに加速して突っ込んできた。

「大気中も飛ばせるのかよ。」

いや、形が違う。胴の両端にデルタ翼が生えている。地面効果をねらった新型の水上兵器のようだ。だが、早くなつて誘爆を狙えな

くなっただけ撃ち落とせばいい。いつものミサイル迎撃と同じだ。

「ええい。メンドイ。吹っ飛べー！」

力が周囲に一気に広がるイメージを送りながら、手元の操縦桿を操作しミサイルが爆発範囲に入る直前でAAを発動させる。爆発の圧力で足元の水が水しぶきを上げながら大きく掘り下げられ、緑色の爆炎が広がり、そこに飛び込む形で水上兵器群は煽られ自爆装置が作動し次々と爆発してゆく。その最中にもマシンガンを放ち水上兵器を叩き落としてゆくが撃ち落としたその背後で一機の通過を許してしまつた。

「チツー！」

その水上兵器の側面に発砲音と共に一発の砲弾が飛びかかり、爆発させた。爆発で煽られた水が目標となつた船に被さり船体を濡らす。

「おい、ネクスト。俺たちが居る事を忘れてもらっちゃ困るな。」

それは巡洋艦からの通信だつた。こいつは元々こういう事が出来る様に建造された船だつた、気にもかけず行動不能にしている船だけにその戦闘能力を過小評価していたらしい。

「つづけて、護衛行動を頼む。」

「尽力させてもらう。」

敵艦隊が散り散りになつて撤退してゆく中、ステイグロによつて開けられた突破口を艦隊が通過したのはこの数十分後の事だつた。

その道中の様はまさに地獄絵図だつた。真つ二つに斬り裂かれた船体は辛うじて浮力を保ち浮いている物もあつたが、船員が救命ボートで海上を漂い、煙を上げていない船などなかつた。時折聞こえる爆音は残つた爆薬か、燃料タンクに火が引火したものだろつ。

ネクストACでもここまでではできない。いや、有沢社長ならやつてのけるかもしれないが自分では無理だ。戻つてきてすぐに艦隊に先行し敵艦隊の反撃で各所に穴をあけ自分たちがその脇を固める頼もしかったステイグロ《AF》が言いようがなく恐ろしく感じた。

chapter 2 - 4 (後書き)

どうも、鈴木シキです。

無駄に長くなりすぎた気がしてしょうがない今日この頃。ちょっと殺伐とすぎたんで次回とその次ぐらいは肩の力を抜いて読める話にしようとして現在調節中。終盤は状況が変わってきますしね。

さて、おまけです。

レイブンネーム、ゴールドブリットACネーム、クローバーナイトの紹介です。

興頭の中量二脚機で武装はレーザーライフルと分裂ミサ、12連ミサにシールドとスキの少ないアセン。機密データ先取では3番手として登場し上層部のガラスを割って登場する演出は管理者の生き残りを思わせる。

こいつ自体はあんまり強くなく普通に戦えば勝てる相手なのだが、先の2機が居るので状況によってはかなり厳しい戦いを強いられる。管理者の残骸があるエリアまで引き込むと管理者にぶつかり続ける事があるのでこれを盾に戦うのも手かもしれない。

願わくば、このタイピングでk a r a s a w a - M k 2を拾いに行きたいところである。

「終わった。こんな事になるのなら爆撃仕様でくるんだっただあー。」

「愚痴つても、事態は好転しませんよ。ランサー」

ミッションを完了し、機体を格納したランサーが輸送機のコックピットに入ってきた途端に出した言葉はそんな言葉だった。

「でも、あれなら数字の上ならかーちゃんも強引に破壊できるはずだろ？近づく前に叩き落とされそうな気がするが。」

「では、今度は輸送部隊でも破壊しますか？。」

「元より、その計画だろ？。今度は輸送用クエーサー8機と護衛部隊、弾たりるかな。」

「ブレードを持っていけばどうにかなるでしょう。」

「確かに。」

まあ、そういう時のためにそういう武装も購入しておいた。なんとかなるだろう。

「そういえば、損傷の度合いはどうだ？」

格納庫へ声をかけてみるとご機嫌な大声が聞こえた。

「はぁ気にすんなや、この位なら明後日にはうごかせらあ。」

「よろしく頼むよ。」

「あいよ。」

ニーナから予想見積もりを受け取り、自分の取り分を算出すると十分すぎる額が残る事が確認できたこれで、当分暇だ。何をして時間を過ごそうか。家路へ急ぐ機のコックピットの窓から緑色のスモッグが浮かぶ空を見ながらそんな事を考えた。

現時点で、現役のリンクスの多くが仕事をしては休み或いは訓練、仕事をしては休み或いは訓練という生活を送っている。それにはい

くつか理由があるがそれまでネクストが必要とされるミッションは多くない事、また法外な額の収入があるので滅多な事をしなければ余裕で暮らしてゆける額の収入があるためだ。

そんな、休暇の間リンクスは思い思いの時間を過ごす。社長業にせいを出す者や配下の傭兵部隊をビシビシと鍛えあげる者、企業の顔としてテレビ出演などに引っぱり尻な者、己を磨く事に余念がない者、楽しんで稼げる方法はないかと思索する者。

ランサーはと言うと、己を磨くタイプだ。機動時のGに対する対G訓練などのように身体能力を鍛える事も重要だが、AMSが脳波を読み取っている特性上、機械的な面だけでなく思い通りに体を動かせるかどうか重要になってくる。ぼんやりと体を動かすのと同じして体を動かす事が違うようにやはり、AMSもはつきりとイメージしながら使用した方が確実に情報を読み取ってくれる。

そのイメージする力を上げるトレーニングの方法は物は人それぞれ、純粋なイメージトレーニングを積む者、自分の機体を動かすのに必要な動作を徹底的に繰り返す者、後はダンスをする者もいる。それ以外には、トレーニングプログラムを繰り返す事がある。

「ええ」。つまりですね、ミッションで行われる行動をシミュレーターで体験するのと体で体験するのではどちらが効果的かという実験ですね。」

白衣の研究員が軽いノリでそんな事を言った。

そこは、コロニーアスピナの普段は室内戦を想定した模擬戦を行うために用意されたキルハウスが建てられた倉庫で、今は家二軒分の大きめのキルハウスが建っていた。そんなこと言っても要は木枠とベニア板で作られた簡単なもので、外から見ればおおよそ2階建の構造だろうか梁の数を見る限りかなり複雑な構造のようだ

「そのつもりだけどさ。効果あるのこれ？」

「ま、やってみないと分からないというやつですのでよろしくお願ひします。それから、訓練生も参加するので良い所見せてください。」

「

「はい、はい。」

「こいつらにとってはこの位の実験は日常の事で、一々厳しくしてられないという事がこの軽さの原因だろうか。」

「そこ、何たるんで居るか!！」

ほら、訓練生の教官が来た。あくまでも戦術教官であってリンクスではないがAMSは持っている。戦闘能力は悪くないが、よる年波には勝てず今なら叩きのめせる自信がある。

「まあまあ、血圧が上がりますよ。教官」

「おまえ、言うようになったな。」

「そりゃまあ、3機のランド・クラブに囲まれた時に比べりゃ人間一人ぐらいの方がまだマシですからね。」

教官がこれ以上ない笑顔で口を開いた。拳が飛んでこないのはリンクスを傷付けたら教官であろうと立場が危ういためだ。

「よし、ではこの実験が終了したらクリアタイムを競って負けたら今晚おごらせるからな。」

「いいですよ。そしたら教官が負けたら逆に奢ってもらいますからね。」

教官は苦笑で返すと背中を向け待っている研究員のもとへと歩いた。

「このHMDを付けて貰います。これの中に敵が表示され自由に動いて攻撃してきますのでせいぜい当たらないように気を付けてください。それとこれが今回の実験で使用するコントローラーになります。ネクスト用のマシンガンとオーメルの汎用ブレードを模しているので参考にしてください。」

フラジールが装備しているマシンガン型のコントローラーとノブリスオブリージュが装備しているブレードを模したコントローラーを腕につけ、サングラス型のHMDを付けるとネクストのHMDによく似たレイアウトになっており、なんだかコスプレしているような気分になりだんだんと「効果がありますように。」なんて祈りたい気分になってくる。

「これの、ゴールは上層階にある目標を破壊する事です。道中ノーマルやMT、防衛兵器が攻撃してきますが好きに対処してください。」

「了解。」

夕刻、コロニアスピナ展望エリアにて。

半分ほどにへったポケットマネーにため息をつきながらランサーは雲ひとつない夜空を必要最小限の光源の実が配置された展望エリアのソファアに横たわり見ながら酔いを醒ましていた。星空はコロニアを照らすスポットライトのせいと殆ど薄れているが星空を見上げる事が目的ではないので問題ではない。

時折、夜空を小さな影が複数横切るがそれは数万の一般市民が暮らすクレイドルだ。あそこに暮らす人々はどんな暮らしを送っているのだろうか、ずっと地上で生活してきた身としてはあんな過密地域で暮らすなんて想像できない。

籠の鳥のような生活だろうか、それとも家畜のような暮らしか。自分がこんな事を思うようにクレイドルの人間は地上の人間の事を野蛮人とも思っているのだろうか。

「あの、ランサーさんですか？」

12、3歳の少年の声が聞こえたので起き上がりながら姿を確認した。たしか、ニーナの子供だ。彼女の住居は軍事エリアではなく下の住居エリアの一角だったはずだがどうしてこの子が居るのだろうか。しかし思いつめた顔をしているどうしたのだろうか。それに身につけたウエストポーチの膨らみ方も気になる。

「子供がこんな時間にこんな場所で歩いてはいけませんよ。」

「これでも、高等学校2年生です。子供扱いされる筋合いはありません。」

「そうか、よかった。」

自分が稼いだ金が子供へと投資されている事に何故か救いを感じ

た。どうしてだろうか。

「お母さんは、今日も泣いていました。リンクスのオペレーターなんかしてごめんなさいって。だから……。」

下を向いて話していたかと思うと、急に鬼気迫る表情になりウエストポーチに腕を突っ込む。その瞬間、反射的にソファアールから跳び起きるとそのソファアールを蹴り飛ばし、近場にあったソファアールの影に隠れた。「痛！！」という声が聞こえた所を見るとソファアールがぶつかっただけらしい。腰のガンホルスターに手を添えるとソファアールの影から姿を確認した。

手に持っているのは標準的な護身用拳銃だ。弾の口径も小さく反動も殺傷力も小さい加え銃自体も大人の手のひらに収まるほどの大きさで装弾数も10発未満とたかが知れているため、人を殺すには不向きすぎる。

対してこちらは、人を殺すための大型フルオートハンドガン、加え大人だ。戦力差がありすぎる。

「止めてくれないか？。このホルスターのボタンをはずした瞬間、非常事態として武装警備隊がここに飛んでくる。それに、ニーナの子供のお前を傷つけたくもない。」

「お母さんはずっと、泣いていたんです。それにリンクスはお父さんとその友達を殺した。だから許すわけにはいかないんです。」

軽すぎる発砲音が響き身をひるがえし隠れる位置を変えた。今の音は確実に誰かに聞かれただろうが、聞きなれた音である以上どんな反応が返ってくるかわからない。猶予はなくなつた。

「バカか。」

chapter 2 - 5 (後書き)

どうも、鈴木シキです。

本日は選挙の投票日、投票権をお持ちの皆さんはちゃんと選挙行ってきましたか？僕の住んでいる地域ではあいにくの曇天で選挙へ行ったついでに本屋へ行くことしたら雨の粒が大きくなって自転車をウターンさせました。

さて、いきなりやると無理やりすぎるのでワンクッション挟んでから今度の話は輝かしい戦果は誰かの涙と一体そんな話です。

物凄い、飛ばしたい……。でも、これは『経済戦争で成り立つ世界』を描こうとするどこかで描かなければならないネタなので割り切りました。

それではおまけです。

衛星兵器内探査活動に登場する僚機ACネームタイムテーブル、レイブンネームディリジェントの紹介です。

ミサ腕の中4脚にチェーングンと10連ミサを装備4脚らしく地上戦を行うがミサイルはミサイル避けができれば大した危険にはならないのでダメージとしてはチェーングンの方が怖い。

しかし、武器腕の性装甲が泣ける。普通に戦えば負けることはないだろう、ツウかこいつ、あの硬かったりそこそこ攻撃力があつたりするMTだらけの密室でどうやって進んでいったのだろうか。チェーングン一本では敵しすぎる気がする。

さて、二週間後にお会いしましょう。

戦争は全てをのみこんでゆく。金、兵器、住宅、命、そして数値化できない数多の物だがそれは“経済戦争” 出会っても例外ではない。

緊迫状態は続いていた。銃を抜くに抜けず、残弾を気にして撃つに撃てずどちらも動けずまた引くに引けずにいた。警報を発令するのは容易いがそれは権力と言う暴力で押さえつける事につながるそれは今後の関係を考えると良くないはず。

「ニーナが俺の事をどう思っているかは分からないけどさ。俺はリンクスだ、物をぶっ壊すのが仕事だが結果として中に乗っている人間を殺す事もある。だからって俺を恨むのは筋違いで、俺を殺したら一番困るのはお母さんだけ。」

この前だって、確認できただけで30人以上殺しているあれだけの対艦隊戦をやった分にしては比較的少ない方で褒められる数だ。

「だから、諦めろって！そんな事できるわけないです。」

「いいから落ち着け、俺を殺しても状況はかえって悪くなる。だって俺を殺さずとお母さんが幸せになれる方法を考える。」

「無理に決まってるじゃないですか。貴方がリンクスとして仕事を続ける限りお母さんは仕事をするんですから！！」

本音が来た。要はリンクスのオペレーターを辞めさせたいらしい、となると俺が戦場に出なければいいわけだ。

「なら、お前“達”が経済戦争を終わらせるだ。俺は経済戦争が終わってしまったては困る。」

とりあえず、感情の向け先を俺から別の物ものにして落ち着かせよう。そうでもしないとこの場は落ち着きそうにない。

道徳的に考えれば経済戦争と傭兵の存在を否定する彼が正しくて、経済戦争の永続を望み傭兵の存在を是とする俺が間違っているかもしれないがこちらは傭兵だ、経済戦争の終結はそのまま失業を意味

する以上終わられると非常に困る。

「達つてそう簡単に集まったら苦労しません!!。」

発砲音が響き、また位置を変える。

「そうじゃない。集めるんだ、この経済戦争も遠からず停戦期間を迎えるそうすれば今まで通り反戦意見がぶり返し始める。それまでに出身地の壁を越え大反戦連合を作れば停戦期間を延ばすことくらいどうにかできる筈だ。」

要は、減った人口が増加までの猶予期間なのだ。各企業は経済戦争で培われた技術を整理したりそこから発展させ新しい兵器を作り出したりと言った事をしているため正しく停戦期間かと言うと疑問が残る。そうやって作りだされた兵器はやがて量産され新たな戦火を生み出しそこで得たノウハウが新たな技術を作り上げてゆく。一人を数十メートル飛ばす事が限界だった航空機が僅か100年で音速域に突入したり、大国間のいざこざが人類を宇宙へ進出させたりしたように“戦争は発明の母”とでも言つたところか。

「幻です。そんなの、貴方達は戦争を煽つてそれで暮らしている貴方達の様な人間が居る限り戦争は終わらない。」

まったく、正論すぎて泣けてくる。さて、どうやったら平和的な解決への道を示せるのだろうか。

パツ!

さすがに二度の発砲音を異常と判断したのか、必要最小限の明かりのみがついていた展望エリアのLEDライト群が一斉にひかり二人を照らしあまりの明るさに一瞬目がくらむがすぐに慣れる。

「そこ動くな!!。」

「あゝあゝ。来ちまつたか。」

ソファアの影からのぞくとガンタイプのスタンガンをもった警備員2名とどこかで合流したのか二ナナの姿があった。警備員は銃口を子供へと向けながらこちらに歩み寄ってきた。

「リンクス、お怪我は?。」

「なんともない。大丈夫だ。」

ニーナが子供へと歩み寄り、抱きつく。彼は銃口を下に向けた。

「エヴァ、怪我はない？」

その名の意味は『永遠』。それが何の意味かは分からないが平穩を祈った物だけである事は予想できた。

「お母さんどうして・・・。」

「護身用の銃が無くなれば誰だって心配になるでしょ。それに貴方が銃なんて持ちだす理由はこれしか思い浮かばなかった。」

ニーナは泣きながらそう言った。それもそのはずだ、リンクスには非常時に限りその対象を射殺する権利が与えられている。企業にとって一般市民とリンクスではペットと飼い主ぐらいの差がある存在なのだ。俺はそんな人間ではないが躊躇わず銃を抜き殺しにかかるリンクスもいるだろう、心配するのは当然と言えた。

「それに、実弾が入っているって思った？」

ニーナが銃を受け取るとマガジンのロックを外し中に装弾されている弾丸を見せた。人の小指ほどの小さな弾丸ただその弾頭は真鍮でコーティングされた鉛の塊ではなく。樹脂製の硬質ゴム弾だった。殺せないわけでないが殺傷力が低い弾だ。

ニーナはそれを警備員に渡すとこっちの方を向いた。

「リンクス、私は貴方のオペレーターを辞退したいと思います。」

「そうか。でもこれからいりようだろ、稼がなくていいのか？」

遠巻きに気にすると言ったつもりだがあまり届いていないようだ。

「いいえ、この子の為に良くないと思いますから。」

「それでは行きましょう。」

1人の警備員に連れられ二人が歩いてゆく、不甲斐ない気分になるがこればかりはどうしようもない。そうだ、良い事を思いついた。「おい、エヴァ。もしもの事があつたらこっちに來い、敵を知るのも変えるためには必要だぞ。」

彼は振り向くと面を食らったような顔をして警備員に連れられて行った。

「リンクス、今後からは貴方自身のために危険を感じたらすぐ銃を抜くようにしてください。」

「こいつはあんまり、使いたくないあんだがな。」

そう言いながらガンホルスターに触れる。

「それでは困ります。お願いですからすぐ抜いてください。」

「分かったよ。」

久しぶりに、PDWとこいつの射撃訓練でもやろうか、そんな事を思った。
サブマシンガン

翌日の新聞には、先日の発砲事件の記事が小さく乗っていた。普通ならもう少し騒ぎになるが“殺される覚悟”を決めてリンクスになった俺にとってはあの位、起訴するほどの事でもなく。

警察は刑事事件として処理しようとしたがゴム弾がソファーに食い込んだだけという軽微な被害であったり燃焼剤の量がギリギリ弾詰まりしない限界の量まで減らされた眼球に当ててもしなない限り大したダメージが与えられない弱装弾と呼ばれる弾丸だった事が合わさって、子供がガラスを割っただけと同じ扱いがされ穴が開いたソファーの弁償だけで事がすんでしまったのだった。

その数日後、装甲を張り替え、組み立てる前のピラムに塗装が施されていた。

「ほらそこ、サボるんじゃない。塗装は時間が命なんだ。」

シンナー臭い作業エリアでザンの激が無駄口をたたく作業者に飛ぶ。

「なあ、俺もやろうか？。自分の機体だしそれくらい自分でやるぜ。」

俺は少しの暇を見つけて塗装の様子を見に来ていたACは元々パーツを交換する事でどんな戦場にも対応できる兵器で外見も持ち主の意向次第でいくらかでも変わる物であってもやっぱり愛着わく、特に第一印象を大きく左右する塗装作業を確認せずにはいられなかったのだ。

「でも、匂いで分かるだろ。結構危ないじゃ。」

「コジマまみれな生活している人間にそんなこと言われてもなあ。」
まあ、極力触れないように努力はしているがリンクスである以上
コジマ粒子に直に触れる事は免れない。人よりは多く被曝し多くの
コジマ粒子を吸っているだろう。まあ、それが確実な原因で死んだ
リンクスの例が居ないことから実際の毒などたかが知れている。そ
れでも数十年で地球環境に止めを刺す程度の毒性はあるのだが。

「ちがねえの。」

「作業着とマスクを付けばいいな？」

「おうよ。分からねえ事があつたら聞いてくれ。」

なれない作業用の大型エアブラシを片手にピラムに塗装を施し
てゆく。機体色は昔から空中戦での迷彩効果を期待した水色ベース、
といってもこいつはただの塗料ではない。完璧ではないしこんなで
つかい物が動き回っていたら意味もない気がするがある程度のステ
ル性を持つ塗料でネクストACが光学ロックに依存している原因
となっている素材が含まれている。

時が来れば、さらに高いステルス性を持った素材が開発され真つ
先にMTに採用され、ECM無しでレーダーに映らないMTが実用
化されてゆくだろうがその為の光学ロックである。反面悪天候に弱
いがそもそもPAは天候が天敵なのでそういつた環境は限定される
ので問題はない。

chapter 2 - 6 (後書き)

どうも、鈴木シキです。

最近は暑くなり、夏全開だなあって思う今日この頃。暑い、そして喉が渇く。家の酒飲みはビールを飲んでいるが、あれには脱水作用があるので水分補給はほんの少しの塩を振った水にしましょうね。

さて、おまけです。ミラージユ本社ビル防衛に狭いフィールドで火炎放射機の塊と言っいやな相手の僚機として登場するACネーム、プロミネンス/レイブネーム、ウォーターハザードの紹介です。

上記のミッションの後半戦に登場し、葉フロに腕オービット背中にもオービット、そして肩に連動ミサと強シヨの一発で2000は軽く吹っ飛ばす超紙装甲であるが一秒でも早くもう一機の敵を倒しておかないとこいつに削られ熱との組み合わせで一瞬で落とされてもおかしくない。

そして、至近距離で動きまわりこつちをかく乱してくる。こいつらは全力で引き撃て!!。

あ、PDW (Personal Defense Weapon :
ピーデーダブリュー・パーソナルディフェンスウエポン) の説明もここでしておきます。

平たく言ってサブマシンガンでもいいのですがこれの特徴としてそれ専用の弾を使う事にあります。現在の所、著名な物が3種類 (MGS2及び4に登場したP90が有名かもしれませんが) ありますがその性能はサブマシンガンとライフル銃の中間と言った所。

ただし、この専用の弾がネックとなりあまり普及していないように、ライフルをそのままサブマシンガンだいままでに小さくした物もあります。リンクスが機に積む為に支給されている護身用の銃を考えたときこれになった。

そもそも、ネクストが撃墜されたらよっぱどの事が無い限り機を

捨てて逃げるより大人しく降伏していた方が安全な気もするし、戦うにしてもネクストが運用方法上そこは敵の拠点ですのでAC4でうろついていたパワードスーツの大群と戦う事になりかねないため、使用されることはないと思いますけどね。

追記

ぐがー！！また話が無駄に長くなった！！！！

一昨日 ニーナ宅

ここはアスピナで仕事をしている人々だけが生活している居住区だ。アジアにあったという円周状の集合住宅をそのまま高くしたようなそのアパート群は周囲が緑化され、この中庭には遊具などが設置されており十分子供も育てられる環境が整っていた。

「みて、あのランサーじゃない?。」

「確か、傭兵として活動しているテスト个体じゃなかったかしら。」
そんな会話が聞こえるが、事実なので気にはしない。

「やっぱり、銃を持っているのかしら?。」

「持っているじゃない?とびきり強力なの。」

「そういえば、この前発砲事件があったみたいだけどその当事者じゃなかったかしら。」

「知らないわ。」

さて、もう一人の当事者に会いに行くか。呼び鈴を押すと今も昔も変わらない電子音が響きドアの向こうから聞きなれた声が聞こえた。

「ランサー・・・。」

「ちよつと、昨日の事で聞きたい事があったさ。いやなら話さなくていいし、追いつ返してくれてもかわない。」

あれからずっと考えていた。仕事ではよく殺しているが“意図をもって人を殺す事”その気持ちはどうしても分からなかった。訓練生時代に「人を殺す事に理由を求めらるな、仕方ないから割り切れ」そう教えられたせいだろうか。

「そこでもいいですか?。」

「かまわないさ。押しかけたのはこっちだ。」

沈黙があった質問を待っているのだろう。

「その・・・、俺のオペレーターになる前に何があったんだ?。」

子供にまで親の憂鬱が移るほどの事だただ事ではないだろう。

「私が勤務していたA Fが白いネクストの襲撃を受け30秒で部隊が全滅、A Fは機能を停止した。それだけの事です。」

一瞬言葉を失った。とっつきでA Fの装甲をぶち抜くことは容易だがその位で機能を停止するほどA Fは脆くない。熱核兵器を使うとか、大出力の電磁パルス（EMP）で電子系統を破壊するとか、非常識な手段を使えば一発で破壊する手段はないわけではないが普通は不可能だ。いったい何をしたのだろうか。

「そうか、無念心痛を思うと心が痛むよ。それじゃ。」

目隠しをされ、リンチにされるような恐怖を味わったのだろう。さて、ガレージへ行くか。

「こんにちは。」

「お、どうしたんだ？」

聞き覚えのある声がしたと思ったら、やっぱりニーナの子供のエヴァだった。結局オペレーターを続けることにしたニーナの話によればこの所ネクストACについて調べているらしい。「敵を知る事も大事」その言葉を自分なりに解釈したようだ。

「悪い方向には進んでいない」そう思ったかった。

「僕も手伝ってもいいですか？」

「だめじゃ。」

ザンが即答した。当然か、大量の有機溶剤を使用している以上かなり危険な作業である事に変わりはない。その上、粉末状に飛散した塗料を吸えば塵肺になる。

「そういえば、どうして水色なんですか？」

「一様、迷彩効果が目的じゃ。」

「でも、滞空時間はそんなに長くないそうですね？本当は？」

グツ。痛い所を突く。使用している武器の射程が短いため通常の

戦闘ではどうしたって近づかなくてはならないため自然と地上戦よりになる。言い訳はできない。

「あいつの趣味じゃ。」

あたりに笑い声が響く。さて、こいつが終わったらエンブレムの貼り付けでもしてみるか。印刷した物を張り付けるだけだから割と楽だが失敗するとしわになるんだよなあ、あれ。

塗料が乾燥するまでの間の休憩時間中、エヴァはザンの下でACに関する講義を受けていた。えらい熱心さだが一時の熱でない事を祈りたい。

「つまり、ノーマルもネクストも基本的に同じ物なんですね。」

「ああ、基本的な駆動システムは全く同じ、一部の軽量機の素の装甲に至ってはノーマルの方が丈夫なくらいじゃ。」

「それは軽量化のためですか？」

「いや、PAがある分余剰な防御力を捨てたんじゃ。」

「へえ。」

こちらの方へエヴァが歩いて来る。ちょうどいい機会だ一回ぐらい聞いてみるのもいいだろう。

「なあ、子供に聞くような話ではないと思うが“殺意を持って”人を殺すのはどんな気分だ？」

大型AFをどうやって落とすか。弾道ミサイルや物量戦、経済戦争では運用される事が無い歩兵を用いた白兵戦、いくつが手段はあるが現状ネクストでしかそれを行う事はない。

まあ、一発で破壊できたらだれも苦労しないしジャイアント・キリングなんて呼ばれ方もしたりしない。そこで行われる手段が消耗戦や、物資補給路の切断である。戦闘能力を低下させ撃破しやすくしようというわけだ。

前者が先日、ホワイト・グリントが行ったような攻撃で文字通り今持っている戦力を奪う事が目的の戦闘無事生還しているらしいが

一秒間の攻撃で大型艦艇10隻を超える大火力を有したSOM対して戦闘をしかけ普通に生きて帰るだけ奇跡みたいなものだ。

後者がいま俺が行っているミッション。物資を奪い今後持ち得る戦力を奪う事が目的だ。

□ 依頼の内容をを確認します。

今回の目標はスピリット・オブ・マザーウィルに物資を搬送しているGA輸送部隊です。目標は8機の旧型の大型兵器(GAEM-QUASAR)と一機のネクストで構成されていますが、このネクスト『セレブリティ・アッシュ』はその消極的な姿勢から戦力としての危険度は低いと考えられます。

むしろ、危険なのは大型兵器の方でしょう。防御陣形をとれてはたとえネクストと言えどこれを崩すのは並大抵の事ではありません。そこで、今回の依頼では敵部隊を奇襲その後離脱するヒット&ウェイを行って貰います。

説明は以上です。オームル・サイエンス者は貴方に期待していません。

無論、ネクストを撃退すれば報酬の上乗せも約束しますがあまり無理をなさらない方が良いでしょう。

□ 彼は一様、最高兵器ネクストACを操るリンクスである。

戦場をかけ、多額の報酬を受け取りそれで生活している。だが、その立ち振る舞いはリンクスと形容するにはあまりにも弱腰で兵士としても戦士としてもあまりに不完全だった。それが自分と同じ『第3世代のリンクス』かと思うとうんざりする。

どうしてこんなやつがリンクスになる事が出来たのだろうか。

「大型ロケット2機、アルドラ製グレネード、オームルの突撃ライフル。対地爆撃をする分には十分すぎる火力じゃな。」

四角柱の張りばてを肉抜きしたような形状のロケットランチャー（BVS-50）に、歩兵が持つグレネードランチャーのようにシリンダー部分が最大の特徴のグレネード（GRA-TRAVERS）、銃身の下の刃物の様な構造物が目を引くライフル（AR-070）、普段の装備と比較すると、どう見たって重武装で動きは遅くなる。というよりもこういうアセンを試してみたくて機体のアセンを変えた様な物だったりするのだが。

本音を言ってしまうえば、対立企業の武装を乗せたかったのだがアスピナに居るとやっぱリアル陣営や技術協力を行っているインテリオル・ユニオンの物が入りやすく、元々GA陣と対立していたBFFの物が旧レイナードの縁で流れて来るが撃ち捨てる事も念頭に入れているので補給線を考えてこちらの方が安全だった。「けど、これは固定目標を想定した武装です。これであるヘタレを落とせるんですか？」

さりげなく報酬の上乗せを要求してきた。

「その為に、格納武器を積んでいるし、ブローカーはお勧めしないと云ったがその為の“あれ”だろ？それに、目的は物資の破壊ではなく部隊の制圧だ。足りるだろ。」

気がかりがあるとすれば、防御陣形を取られてしまった時の対処だ。最近では固定砲台としての意が強いが元々都市への攻撃などを目的とした兵器でその旋回性能はバカにならないしそれ相応の火力も有している。それを超える火力を今回用意したわけだがきちんと連携を取られた時の対処法が思いつかずにはいた。

まあ、最悪大量の弾薬を残したロケットランチャーをド真ん中にパージしてグレネードで起爆する手段があるがいろいろと予測できない為やりたくない。ならば、格闘戦の訓練を積んでおくべきか。

「派手な花火大会になりそうだけ。」

chapter 2-7 (後書き)

どうも、鈴木シキです。

来週はお盆ですか、よし積んでいたゲームを進行させるとしよう。まあそんなこと言っても連続3時間程度が限界でそれ以上やるとあからさまにプレイヤースキルが落ちるわけなのですが。

一日やそこらであつという間にやり込んでしまえる人間は一体どんなスタミナ持っているんだ。普通目から疲れ始めて全体を見れなくなつて技を暴発させたり下手うつたりするもんなんですけどね。

さて、おまけは先日紹介したACの僚機コブラウインド、レイブンネームスナイクチャーマーです。

皿頭が印象的な両手火炎放射機の中量4脚、背中には軽リニアに3方向ロケット、ランクはD-3、殆ど0距離で立ち回り火炎放射機で攻撃してくるが、軽リニアを優先して運用するため片手づつで運用する。そうは言った物の十分すぎる火力があるので脅威であることには変わらない。ちなみに中距離ではロケットで攻撃してくるがそれほど脅威にはならないだろう。

距離さえ取れば火炎放射機を封じる事が出来る、とにかく引いて撃て。

さて、今度の更新は……。目汚しながらお盆中には出したいかな。。。。

広大な砂漠を台形の箱に4本の足を付けたような形のクエーサーが8機歩行していた。その姿はアフリカの大地を歩いていたと言われる大型哺乳類の生き残りすら思わせるが、ここは都市間を結ぶ道路があつた場所その頃の名残は砂に埋もれその痕跡すら見つけることはできない。

かつてのそれはPAを装備していたがデメリットとして破棄されその分装甲がずいぶん厚くなっている。半端な火力では落とせない相手だ。まあ、その為にこういう物を背負ってきているのだが。

ただ、それはその重厚な見た目によらず、なかなかの旋回性能を持ち移動速度もASAMAと比較したら遅いが運用次第で十分ネクストと渡り合える火力を備えていた。訓練生時代にはシミュレーターの中でフルぼっこにされた事も今となっては懐かしい。

「敵ネクスト、光学望遠での確認に成功。間違いありません、ポーンナス対象の『セレブリティー・アッシュ』です。可能ならば撃破してください。」

お〜い。いくら動くのだからってそれはひどいぞ。軽量機であっても大した脅威になる火力を持ち合わせていないのでとりあえず、無視して先に敵部隊を無力化するか。

「敵部隊に動き、防御陣形を取り始めました。ポーンナス対象が移動を開始しました。」

「無視だ！いくら格下でもこんな重い物ロケット背負って戦ってられるか。」
背部装甲のカバーが開き独特の起動音が響きわたる同時にOBが動作しコジマ粒子が充填されて行き急激な加速が掛かり凄まじいGがかかり防衛すべくこちらへ飛んできたセレブリティー・アッシュをセンターに入れながらその横を通り過ぎた。

「俺の名はダン・モロ。お前を倒す・・・え、無視？」

すれ違いざまにそんな通信が聞こえた。あのバカは回線をオーブ

ンにしているらしい。接近しながら背後から先手を取るべく、背中
の大型ロケットを起動させるとHMDのロックオン対象を示すアイ
コンが消え射線を示すアイコンに切り替わる。

それはリンクスの目の動きに従って対象をロックする物ではなく、
目の動きに合わせて射線を合わせる物であるが使い方次第では通常
のロックよりも大きな効果を示し、一部の猛者に至っては空中を移
動するネクストにすら直撃させるらしいが、残念ながらこちらには
そんな実力はなく固定目標に当てていくのがせいぜいだ。

「悪いが、先にその主砲を破壊させてもらおう。」

必死に旋回する物のいまだに脇腹を見せている巨大兵器に狙いを
定めた。

ミサイルは大体かわせばどうとでもなるがそれよりもあの主砲の
方が装甲が薄い軽二脚には脅威となる。大型ロケットが発射される
推進機と爆薬だけを積んだシンプルかつ高威力なそれは被弾した巨
大兵器を隠すほどの爆発を発生させ上部装甲を焼くが、飛行する事
が出来るとネクストが登場した今そこは被弾率が高い場所の一つ分厚
い装甲はそれ以上のダメージを受けていない。

だが、これはグレネードではなくロケット容赦なく連射ができる。
次のロケットが二機同時に襲い掛かる。

それが生みだした爆発が先ほどの爆発と相殺し合い、或いは互い
に増強し合いさらに大きな爆炎を作り上げてゆく。

シミュレーターの計算では12発撃ちこめばこれを大破させら
れる。だがそれは弾の無駄、適当に打ち込んだ後次の標的に狙いを
定め打ち込んでゆく。

複数の爆炎と爆音、その中から機内に搭載されていた爆薬が誘爆
する音が聞こえる。だからそれを基準に狙いを変えて行く。

ようやく一機が射角にこちらを収めるがそれより先にロケットを
叩きこんだ。

「おい！無視すんな！！！」

セレブリティ・アッシュが左手のレーザーブレードで斬りかか

つてきた。それは同機の中で最も攻撃力が高い物、同時にEN兵器の運用を想定していない腕に乗せているため威力が殺されている物でもある。

こんな時にあの時の会話が思い起こされる「そうですね。上手く言葉にすることはできないですけどね、『怨』ですかね。」

「怨？」

「はい。理屈はありません『怨』です。純粹に憎く、純粹に恨めしく、純粹に否定したい。」

そんな記憶をもみ消すような叫び。

「うそ！？外した！？」

「オープン回線になっっているのは気付いているのか？あいつ。」

何とも間抜けな声に毒牙を抜かれそうになるが、射線に入らないように見下げるようにな位置からトップアタックを続ける。

「ボーナス対象、ミサイル起動。」

セレブリティー・アッシュのミサイルは4発に分裂する分裂ミサイル、全部当てれば船も沈められない事もないが、威力があるとは言い難い。それでも、ほうっておく割にいかなかった。

「できるか！。」

右背のロケットを停止させ、オームルのライフルに切り替える。

特殊な砲弾を使用しているため通常の弾より威力が高くリロード時間も短い、弾数は少なく軽い。全ての意味で軽量機向きのライフルである。

黒煙を上げ、装甲はめくり上がり、内部の構造物が見え隠れした状態になった輸送部隊から離れそちらに機体を向ける。

HMDから2本射線を示すアイコンの右側のアイコンが消えロツクを示すアイコンに切り替わり、セレブリティー・アッシュに赤いアイコンが重なった。狙うはミサイルランチャーのハッチその中のミサイル、上手く発射の瞬間を狙えば中のミサイルも誘爆させられる。

「この野郎、これでも食らえー！！。」

通常のミサイルより一回り大きいミサイルが滑りだすように発射され、砲弾のごとき猛烈な加速でこちらへとその丸まった頭を向け突撃してくる。だがむざむざ当たる気はない、当たっても大した損害にはならないが、遠慮なく発射前にライフルで迎撃にかかり、AMSに発射したのちにすぐ止まるイメージを読み取らせ適当に指切りをして発射する数に制限をする。

他と比較するとかかなり早いサイクルでライフルから打ち出された5発の砲弾の幾つかがそれると、うち一発がミサイルに食い込み、風防を突き破り内部の小型ミサイルに着弾しその際に発生した熱が爆薬を爆発させセレブリー・アッシュのPA内で小爆発を発生させる。

その爆発は物理攻撃に強いBFF製のコアを焦がし塗装を焼き剥がして無地の下地を露出させるが予想よりも小さい、爆炎の中を潜った位では誘爆は発生しないらしい。

「!!!!」

「ヒヤギャー。」だろうか、「えー」だろうか。なんと morphology が我慢がたい悲鳴がこっちの無線に飛び込んできた。なんか知らないが我慢ならない、これの根源は俺の傭兵リンクスとしての享受だろうかささと黙らしてボーナスをいただく。

「ニーナ、あいつに無線繋げ。正しいオープン回線の使い方を教えてやる。」

「しかし、ランサー。」

意味が無いのではと言いたいのだろう。ならば何故、大昔の軍隊は雄叫びを上げながら突撃などしたのだろうか。理由はいくつか考えられるが一つではないだろう。

「気にするな。あんな奴に気迫で負けたりはしない!」

「分かりました繋ぎます。」

「あ、そっちのポリウムは下げておいた方がいいぞ。向こうには大きめだな。」

軽く深呼吸した後、抵抗を試みる巨大兵器の砲の上に二機のロケ

どうも、『どんなシリアスでもギャグに変える男』としてダン・モロを登場させようとした物の結局失敗した鈴木シキです。

「駄目だこいつ・・・。」程度に思ってくれたら予想外の喜びです。ACERにニンボール・セラフが出ていた件について・・・。
結構高いし4つほどやり込み途中で放ってあるゲームもあるんで、中古で買おうかなんてこと考えながら、動画をチェックしていたら発見しました。多分使えないでしょうけど、フロム側の機体が出るとは驚きです。

ついでに、近くの中古ゲームショップに行ったらACEシリーズのコーナーが設けられ見事に完売していました。

2週間ぐらいしたら5000円ぐらいで並ぶかな・・・。

さて、おまけはSLで登場し味方だったり、選定試験のライバルだったりと忙しく立ち回るレイブネームカロンブライブ、ACネームファイアーバードの紹介です。

ENEOの中量二脚機で武装は赤ライフルにダガー、機雷ミサに軽量3ウェイロケ、EN盾と堅実なアセン。

その見た目通り相手との距離に合わせて立ち回り、近づけばダガーで離れると機雷ミサで攻撃してくる。ある程度の距離を保ちながら引き撃てばパターンにはめる事も難しくくない。

ここまで来た人なら苦戦する要素はないだろう。

追記

なんか、読者を置いていきばりにしている気がしてならない今日の頃。

あああ！！こんなことなら完全1人称になんかするんじゃないかった！！。その為に外伝編のプロットがあるんだが、何時あげられる事になるか。いつもいつも成長しない作者で申し訳ありません。

追記2

セラフをEXステージなる物で動かせるらしい。一か月後ぐらいに何か報告するかも・・・？

砲身が落下物でひしゃげた巨大兵器をしり目に、雄叫びをあげながらセレブリティィアッシュに突撃をかける。

「ギャー！！耳が、耳が！！」

ニーナのやつは思いつきりポリウムを上げたのだから。そんな悲鳴が聞こえた。それと同時に同機は後方方向のQBを吹かせ逃げにかかるが、所詮は大質量の物を動かすことを想定したGA製のブースター瞬発力に優れたこちらと速さ比べをしたらこちらに軍配が上がる。そして何より軽い。

と思つたらQBと同時に「グエ・・・」と小動物を引きつづいたような悲鳴が聞こえた。

「もしかして・・・、驚きのあまりQBを暴発させたのか」

続けて無茶無茶な方向にQBを吹かせるセレブリティィアッシュ、一樣距離を取ろうとする動きは見てとれるが折角、左に動いたのに今度は右に吹かせて元の位置に戻ったりとどうやら突然発動したQBに驚きパニックを起こし、それを読み取ったAMSが誤作動今のような動きを起こしているようだ。

軽い威嚇のつもりだったが、思いのほか効果があつたようだ。事故とはいえ中身を潰してしまうのは気持ちがいい物ではないだろう今度から自重するか。唐突にセレブリティィアッシュが落下を始めた。どうやらEN切れを起こし飛行を続けられなくなったようだ。

そんな事を考えながら、容赦なく突撃をかける。QBのないネクストに弾を当てるのは非常に容易い元々厚いとは言えないPAはライフルの中では1,2を争う瞬間火力を持つライフルだけでコジマ粒子の対流が乱されあっさりと減衰すると、それを形成していたコジマ粒子を整波装置だけでは支えきれなくなりパサと崩れ落ち周囲にごく薄い緑色の粉塵となって漂う。

PAはその機能を失いそこに問答無用でグレネードが突き刺さる。

ライフルよりひと回り大きい砲弾は黄色い装甲に激突すると同時に先端がつぶれ、密着状態になると爆薬が爆発しペイントを焼き、装甲を歪ませて黒煙を残して粉々に砕け散る。なおも容赦しないライフルの砲弾は次々と装甲に食い込みグレネードは装甲を歪ませペイントを焼き下地を露出させてゆく。

「うそ？」

何かが起きたらしい。

「リンクス厄介な状況になりました。クライアントからの情報でこちらへ向けて対ネクスト、低高度短距離弾道ミサイルが接近中2分後にここに到達、さらに残存敵部隊逃走を開始。」

まあ、今の弾道ミサイルはその気になれば地球の反対までが射程範囲だ。どこかのミサイル基地の射程には何処に居ても入っている。HMDの一角にミサイル着弾までの予測時間が表示され見る間に数字が減ってゆく。

「了解。すぐに片づける。」

面白いように当たってゆくがその姿は手先が不器用なに釘を打ちつけられた人形の様で痛々しく、いつその事哀れでもある。

「くっそー！」

ダン・モロが泣きながらブレードを振りかざし切り返しに掛った。人間で言う所の腰を捻り腕を引き寄せる動作が確認できる横薙ぎの準備動作だ。撃ち合いでは敵わないのだから初めからこうすればよい物を、そんな事を思いながらギリギリまで引き付け後進方向のQBを吹かせブレードを空振りさせる。

スピリット・ムーンとの交戦の後『月光』使いとして知られていた旧レイレナードの？3オルレアの戦闘データにシミュレーターの中で200回以上切り捨てられた経験が役に立った。おかげでブレードの対処法と回避した後の反撃の方法は体に染みついている。勿論その後の切り返しの方法も……。

「えー！？」

向こうからは突然空間が発生したかのように見えたのだろうかそ

んなどぼけた声が聞こえた。こちらは右腕を引かせ突きの動作準備に入る。それと同時に後ろ方向への運動が止まらない中、前方のQBを吹かせ僅かだった一瞬で埋めながらライフルを突き出した。まだ、とっつき（射突ブレード）の扱いは完全ではないし、そもそもこれはとっつきではないがこの距離ならば外しようがない。ガジャンー！とい激突音と共に衝撃がこっちのコックピットにまで伝わってくる。

左肩のジョイント部分に刃物の様な形状をしたライフルの先端を押し込み、ベキベキという音を立てながら複合系アクチューターにライフルが突き刺さった。

「思いのほか、上手くいった！。」

「腕が、腕が！！」

やかましい。もうこいつには、ご退場願おう。機体同士が激突する寸前で一瞬だけ後方向にQBを吹かせるとその場で停止し左腕のグレネードをパージするとコア部分のハンガーから格納ブレード（EB-0600）を取り出した。

「これでも食らえ。」

セレブリティィ・アッシュのコアを穿つ様にブレードを突き放つ。格納とはいえブレード、大出力のレーザーはコアとレッグの接合部に触れると火花を散らし装甲を真っ赤に焼き風穴をあける。

「冗談じゃねえ。俺は逃げるぞ。」

セレブリティィアッシュは攻撃をもらった後から後方向のQBで距離をあげ、一呼吸あつた後、言葉は続いた。

「そんなこと知らねえ。無理な物は無理なんだよ！！」

半泣き状態になりながらの声、左肩を脱落させながら旋回し巡航OBで飛び去ってしまった。

「セレブリティィ・アッシュ戦線離脱。目標への攻撃を行ってください。」

「了解、いまだに乗っかているロケットをグレネードで起爆させる。」

一瞬、息をのまれた気がするが淡々と受け返してきた。

「分かりました。再購入の見積もりを打診しておきます。」

砂の大地に突き刺さっていたグレネードを引きぬくとMBを吹かせ空へと飛び上がる。ロケットによって半壊した巨大兵器の上にロケットが乗っかっている。今逃げ出しているのは半数の4機残りは動けない状況なのか降伏信号を出し乗員はいっ爆発するとも知れない巨大兵器から逃げ出し少し離れた所に日よけを立ててじっとしていた。

ここは砂漠、少しの油断が死につながる。誰も彼らを責めることはできないだろう。

反撃の垂直ミサイルをかわしながらボロボロの巨大兵器の上に乗っかっていた2機のロケットランチャーに照準を定め発射の指令をAMSに出した。

最大の口径のグレネードOIGAMI、俗称社長砲を超える大爆発は地面を抉り4機の巨大兵器をややすと呑み込み衝撃波がPAを叩きそれと同時に聞いた事が無いような爆音を辺り一帯にまき散らした。

勝った。その確信がある、ミサイルもまだ到達しないだろう後は降伏を確認するだけ。

「それでミッションは？」

「しばらくお待ちを・・・」

ほんの数秒の後通信が入ってきた。

「敵部隊が降伏を受諾、ミッション完了ミサイルにはもう間もなく自爆信号が送られるそうです。」

「了解。ところでニーナ。」

「何でしょうか？」

「派手にやっちゃたけど、収支はどうなっている。」

「ご安心をちゃんと黒字のはずです。」

「それは良かった。」

ミサイル基地、存在は知っていたが実際に撃たれたのは初めてだ。

どうやらSOMは相当追いつめられているらしい。そして、このミサイル基地を放っておくとは思えない。久しぶりに基地攻略ミッションを受注できるだろうか。

そんな事を思いながら、機体を反転させ輸送機へと進路をとって行った。

数日後、世界を震撼させるニュースが報じられることになる。

☐

スピリット・オブ・マザーウィル 旧ピースシティに沈む。

先日ランク9“ホワイト・グリント”がスピリット・オブ・マザーウィル（以降 SOM）によって撃退されたニュースが世界を騒がしたが、撃破したのはランク31“ストレイド”近頃行われていた補給線への攻撃により弱体化していた所を攻撃された模様。

同AFには進路上の障害物を撤去するミッションにあたっていたランク30“キルドーザー”が同乗していたがストレイドはこれを瞬く間に排除、SOMも決死の抵抗を試みたがミサイルポットを飛行甲板の展開前に破壊されほとんど何も出来ぬまま撃沈された。

この戦闘で当時搭乗していた人員の20%に当たる10000名近くが戦死し、BFF社が遺族に支払う保険料は100000000Cを大きく超えると予測される。

また、リンクス“チャンピオン・チャンプ”は機内での死亡を確認。戦闘を主に請け負うリンクスではないが彼の死亡は各企業にとって大きな痛手になるだろう。

なお、BFF社は以下の声明を本社にてウォルコット家当主“リウム・ウォルコット”が発表した。

「死亡した皆さんに、哀悼の意を示すと共に心からの冥福を祈ります。

また、残存するSOMには可及的速やかに改装工事を行なうことで二度とこのような事が無いように対策をとります。」

等と説明を行った。

一方で依頼を出したオーメル・サイエンス社は予想外の事態に驚きを隠せないようだ。

「我が社としても、このような戦果をあげられるとは想定しておりませんでした。

“ストレイド”には感謝してもしきれない。今後の活躍に期待する。

この成功からオーメル・サイエンス社の株価は大幅に伸びており、BFF社の株価は下がる一方である。AFによってその兵器としての価値が低下したネクストACであるが市場への影響力は不変のようだ。

chapter 2-9 (後書き)

どうも、久しぶりの暑さに打ちのめされそうな鈴木シキです。

おかげで、モニター代わりに親からもらったオンボロパソコンもファンをガーガー言わせながら必死になって冷やそうとしています。が焼け石に水、そしてこども熱いと明らかに(笑)なゲームの腕が落ちていきます。おかげで2時間程度続ければもうダウンです。クーラーがあれば楽なんだろうけど。

さて、おまけです。

今回はレイブネーム、コープスペッカー ACネーム、ヘルストーカーの紹介です。

SLに登場しランクはB-4、ミッションでは『アーカイブ強襲』に登場、ESM下でのザコのと戦闘で疲れた所にこいつが止めとばかりに襲い掛かる。

中量二脚に軽量ミラージョブにリア腕と決して装甲が厚いわけではないが、補って余りある機動力と火力を持ち合わせている。

武装はおにぎりと言う俗称が付いている分裂ミサ、に軽E砲。

かなりの至近距離からリアガンを撃ってくるのだがこれが地味に熱い。連続での被弾は命取りになるので気をつけよう。

どうにも、ミサイル避けが苦手なようでこいつと戦う時はミサイルメインで戦うのが吉だろうか。

追記

感想確認しました。僕が思うに、非戦闘要員(労働力)まで攻撃されると分かっていながら呑気に乗せているとは思えません。疎開させるのが現実的ではないかと。

それに勝つための戦争ではなく儲けるための戦争なので戦闘要員としての歩兵は不要でしょう。

衛星はアサルトセルのせいで使えないとしても、空にはクレイドルがありますし衛星でなくても観測気球があれば世界をリアルタイ

ムで監視する事は容易いはずですが。

今ですらグーグル・アースなんてものが民間向けに公開されているわけですから楽な物でしょう。

人員削減のために火器管制は一括（イージスシステムに似た物を使っているのではないかと。）しているでしょうし、艦載機の全てが有人機であるとは考えていません。

それに、ゲーム中でやたらと配備されているノーマルの数が少ないのはOPムービーの中でホワイト・グリントが艦載機の大半を撃墜しているというのが僕の解釈で、殆どのミサイルポットが閉じた状態なのは『大人の事情』ではなくオリ主や通常軍が人員を含む補給線を断っているためという設定です。

貴重な感想ありがとうございます。

今後の参考にすると共に、より一層の精進を努めます。

wikiにて確認した所、2009年に就役しているジョージ・H・W・ブッシュ乗員は3200人とのことでした。やはり、以上の事を踏まえても少なすぎたでしょうか。

誠に厚かましい限りですが情報元に関する情報を頂けないでしょうか。

追記2

ご意見に従い死者の数を2倍（九月八日に乗員数を5000人に）に変更させていただきました。4倍以上に増やすべきかとも考えましたが、企業が労働力をむざむざ失う様な人事をするとは考えられなかったのでこの数字になった次第です。

SOM撃沈のニュースが流れてしばらくしたある日、食堂で朝食をとりながら携帯端末でニュースを眺めているとまたしても愕然とするようなニュースが入って来ていた。

『カブラカン、新人リンクスによって撃破される。』

カブラカンは相手の陣地に突撃、追って空を覆いつくつほどのMT部隊を展開する事で同陣地の制圧を目的としたAFだ。それをかなえるにあたりどのAFよりも厚い装甲を持ち正面に配置された巨大チェンソーのごときとつきの集まりが外見上の最大の特徴となっている。

それゆえに、今の今まで“絶対に止められないAF”として開発元であるアルゼブラ社も宣伝してきた。

『この驚くべき偉業を成し遂げたのは先日SOMを撃沈したランク30“ストレイド”である。』

本日速報に至っては、はるかに格上のネクストを複数返り討ちにしていたイレギュラーネクストを単機で排除して見せた所からその実力はランク10クラスに入るのではないかと一部世論は評価している。

この事にGA社は「経済戦争の一環でありコメントすべき事はない」と声明を出しており先日のSOM撃沈に対する報復行動という見方もある。

一方アルゼブラ社は「今回は、周到に準備された現場での特殊な戦闘行動であり“カブラカン”の製造は続行し今後の対策として地雷を起爆させるためのチェンガンを前面の側面部分に装備する。」と声明、大した問題とは認識していないようだ。

近々、当紙面において彼に関係する人物への取材の模様をお届けする予定である。

『

これは、面白そうな記事になりそうだ。ついでに、依頼の量も増えてくれるとありがたいがまあ、ストレイドが独り占めする形になるだろう。

今日は、ミッション仲介のブローカーとアスピナ機関を挟んでの商談、普段は機関の業務課が勝手にミッションを受注してするので滅多にこんな事はないのだがよほど大きなミッションなのだろう。今から腕が鳴る。

それにしても、こつも容易く主力級のAFが落とされるとはあいつは予想以上に腕が立つらしい。

ブリーフィングルームでオームルのブローカーがホワイトボードに投影されたパワーポイントの画像を指さしながら説明する。ここにいるのはオペレーターのリナに、輸送機の機長及び副機長、メカニック担当のザン今回は酒を持ってきていないようだ。

それに、実質的にこのコロニーの自治を担当しているアスピナ機関の所長とその秘書ほかにも、同ミッションに参加する予定のAFイクリプスの乗員と共に活動する通常軍の関係者が含まれている。総じて50名近くここまで人が集まるのも珍しい。

「今回のミッションは、GAの多目的軍基地を襲撃しサイロ内の弾道ミサイルの破壊及び、同施設の機密保管庫へ突入内部にある機密物資を破壊する事です。」

アルゼブラ社とオームル社のロゴが消え、基地の概略図が表示された。軍港に、ミサイルのサイロ、兵器群のガレージ、各種貯蔵施設、それに一か所基地の中心部にドーム状の構造物があった。

ただし、その周囲には櫓うすを使った対空陣地が囲うように点在しさらにはACが隠れられるサイズの遮蔽物になりそうな建築物がある。これらは盾に使えるだろう。ただし、それは両者にとって言える事だが。

「御覧の通り、この施設には複数のサイロが存在し空からの攻撃に

対してもSAM（対空ミサイル）群が存在し空から近づく方法は存在しないでしょう。しかも、地上攻撃を行おうとすれば地上の大部隊とあまり追い詰めれば周辺の基地からの増援との戦闘になるでしょう。そこで今回のミッションではVOBを用いて接近、対空兵器群を破壊し、通常軍がゲートを死守している間に可及的速やかに内部へ突入目標を破壊脱出する流れになっています。」

確かにネクストと言えど一度閉鎖されてしまった所を突破することとは難しい。ネクストに対する攻撃力がほとんど無い為、持ち込まれることはないが常音速で動きまわれるMTだって国家統治時代から存在する。ましてや大部隊との戦闘を行った後ならなおさら、逃げ切る手段など無いだろう。

「一つ質問がある。通常軍は何分ぐらいゲートを守っていられるんだ？」

「そちらの働き次第だが10分が限度だろう。」
通常軍の人間が答えを返し、ブローカーが話を続ける。その為のイクリプスだろう、あれの飛行速度はネクストより早いし対地攻撃力も余りある。それ以外にも、通常軍を乗せて輸送する役目も負えるだろう。

「古い資料ですので確証はありませんが、このゲートは核攻撃にも耐える構造になっておりネクストの火力では突破は不可能です。たとえば、ソルディオス砲を持ち込んでも意味をなしません。閉じ込められれば一巻の終わり、そこで通常軍の皆さんとの連携が必要になります。」

映像が地下施設の概略図に変わる。地下50m付近から10階に分かれた部屋があり最下層はやたらと大きくなっている。まるで核弾頭の保管施設だ。

もしかしたら国家統治時代の物を流用しているのかもしれない。いや、この基地そのものがそういった戦争を想定して二つの大国が無駄だらけの軍事拡張競争をしていた大昔に作られた場所かもしれない。

「この施設の最下層部には機密物資保管施設があり、ここへの侵入はエレベーターを使用するか自分で降下する形になるはずでしょう」
エレベーターぐらいならブレードを持っていけばなんとかなるだろう。閉じ込められないように開けたゲートのレールないし開閉機構をブレードの熱で溶かして地面に溶接してしまうのも手か。となると、壊して逃げることしか考えずに組んだ強襲仕様で挑むのが正解だろうか。

映像の最下層にバツマークが追加されていく。

「破壊成功後は、通常軍と合流してください。その後、リクリプスが全領域にチャフと共にスモークを展開しレーダーと視界を封じます。その隙に脱出してください。追撃部隊が現れる可能性もありますが、彼らは協定により戦闘エリアの外に出る事はできません。通常軍の損傷が少なければボーナスも検討するとのことです説明は以上です。アルゼブラ社はこのミッションに期待しています。全員の生還ミッションの成功祈りますがあまり無理をなさらない方が良いでしょう。」

続いて、通常軍の部隊長が説明を始めた。

「ゲートを開放する際の行動についてに説明する。ここのセキルティーは国家統治時代の物が若干の改修を経て今に至るようだ。これを開放するためには特定の2名が同時にキーを差し込み同時に回す事で開く仕組みのようだ。特定の2名については有事ならいざ知らず今は不可能とっておく。そこで、我々は電子回路を凍結させ機能を一時停止させたうえで直接回路をダミーに接続しハッキングする事で開放させる。」

この時には作業用MTと技師が参加するためリンクスにはその間、ゲート付近に接近しないでいただきたい。」

腕を上げ了解の意思を示す。こっちも味方をPAで焼き殺したくない。

「ダミーで開放できなかった場合、回路を分解、直接回路同士を接続し開放させる。この場合、時間はさらに掛かると考えられるから

実際にゲートを死守していられる時間はさらに短くなるだろう。その点は留意しておいてくれ。」

「一様確認だ。攻撃してくる部隊は殲滅しても問題ないんだな。」

「構わん。」

「パワードスーツも？」

あれには人が入っている。そしてネクストの火器では掠っただけで腕ぐらいけし飛ぶ、それゆえに運用が有事の時以外では禁止されたのだ。国家統治時代なら逆だが、経済戦争は歩兵を必ずとも必要としないある意味企業らしい結論と言えた。

「例外はない。」

「了解した。」

思いのほか、弾を使う事になりそうだ。

chapter 2 - 10 (後書き)

どうも、3時間残業が二日続けであった後休日出勤してきた鈴木シキです。

まあ、せつかくの休みなのでゆっくりさせて貰っています。

だめだ、書く事が無い。

さて、おまけはACSLに登場したレイブンネーム、ロデオアデイクション ACネーム アンルリーアの紹介です。

ランクはD-4、特殊輸送車両追撃では僚機として登場しAC以上の機動力を誇る輸送車両に食いついていく。

機体構成は最速フロに何故か最長レーザー二基、700発マシンガンと左腕ライフルと至ってシンプル。また熱効率やEN関連にも余裕があり、やたらと動き回るが装甲は聞かないでやってください。さすがに700マシだけあって連続での被弾は熱暴走の危険がある離れて戦うのか吉か。こっちが捉えると上に逃げようとするので狙い方次第ではここが一番の間、ミサイルを叩きこんでやれ。

あ、元核施設じゃないかとランサーが想像を膨らませています。彼らが所有している銃の解説と一緒に一両日中には活動報告の方で解説させて貰いたいと思います。

追記

感想を書いてくださった『しんかー』様。貴方のおかげで自分では気付かなかった部分を訂正する事が出来ました。この場をお借りしてお礼をお申し上げます。

「VOBの装着急げ、通常軍の連中が首を長くして待つておるぞ
! !」

コックピットの中で機体の最終チェックをしながら細部の動作テストを行わせているさなか、ピラムを借り受けた軍事基地のVan Guard Overd Boost発進施設でVOBの装着作業が俄かに行われていた。

ピラムの右腕にはアイスの棒の様な形をしたディアルレーザー（HLR09 - BECRUX）、左腕には正三角形の本体が印象的なインテリオル製のレーザーブレード（LB - ELTANIN）、右背に手持ちのマシンガンを4つつ並べてくつつけたようなアスピナのチェーリングン（XCG - B050）、左背に平たく潰した双眼鏡の様な外見の強化モデルの散布ミサ（MP - O200I）と持続性を全く考えていないアセンだが、単位時間当たりの攻撃力はマシンガンより上でただ壊すだけならこつちの方が何かと便利だ。

何よりたいがい物なら一発でぶっ壊せるのは大きい。

「リンクス、どうやら先日のSOMの一件が原因でVOB対策が急速にすすめられ、最新の情報では目標の基地には最新鋭の地对空ミサイルが配備されている様です。このミサイルですが、無数の金属球が装填されておりショットガンのような役割をするようでは何発も攻撃を受ければPAが減衰しVOBを放棄せざる得ない状況に追い込むことが目的の様です。」

「了解した。迎撃の必要は？」

「残念ながら広範囲に散布する事が目的の物の様で離れた場所で爆発するようでは回避した方が正解ではないかと考えます。」

ならば、避けるしかないかどの道そんなに射程が長い武装は積んでいるが弾はそんなに多くない。それならミッションを考えると弾の温存もして置いた方が無難か。

V O B は燃料タンクの集合体のような構造で見た目通り頑丈にはできていない。core に接続するための接続部と推進剤タンク群一番太いメインの推進装置にその左右にサブの推進装置が並ぶ様は白い錆止めと相まってマストライバーが実用化される以前の大昔の宇宙ロケットの様だ。

そのマストライバーも今は放棄され砂と錆に埋もれているのだから。

「V O B を接続するぞ。O B の保護カバーを開放してくれ。」
「はいよ。」

橋型の移動式クレーンでV O B がトレーラーから持ちあげられ1センチの誤差もなく、持ち上げられるとゆっくりとcore に接続部を近づけ先んじてピラムのO B に制御用のコネクタが接続されたcore を挟み込むように接続機が固定され、V O B を吊るしていた電磁石が外れクレーンが退避してゆくそれと同時にV O B の超重量で機体が転びそうになるが機体を前かがみにする事でなんとかそれを回避した。しかし、ピラムの足はアルゼブラの軽二脚、複合系アクチュエーターがギシギシと悲鳴を上げる。

「よし、作業員退避ー！」

噴射炎から後方の構造物を守るための防壁が持ち上がり、カタパルトがスライドし脚部を固定した。同時にコックピットの対Gジェルが拘束具のバルーンに充填されシートベルトの役割を果たす。

「発進準備完了しました。そちらにタイミングを譲渡します。」

「了解、発進する。」

V O B のブースターから小さな青い炎が噴射され、一呼吸置くと一気に大きな炎となりそれが合図となってカタパルトが機体を押し出し始める。

「テイクオフ。」

そして、姿勢が自動的に制御されV O B がほんの少し斜め上に向くように調整するとそのまま弾道軌道に入る。

軌道が安定すると本格的にブースターが燃料の噴射を開始し一気

に加速がかかり速度はあっという間に1500kmを超える。PAは大気の圧力により水玉状に変形し一番圧力がかかる部分はコジマ粒子が圧縮され緑色の光輪を作った。

中ではランサーが凄まじいGに耐えながらまっすぐと前を見ていた。いつ敵の迎撃が来るかわからない、注意しすぎるぐらいがちょうどいいだろう。

「ミサイル来ます。数5回避を！」

遙か遠方に5つの点が見える。あれがネクストを叩き落とすための分裂ミサイルだったら脅威だがミサイルの中にミサイルを入れるという構造上どうしても大型化し格納するサイロが埋まってしまつたため連続して発射を行う事が出来ないという欠点がある。だったら、一回り小さいこちらの方が連続した迎撃行動に向いていると言えた。ミサイルで迎撃、無理だ。ギリギリまで引き付け左方向に連続でQBを行い回避、その直後ミサイルの弾頭付近が起爆し無数の金属球が飛び散り、機体のすぐ傍を無数の鉄球が通過する。

こめかみに冷たい汗が流れる。背中に搭載するスラッグガンの5発分はあつただろうか、あんな物に正面衝突したら相対速度も相まつて半端じゃない速度でぶつかる事になる。確実にVOBをパージしなければならぬ状況に追い込まれるだろう。

「次来ます。」

「何機あるんだよ！」

「不明です。」

兎に角避けなければ。ライールのSBに助けられている気がしてしょうがないがそんな事も言つてられない。

次は4機、横に広がって展開している横に動けば確実にどれかに当てられる。

「チ！」

舌打ちしながらできる限り右によって行くとディアルハイレーザを構えた。ハイレーザを作り出すネクストの足ほどの長さがある巨大な発振機群が内蔵された上下の構造物が展開し銃口が開放さ

れる。

「あと、31発。」

一瞬のうちに作り上げられたハイレーザーは束となって一番そばにあったミサイルに着弾し、瞬く間に鋼を溶かしその熱で内部の爆薬が爆発しそこに道が出来た。そこに飛び込みその左右に散弾が通過していった。

「まだ来きます。数10」

地表ぎりぎりまで降下していくとミサイルもそれを感知し降下する。結果としてミサイルは上から襲い掛かるような位置にくるがこれが狙いだ。下がってきたミサイルをギリギリまで引き付けると正面方向にQBを行い、ミサイルはそれを感知し旋回しようとするが落下によって加速した今の状況をどうにもできるはずもなく、そのまま地面に激突した。

「もう、いい加減にしてくれ！」

遠方に10機のミサイルの影、一体どれだけのミサイルが配備されているのだろうか。ミサイルだけでこれなのだから通常軍とイクリプスが持ち出される理由が分かる。イクリプスが攻めにかかるのと対空ミサイルに襲われあつという間にスクラップになり果てる様が容易に想像できた。

今度は、円形に配置され真ん中に3機のミサイルが配置されていた。敵はVOBを効果的に叩き落とす手段を実験しているのかもしれない。ならば、上に避けてやるまでだ。

思いつきり念じる。思いつきり思い描く。思いつきり上空へ飛び上がるイメージを送る。これも何度も練習してきた、AMS適性が低く送受信できる情報が少ないのならより明確なより強固なイメージを送ってやればよい。

「跳べ！」

MBが下方向に向きその状態からQBが発動する。元々、こういう用途に使う事は考慮に入られていないが垂直の推進力が発生し機体をいつきに持ち上げるが重力の影響で通常のY軸移動と比べ

幾分か短いがその余りある推進力はZ軸方向の回避行動を実現させた。

さらに、右方向のQBそれが終了するとすぐに上方方向のQBを行いなんとかミサイルを回避するが、VOBに何発か掠った。食い込んでいるかもしれない。

雲ひとつない砂漠の向こう層気楼の様な影が地面に見えてきた。あれが目的地だが、ここまで近付いたという事は短距離迎撃ミサイルに攻撃方法が変更されるだろう。

chapter 2 - 11 (後書き)

どうも、鈴木シキです。

稲刈りの時期が終了し、所々の田んぼで藁が干されている今日この頃。

涼しくなって衣替えの時期も過ぎてしまいました。これから寒くなるので気を付けないと。

うん。また長くなってしまった、思うようにいかない物です。なんとかして11月までにはchapter 2を終了させてchapter 4に向けて話を進行させたいものです。ついでにストレイドに『ラスター18』を落とさせるんじゃないかなと今更ながらに後悔しています。

さて、おまけはレイブネーム・カラミティメイカー ACネーム・ダイナミックトラップの紹介です。

SLに登場し、じつはカラサワ一本でどうにかなくなってしまっ『最終防衛ライン侵攻阻止』にて僚機として雇う事ができるほか『旧基幹要塞制圧』には声のみ登場チャージングで撤退という面白い逃げたかをする。

重EOのタンクACであり、左背中のレーダーを除き一通りの投擲銃で固め、エクステンションには迎撃レーザー、インサイドに地雷と自分で使う分には楽しめる機体構成で元々の機動性が低い事とロックができないため足の速い機体で旋回戦を行うと完封できる。

ただし、どれも当たれば痛い武器なのであえて不利なタンクで挑むのも一興かもしれない。

SAMが起動し、此方に旋回するとハッチが開かれ対空陣地から呆れんばかりのミサイルが発射される。その次の瞬間には発射装置は上を向き下から次のミサイルが装填され照準を合わせ直すと再度発射された。

BFF艦隊も行ってきた圧倒的物量を生かした飽和攻撃、通常兵器がネクストに立ち向かう時の最も基本的な戦術にして最も安定した効果を上げられる採算度外視の攻撃だ。

「いい加減に弾切れしろ！」

右へ左へ上へ下へ、QBに連続QBを重ねさらにQBを重ねる。

そのたびにGがあらゆる方向からかかり固定された体の中身が振り回され吐き気すら感じる。VOBを対空陣地へ近づける。それだけで、ニーナはやるうとしていた事を理解してくれただろうか。

その傍ら、正確な基地の建造物の配置を確認してゆく。おおよそ、ブリーフィング通り小さなガレージがあったり機密物資保管庫の周囲に対物機銃が配置されている以外は問題ない。

「やっつけてくれ！」

「VOBパージします。」

爆砕ボルトがブースターの方から起動しVOBをバラバラに分解していく。その破片はクラスター爆弾の様に基地へ降り注ぎその余りあるスピードによって建築物のコンクリートを砕きガラスを割り、兵器に食い込み、対空陣地のミサイル格納庫にすらい食い込み、残されていた推進剤に混入されていたコジマ粒子は周囲に飛散し短い間だけ黄緑色のスモッグを作ると煙の中に消えた。

「攻撃を開始する。」

着地する前にUターンを行いすぐにOBを吹かせて急接近すると基地の敷地内へ突入した。SAMをかわしながら対空陣地のすぐそばの格納庫エリアに着地する。倉庫は大きく10機はACを立たせ

て保管できるサイズはある。それが6つ存在する。通常兵器同士の戦闘では十分すぎる戦力だ。

その格納庫内では、防塵スーツを着込んだ作業員が無人機を起動させるための準備を急いでいた。あれは撃つてはだめだ、あれを撃つと傭兵としての評価が下がる。一機のノーマルが起動しこちらへ向けて歩き始めた。あの位置にいる限りあいつは攻撃できない。こちらの背後には味方の格納庫避けられれば味方に弾が飛んでいく事になる。

まず向かうべきは対空陣地、敵が居るのに味方の基地を撃たないと思うが放っておけばミサイルが降ってくる。その脅威は体感済みだ。

櫓いへは4本の足がありその中央に格納庫とおもしき四角い倉庫のような物がある。周囲より頭一つ高い位置からSAM群が並び、そんなような物が3階層に分かれ屋上に当たる位置には先ほど発射した物なのか移動式の中型ミサイルの発射装置が置かれていた。確信はないがあれでは上部の超重量を支えきれまい。

これらさえ破壊すればイクリプスと通常軍を呼び込める。急いで破壊せねばこっちがじり貧になってしまうだろう。

G A製のごつつく装甲の塊の様なノーマルが正面に躍り出てきた。右腕に持ったバズーカを構え発射の体勢に入ろうとするがこっちはネクストその差は歴然だった。

すべる様に接近し、腰を捻るように左腕を引かせるとブレードを発動させる。三角形のレーザーブレードから発射された青白いレーザーは一瞬で剣となりMBが一層の加速をかける。

「邪魔！」

ブレードを振り払う、レーザーの刃はノーマルの腰に触れた瞬間鉄を一瞬で溶かし深々と刀傷を残すが両断するには照射時間が足りず、3分の2ほどを斬り裂いたところで振りきりレーザーはレザーストリード内に用意されていたレーザー光を使い果たし消滅する。

すぐさま、左側にSBのQBを使い切り抜けると前進しながら集

まってきた4機のMTとノーマルを確認した。思ったより展開が早い、それ相応の訓練を積んできているようだ。

レーザー光が次の発動に必要な分だけ発生されるのにしばらく時間があるすぐに振れない事もないがその出力は雀の涙、ならば。

右肩のチェインガンを起動させる。こういう時のために持ち込んだ物だ今使わずしていつ使う。下手に飛び上がればSAMに狙われる地上をすべるように移動しながら近場のMTに発砲する。4つの砲門から発射された砲弾の雨はMTの装甲に食い込み装甲を破壊しあつという間にスクラップへと変えた。もう再発動に必要な時間はたったすぐさま、ノーマルにレーザーブレードで突きにかかる。ノーマルの胸部にブレードが触れた瞬間、装甲が焼け気化し膨張した鉄が溶けた鉄を吹き飛ばし火花が飛び散る。

ブレードに手ごたえはなく豆腐を切っているかのような感覚でブレードはノーマルの背中にまで突き抜けノーマルは崩れ落ちるように倒れ込んだ。

そのまま、チェインガンを浴びせながら左肩の散布ミサイルを起動させる。ハッチが開きミサイルが起動する。もともと、数を撃つて何発か当てる武器、さすがに一発で破壊するほどの破壊力はないがMTぐらいなら掃除できる。

チェインガンで近場のノーマルとMTを蹴散らしながらAMSとFCSが連動して次から次に現れ気がつけば20機ほどに増えていたMT部隊のうち5機にロックさせるとHMDに連続して『LOOK ON』という文字が表示されたタグの様なアイコンが表示される。

「消える！」

32発の小型ミサイルが一齐に発射された。それらは鳥の群れのように統一された動きで指定された目標へと突き進み、蛇のように煙を通過していった場所に残していく避ける術もごまかす術も持たないMTに容赦なく襲い掛かり装甲をはがし、複合系アクチュエーターを叩き割り機体は横倒しになって動かなくなる。

チエーンガンを浴びせられた複数のノーマルが文字通り穴だらけになりながら立ちあがるうとするがそこにダメ押しの散布ミサイルを浴びせると動かなくなる。しかしここは格納庫付近、ようやく起動した無人機が次から次に起動し時間をかければ援軍も飛んでくる。「切りが無いか・・・」

チエーンガンからディアルレーザーに使用する武器を変更する。確信はないがこいつの威力なら櫓の足の一本ぐらい持って行つてくれるはず。

「後、30発。」

散布ミサイルからブレードに切り替えディアルレーザーを櫓の足に向けて発砲する。二条の青白い閃光は金属の骨組みを溶かしそこに大穴をあけた、足を失った事で倒れるかとも考えたがそれほど脆くはなく何事もなかったかのように自立していた。しかし、見た目だけのはず中央の格納庫らしき構造物には超重量がかかっているだろう。ならば。

そのままの勢いで対空陣地の足にブレードを突き立てそのまま振り払った。格納庫からキー！と金属が軋む音が響き対空陣地がベキベキと言う音を立てながらゆっくり倒壊してゆく。

その先にあるのは先ほどの格納庫群、そこにいたノーマルとMTはその超重量に押しつぶされその場には破損したミサイルから漏れた推進剤が広がってゆく。

その場から素早く離れると次の対空陣地に向けて高度をとりOBをかけるが待つてましたと他の対空陣地がミサイル攻撃を開始した。「機体を下げてください。ギリギリまで接近すればミサイルの安全装置が作動するはずです。」

建造物の窓をソニックブームで割るほどまでに一気に高度を落とし、対空陣地へ接近するとそのその寸前でミサイルが自爆した。

やはり、味方の基地を破壊しないように対策が取られている。これをうまく使えば最低限のダメージでやり過ごせるかもしれない。

対空陣地に取り付けられていた対物機銃ガトリングガンが起動する。ミサイルを

使えないなら機銃を使うつもりらしい。その数は一辺に9機、先ほどの物には配備が遅れていただけの様だ。

「ネクストにそんなもの効くか!!!」

無視して足に向けて切りかかる。機銃の砲弾はPAに振れたとたんその表層だけが蒸発し肝心の本体は殆どスピードを落とさず装甲に食い込んでいく。HMDに損傷個所の表示されその異常さに驚いた。

「新型の砲弾、量を受けると危険か。」

ブレードを振りまた一つ対空陣地を倒壊に追い込んだ。

chapter 2 - 12 (後書き)

どうも、鈴木シキです。

ACWIKIあらためRAVENWOODが移転作業によりしばらくつなかりにくくなって今日復旧したこの頃。

まさかのこの短期間にACEP発売だったよ。ACERは・・・、すまないニンボールと戦えるようにやり込むまでモチベーションが続かなかった。

つづかAC5は？早くて1月なんて考えていたのだがこれじゃあ4月ごろにめり込みそうだ。それ以前に某有名FPSと某ハンティングアクションが発売されるので懐と時間に余裕が無いのですが。

仕事も今週からしばらく修羅場に突入、上手くやっけていけるだろうか。

えー。LRとNXのランカーを踏まえても紹介しきってしまう可能性が出てきてしまったので今回に限り主人公機ピラム強襲仕様及び爆撃仕様がなんでこんな事になっているか話そうと思います。

クエーサーをボコボコにしていた爆撃仕様ですが12発云々は実測値です。はい、『レッドバレー突破支援』で計ってみました。ダン・モロが面白いように食らっているのも実際にやってみた結果、ホントにこうなったのでギャク要員としてネタにさせていただきますました。

もともと、背中にアルドラグレ（GRB - TRAVERS）2機に、レイレナードの強化マシ（03 - MOTORCOBRA）2機という事を考えていたら。

「地表の敵を爆撃するならロケでよくないか」

なんて考えに達し見た目も兼ねて大型ロケ（BVS - 50）2機を積む事にし、一体一体片づけるためにアルドラグレ（GRA - TRAVERS）に強化マシにしようと思ったのですが。

この心もとなさを考えると格納兵装を持たせた方がいいかと思

いたったは良い物の重量に余裕が無く思い切つて「とっつけ」と言わんばかりの形状のオーメルライ（AR-0700）を見た瞬間「二刀流にすれば原作者がやってみたかつた事をできるかもしれない」なんて思い格納ブレ（EB-0600）を左の格納に入れたらこうなった。

次は強襲仕様ですが、もともとカノサワ（HLR01-CANO PUS）とブレードメインのアセンを考えている内にX鳥専用グレネードと散布ミサがつかえました。それで、ローディー先生に実用性テストをお願いした所、はい、僕が粗製すぎ惨敗しました。少佐には殆ど歯が立ちませんでした。

そこで、当初のコンセプト無視してあくまで強襲用として組み立て直しトールスのコジマライフル（ARSINE）なんて考えもありましたが入手できるのか？という結論に足し同じくインテリオルでさらに威力があるディアルレーザー（HLR09-BECRUX）を積むことにした。見栄えがしますし。

そこで、ザコの掃討用にアスピナチェーン（XCG-B050）がつき現在に至る。

こんなところでしょうか。その内に、オリジナル設定をまとめた物を上げようと思っっているのですがこれはダメだろという部分がございましたらそこで存分に叩いてください。

新型の砲弾だろうか。一瞬そう思ったが違くと結論する。ネクストが開発されて20年近くたっている。コジマ技術に至ってはそれより前だ。たしか、PAに有効な砲弾がリンクス戦争以降に開発されていたはず。しかし、あれは市場の崩壊を招くとして禁止兵器に加えられたはず。機銃掃射でこれだ、ネクストのマシガンに採用されたらと思うとゾツとする。

「これがあるっていう事はもしかして、ここにある機密物資は・・・」

ククク、と微笑をこぼす。なんとも企業らしい判断だ。企業が最も恐れているのは自社の倒産でも、労働者のストライキでもない。

『市場の崩壊』それは、今の社会の崩壊を意味し同時に統治者自身も含め不特定多数の人間が飢えることを意味している。

同時に、今の社会を守るために助力しなければと思う。ネクストは戦略兵器、後ろ盾があれば核兵器に匹敵する大量破壊活動を行える。

「リンクス、食らい過ぎです。」

「チー！」

この機銃、想像以上に威力がある。PAが無いランスタンLINKSTANTでもないのに装甲に次々と砲弾が食い込み穴を開け始め、ガンガンとコックピット内にも装甲と砲弾が衝突する音が響く。

櫓の足を切り落とし倒壊に追い込むと、損傷具合をチェックする。装甲には複数の弾が食い込んでおりその部分の耐久性は著しく低下している。非常に危険な状況だ。PAが減衰すればノーマルのバズで穴が空く。

「こちら、AF部隊。3機目の対空陣地の破壊を確認、戦闘エリアへの侵入を開始する。残り一機の対空陣地の破壊を急がれたし。」

「了解。とりあえず、SAMには注意しろよ。」

ここから次の対空陣地への距離はそれほどない。ディアルレーザーならいけるか。散布ミサイルと、ディアルレーザーを立ちあげる。狙うのは櫓の足、先ほどまでと同じように倒壊させればいい。

「食らえ！」

2本のハイレーザーと32機もの小型ミサイル群が足へと襲い掛かる。ハイレーザーは鋼鉄の骨組みを溶かし小型ミサイル群は骨組みをグシャグシャに捻じ曲げた。

ゆっくりと櫓が倒壊を開始し、最後の対空陣地が崩壊した。

「こちら、ピラム。最後の対空陣地を破壊、敵部隊との交戦に移り陽動と着地点の確保に移りたいが許可願う。」

「許可申請。了解、AF部隊からも要請がありました。」

「了解。障害になる敵部隊を排除する。」

基地一帯にアラートが響く。攻撃を受けたときのアラートではない警戒を促す為の「ビー、ビー、ビー」と言う音。地下サイロが開き冷却液によって冷やされ霧となった水分が地表を這い広がってゆく。

「リンクス、中距離対AFミサイルのサイロが開放されました。既に発射準備は整っているようです。これの破壊を行ってください。」

様は、対艦ミサイルを対AF用に大型化した物だがランドクラブあたりなら直撃してもまだ動けるがイクリプスは飛行型AF翼をへし折られればそのまま落下してゆくだろう。

旋回しながらレーダーを確認すると空中の敵影が映っている。赤い点の数も現在進行形で増えているようだ。そちらを見ればヘリの10機編隊がこちらを狙っている。物資輸送に駆り出される事が多くなった戦闘ヘリだが通常兵器されど、通常兵器、有事の際に歩兵を使う時に大いに活躍するだろう。

対地ロケットランチャーで攻撃してきてもPAがある限り痛くも痒くもないミサイルのマルチロックを活用しまとめて叩き落とすと目標へとOBをかけて接近する。3機の大型地下サイロが大きな口をあけていた。

「後、29発」

ミサイルとレーザーを叩きこむ、爆炎と閃光が僅かに見えていた弾頭部を破壊し使用不可能に追い込む、オームルの索敵網と連動して表示される広域レーダーをみるとこの基地の全戦力の展開が終了したようで周囲一帯が赤い点で埋め尽くされている。数は50強どつやらあの格納庫群は氷山の一角にすぎなかつたらしい。中にはやたらと良く動く点がある。

レイヴン仕様のノーマルでもいるのだろうか。国家解体戦争以降すつかり、ネクストに居場所を奪われたとはいえネクストとノーマルの中間に当たる兵器として小競り合いレベルでは今なお現役だ。なにより、ゴジマ汚染を気にしなくて済むのが軍にとっては嬉しいことこの上ない。

有事の際には、各所で大活躍する彼らの姿を見る事が出来るだろう。

「弾たりるかな。」

上空のへりにミサイルを叩きこみ、距離を詰めて来るMTにチェインガン浴びせ、近づきすぎたノーマルをブレードで斬り伏せ、射程に入った対空設備をディアルレーザーで吹き飛ばした。

死屍累々、倒れているのは人間では無いがまさに今この場の様な時のためにある言葉だろう。次から次へと湧いてくる敵兵器にディアルハイレーザーの弾も残り六発、既にチェインガンの弾もミサイルも撃ち切ってしまった、背中の武装は重いだけなのでとつくにパージしてある。元々AFギガベースの主砲とか、ランドクラブの主砲とか。そのあたりを手早く壊して戦闘を有利に進めるためにブレードを採用したのだが今は主力になっている。

その上、包囲戦になってしまっているため被弾し損傷率は戦闘機能を維持する限界の50%を切ってしまった。

「後、30秒でイクリプスがこの基地を射程にとらえます。もうしばらく持ちこたえてください。さらに5分後に敵の援軍が戦闘入り

アに進入。」

「了解だ。」

ノーマルを切り伏せながら冗談ではないかと思った。いや単純にこの対空ミサイルの射程がふざけていただけだろう。

「右に3機、破壊してください。」

G A製ノーマルを視界の片隅にとらえると真横にディアルレーザーを放ちレーザーはノーマルの装甲に大穴をあけエネルギーを失った、これで残り5発。X軸方向にQBを行いうとそのまま右にQBを行いその慣性を持ってノーマル2機の頭上を飛び越えるとQTで機体の向きを変えブレードを振り上げさせ叩き落としの体勢に入った。

普段より短く分厚いブレードが薄い背部装甲とブースターを削り取るように焼き落とし目の前のノーマルに向けて切り上げにかかるスピリット・ムーンが見せた発動時間を越えたブレードの展開、それをやりたければ射出するレーザー光を減らすか多くのレーザー光を用意してやればいい。

後者は元の設定をいじって、つまりプログラムをハッキングして書き換えてやらないと無理だ。できる事は前者AMSを通じてブレードの出力を落としブレードレンジ犠牲に持続時間を延ばしてやればいい。

腰をひねらせそのままノーマルに突きを放つ、coreとleg sが生き別れとなり次の標的を探す前にノーマルのバズーカ攻撃を受けてしまった。

PAがその速度を殺し装甲に被弾した大口径の砲弾は装甲に大きな後を残す。4機、弾は5発この後も考えると敵しすぎる。

「イクリプスは？」

「後10秒」

いったんそこから退避し襲い掛かる。離れた所で戦闘していたためこちらに来ないと油断でもしていたのだからか反応が遅れた目標の物資保管庫を防衛する部隊に切り掛かった。ネクスト相手の戦闘

においてノーマルに安全な距離など有りはしないのに。

さつきまでノーマル用の遮蔽物と一緒に隠れていた僚機が地に伏せる姿を見てノーマルが一步後退した。有人機そう判断しながらレーザー光が再充填されるまでの一拍の後そこに容赦なくI e g sに切り掛かる。

「支援砲撃来ます。ノーマル部隊降下」

ようやく来た。イクリプスの下部に取り付けられた砲台が青い光を放ち始める。ネクストの比ではない大型ジェネレーターから作り出される膨大な電力を用いて作り出されるハイレーザーは一発で最も攻撃力がある単身ハイレーザーキャノンよりも威力がある。一回でも食らった物ならネクストでもピンチだ。

巻き込まれないようそこから離れるとそんなレーザーが3発連続で発射される一瞬で遮蔽物が吹き飛びMTとノーマルが攻撃を開始するがイクリプスのミサイル発射管から発射された対ネクスト兵器として有効な2機の機雷クリスタルミサイルによって周辺一帯の建築物ごと吹き飛ばされた。

いつ見ても、尋常ではない制圧力だ。

chapter 2 - 13 (後書き)

どうも、本格的にネタ切れしかけている鈴木シキです。

仕事は修羅場絶好調だぜ。水曜日が珍しく休みなのでその日の内にいろいろと見直しかしたい所、そういえば、ACEPの公式サイトがオープンしましたね。ゲージ式は廃止で今まで通りのシステムに戻るようであ、スパロボでやる分にはあのシステムでも問題なく機能したでしょうけどアクションであればちよつと息苦しかったですからな。

と、おまけはACNXから『クレスト本社部隊要撃』で戦闘する事になるレイブネーム・轟 ACネーム・ワイリー坦克の紹介です。

彼とは基本的にこのミッションでしか戦う事は出来ずこのミッションでは遠距離型と近距離型の企業直下のACを2機(イベント要員につきレイブネーム不明)、最初に相手にする事になるのでここでいかに被弾率を下げるかがミッションの成否を分ける。(地形ハメ可)

バランスが取れた重EO坦克に軽ハンドグレ、ガトマシ、30発オービットに多弾頭ミサ、それでもって強化人間であるため。その動きは坦克としてはかなり良い。どちらかと言えば距離を離しての遠距離戦がやりやすい。前の2機もあるので機動力よりは総火力を優先した方がいいかもしれない。

「リンクス、残存する敵部隊の掃討率50%に達しました。残りは通常兵器ばかりです。」

「もう弾が無いんだ。イクリプスに対地爆撃支援の要請を。」
「了解。」

イクリプスからローゼンタール社製のノーマル部隊が一機の工作用MTを護衛しながら巨大パラシュートで降下してくる。背化には大きな全ての機体の背中には両方のハードポイントを占拠する大型のブースターらしきものが装備されているあれでイクリプスのもとまで飛んでゆくのだろう。

全体的に細身なそれらにはレーザーライフルとENシールド兼用のブレードが装備されており数あるノーマルの中でも比較的早い部類にはいる。特にブレードは近接戦闘において非常に役に立つ武装だ。

汎用性に富んでいるあたりはさすがローゼンタールと言ったところか。

彼らの着地が狙われぬよう先に降下し、足元も部隊を排除しに掛る。

「リンクス、対空砲の制圧には感謝する。我々は予定通りゲートロツクの解除を行うのだが一つお願いしたい事がある。」

「何だ？」

「予備電力が起動するまでの間に回路の接続を行うためにこの変電施設を我々の合図で破壊してほしい。」

「そんなことして、その電力はカットされませんか？」

「問題はない。こちらで用意する。」

集まって来ていたMTとノーマルにブレードを振るう、次から次へと切りが無いもうすでに30機は叩き落としているがリーダーには赤点が集まって来ている。そのほとんどは通常兵器だろうがいい

加減にしてほしい。

ノーマルがパラシュートを開き真下に向かってレーザーを発射しながら地表に軟着陸する。すぐさま、先ほどの爆撃で目標以外殆ど更地になった地点へ向かい、MTを到達させると一斉に囲うように並びシールドを展開する事で即席の壁を作る。

そんな事をしている間にイクリプスが5機の飛行型MTに編隊に捕捉されたようだ。空対空ミサイルで迎撃はしているが対地攻撃にはめっぽう強いイクリプス、小さなMTに後ろからチクチクと攻撃を当てられる様は魚に襲われるクラゲその物、それでも取り付かせずに逃げ回っていられるのは単純にイクリプスが早いからだ。

「ニーナ、イクリプスに連絡。こっちに敵を引き寄せるとな。」

「了解。要撃のための連携行動を打診します。」

イクリプスが旋回を開始し、MTがそれを追う。機体を浮かせイクリプスより上の高度を目指しイクリプスは降下しながら通常の空対地ミサイルで対地爆撃を実行する。それだけで地表は爆炎に覆われ10は赤い点が消えた。

呆れんばかりの威力だ。その気になればここぐらい更地にできるのではないか。イクリプスがこちらを向いて接近してくるお皿を2枚重ねた所に小ぶりの翼？を横に3対付けた様はどこかシールドで何故か愛嬌を感じる。

それを追うMTは依然もBFF艦隊に配備されている物を見かけた陸空で脚部を変形させる事でどちらにも対応できるようにした制空権の要となつているMT、ネクストが開発こそされてから数十年立っているが空の王者はいまだに彼らだ。

イクリプスと交差するようにしてMT部隊の正面に出る。弾は少ない一回で掃討でできる数でもない。

「後、4発。」

ディアルレーザーを放ち一機を原型物残さないほどに破壊し続けて切り掛かり真つ二つにした。後3機ギリギリまで引き付けAAで吹き飛ばした。

「リンクス、イクリップスより連絡。良くやってくれたとのことですよ。」
「どうも、とでもいておいてくれ。ゲートの方は？」

「進行率50%と言ったところだそうです。もう、3分も持つてくれれば解放まで行えると連絡がありました。」

流星の速さだ。これなら思いのほか迅速にミッションを完遂できるかもしれない。しかし、ノーマルも良く守る。シールドの発生するエリアを合わせる事で2重のシールドを作り出し、なお且つ隙間から迎撃行動を行うよく訓練された部隊の様だ。

「敵部隊の掃討率、90%を突破。」

ロックオン警報がHMDに表示されQBを発動する間もなくPAに対ACミサイルが着弾し爆炎がPAを撫で突破してきた鉄片が装甲にはじき返される。至近距離からの着弾に驚きながらQTをきめ襲撃者の姿を確認する。

「なんだ、お前か。」

トレーラーにAC用のミサイルランチャーを乗せた戦闘車両が足を走り抜けていった。資料では良く見たし脅威にはならないので放置していたが実際に相手にするのは考えてみれば初めてだ。当然なかには人が乗っているだろうミサイルランチャーの傍には装甲で覆われクレーンのそれに良く似た操縦席でミサイルの発射管制をしている砲手の姿も確認できた。それを旋回させこちらを狙っている。ゲリラ戦をする気らしいがネクストにはそれをのみ込んで余りある機動力と火力がある無意味だ。

あつという間に追い越し戦闘車両の進路上に立ちふさがる。PAに触れたとたんガラスが割れ可燃物が焼けおちし人間が焼死する。タイヤを焼かれた戦闘車両はそのままの勢いで倒転発火、ミサイルに引火し爆発した。考えてもみれば生身の人間を意図を持って殺したのはこれが初めてだ。その事実を有機ELの向こう側にあるどこか遠くで起きた出来事の映像の様に感じながら戦闘を再開する。

「ランサー連絡がありました。変電設備を破壊して下さい。」

「了解した。」

飛び上がり、周囲を見渡してみてもそれらしい設備は見えない。地下で配線されているのだろうか。だとしてもどこかに外部からの電力を受け取る設備があるはず何処だ。

「ニーナ、それらしい設備は見えない。なにか情報はないか？」

「検索します……。国家解体戦争以前の情報ですがありました。レーダーに表示します。」

「助かる。」

ロックを手動に切り替え目標の建造物に狙いを定める。

「あと、3発。」

射程外の目標だったがディアルレーザーはコンクリート壁を難なく穿ち内部の設備を穿ち内部の設備は2、3ど火花を散らすと機能を停止した。

「ノーマル部隊より入電。電源の停止を確認これよりゲートを開放する。」

「了解移動する。」

そこには、通常兵器の猛攻に耐えるノーマル部隊の姿があった。どれも、ノーマルの相手にすらならない貧弱なレベルであるが、この状況下で戦う勇士達には一様の敬意を感じた。しかし、ネクスト勝ち数くと蜘蛛の子を散らしたかのように反転して逃げ出す。「それでいい。命を散らす必要はない」そんな事を思いながらゲートの前にたつた。

ガシャンガシャンとロックが開く音がすると厚さ2メートルはあろうかというゲートがゆっくりと左右に開く、そこにはACが余裕で入れるだけのエレベーターがあり下の方には人間が操作するパネルがあった。ACでうごかす構造にはなっていないらしい。

「ランサー、エレベーターを破壊して進入してください。」

ブレードでエレベーターの床を3回ほど適当に切り裂くとネクストの超重量に耐えられず床が抜け機体は落下してゆく。当然のことながら光源は存在しないカメラの暗視モードが起動しエレベーター

を支えるためのレールと深く暗い縦穴だけがHMDに表示される、この先に何を保管しているのだろうか。

10mは落下した所で足がつきエレベーターを動作させるモーター類を踏みつぶした。一段高い所にはエレベーターの大きさに見合った巨大な扉があり機体を浮かせ体当たりでこじ開けた。塗装に引っ掻き傷が残ったが問題ない。機体を通り抜けた所でエレベーターを上下させるためのワイヤが巻き取るシャフトがその負荷に耐えきれずエレベーターが轟音と共に落下しグシャグシャのスクラップになり果てる。

標的はこの先、あるのは“国家の遺産”か“未来のための埋蔵金”か。ランサーは明日も食べていくため周囲をHMD越しに見渡した。

chapter 2 - 14 (後書き)

どうも、無意味に長くなってしまっている気がしてしょうがない鈴木シキです。

おい！？首輪付き獣に続いて画像の切り張りながらホワイト・グリントまでMUGEN入りしたぞ。

そうか、V・Iのストップモーションでキャラを作る事も出来ないわけじゃないのか。これを皮切りに増えたりしないかな。

さて、今回のおまけはLRに登場する。

VR ARENAの？30 レイブンネーム スカ・ジャマイカ
ン ACネーム トリガーハッピー99の紹介です。

ご存じの通りACLRには二つのアリーナが存在し一つは今まで通りそこしか出てこないようなランカーと戦えるVRアリーナと、もう一つは作中に登場し撃破したレイブんと再度戦えるEXアリーナが存在します。

例にもれなく初期パーツを複数装備した中二脚であり武装はリポハン二機に3発ミサと言うアセン。リポハンそのものは優秀な部類に入り運用次第では最強武器になりえる事は某動画が実証しているがACを相手にするには若干火力不足であるためこいつに落とされることははず無いだろう。とはいう物のLRはゲームスピードが他のACにくれて早いため油断は禁物、なれないのなら正面からタンクの待ち戦術をお勧めする。

さて、いよいよ。今度の更新でCHAPTER 2が終了し原作におけるチャプター2、及び3の時間軸の物語が本格始動します。

物語における『転』の内容にしたいと思っていますので2つか3つめのミッションで大博打を予定しているのですが原作の世界観を壊さないよう最善の努力をする所存です。

周囲を見渡してみるとそこには有事に備えた無数の兵器が存在した。広さはデーターよりも広くネクストを人間大とするとちよつとした体育館並みの広さがあり高さもACが普通に立つて活動できる高さがあった。

巨大な衣装棚のような専用のハンガーにホントの服のように吊り下げられた大隊分のパワードスーツは旧チャイニーズに存在したという王墓を思わせ、ずらりと並べられた人では持てないサイズの銃火器はもはや草原の植物すら連想させる。

コンテナに格納された経済戦争では運用が禁止された各種兵器のための砲弾、実在するとは思った事も無かったEMP（電磁波）兵器まである。それらはコンテナにマーキングが施され一目瞭然となっていた。ここまで来ると量販店の倉庫の様だ。

足元を見てみればかつての名残が現在も保存されているのか円柱形の水槽の分厚くネクストの横幅ほどある鋼鉄の蓋が存在し確認できるその数は10を数える。いったいここに何機の遺物が眠っているのだろうか。

そして、拠点の占拠制圧や陣地の設営、エリアの掃討は何時まで経っても歩兵にしかできない仕事、これだけの兵器群があれば楽々としてこぐらいの規模の軍事施設でもを制圧、占拠できるだろう。かといって占拠なんて事をする必要が無い経済戦争では無用の長物こんな場所に保存される理由も分かる。

それとも、この施設を有事の際に防衛しきるための装備だろうか。どう破壊する。これだけの設備ディアルレーザーばかりでは心もとない。AAなんかこんな密閉空間で使ったら自分もただでは済まない。なら、ブレードで斬って回るしかない。

とりあえずパワードスーツが格納されている棚を切った。自重で倒壊を開始する。次にディアルレーザーで砲弾が格納されたコンテ

ナに向かつて発砲する。レーザーが運よく榴弾に着弾したのかに引火し周囲をまとめて吹き飛ばす。暗闇の中、ナパームや燃料気化爆弾の類まで格納されていたのか燃える砲弾が機体を照らし周囲を赤く染め上げる。

弾が足りない。ブレードで斬って回るのではらちが明かない。こと崩壊させるのは不可能、あんまり時間をかけていると援軍がイクリプスを追いつめかねない。

「めんどくさい！」

AAは元々球形で展開され地上で発動しても機体に影響はないだったから密室でも同じじゃないか。AAを発動する。PAが急激に圧縮され黄緑色の閃光を放ち始めた瞬間、周囲を黄緑色の爆風が包み込んだ。爆風に煽られ吹き飛ぶコンテナ、地上に当てられた爆風は跳ね返り天上に当たって跳ね返った爆風とぶつかり合ってさらに相殺し合い或いは混ざり合いながらまた新たな爆風を作り上げる。

ランサーは機体を何度も叩く爆風を聞き、哀れ兵器は爆風に押され吹き飛ばされ周囲の物を巻き込みぶつかり合いながらグシャグシヤに変形し原形をとどめないスクラップへとなり果て壁面へと叩きつけられた。予測はしていたがこちらにもその余波が襲い掛かり整波装置を破損させた。

壁にはスクラップの山が作り上げられ、爆心地付近の壁面は大きく抉られクレーターの様な様相を呈している。

これだけ破壊すれば十分だろう。

「リンクス、イクリプスがMTに取り付かれました。早急にそこから脱出し撤退を開始してください。」

「了解した。脱出する。」

PAが機能するか甚だ怪しいが、転進しはいつてきた所を逆走する。途中大破したエレベーターがあったがブレードで切り裂きブースターの出力で無理やり押し通った。

イクリプスが取り付かれたと言っていた。まあ、純粋な移動能力という意味ではネクストを大きく上回る兵器は昔から存在している

し、先ほどもMTが必死にイクリプスに食らいついていた。ノーマル？いや現段階においてイクリプスの速度に追いつけるACは存在しないはずクーガーがノーマル用のVOBでも開発したのだろうか。外へ出てみるとイクリプスがこちらを回収するために低高度で飛行し、その円盤状の翼にはMTが張りつき必死になって腕部の機銃でイクリプスを射撃していた。しかし、相手はAFその尋常では無い装甲によって焼け石に水になっているようだ。

「リンクス。我々が先に飛びイクリプスに搭乗する。リンクスには殿を頼みたい。」

「問題無い。」

いや、問題大有りだ。弾は無いし、先ほどのAAの使用でPAの再展開できていない。装甲に蓄積されたダメージも踏まえて考えれば下手に攻撃を浴びれば機能停止しかねない状況だ。

ノーマル部隊が背中に積んだブースターを一齐に吹かせて飛んだ。その姿にノーマルもあんなに飛べるのかと感心しながら周囲を索敵する。イクリプスの爆撃で施設はほとんどの機能を失いそこら中で黒煙を上げている。司令部が安全なエリアと判断したのだろうか作業用MTや車両が消火活動に当たっている。しかしどう見たって絶対量が足りていない。いや、少なすぎる。爆撃に巻き込まれ兵器以外も大破してしまっただろうか。

「これじゃあ、施設も立て直せないじゃないか。やり過ぎだ！」

やはり、AFは恐ろしい兵器だ。原水爆と同じように戦略兵器扱いこそされているがネクストでもここまではやれない。攻撃してくる敵は確認できなかった。もうこの基地には戦う余力は無いらしい。ノーマルがイクリプスと合流し取り付いていたMTを叩き斬り場所を開け、そこに向かって機体を飛翔させる。空から見た基地はさらに悲惨だった。ハイレーザーによる物なのか地面が大きく抉られていると事もあれば、ある施設の屋上には中身ごとバラバラになった対ACミサイルを持ったパワードスーツの残骸まである。

地表に向けミサイル群が発射される。それらは空中で爆発し膨大

な量のスモークとチャフを展開し基地を覆い隠しこちらを観測できないようにした。これで追撃される心配はないだろう。なにせ、あの基地はもう機能を失っているのだから。

いまだにPAが展開されない機体に無理をさせながらイクリプスに合流する。盾だけが傷ついたノーマル部隊とネクスト一機を乗せて普通に飛んでゆくイクリプスにある種の畏敬の念を感じながら本当にこんな兵器が必要なのかと疑問を感じるのだった。

企業における軍事力は、そのコントロールを第一の要件とし、代替不能な個人にこれを委ねることは、厳に慎まれるべきである。

リンクス戦争以降、それは企業の共通認識であり、その結果として生まれたのが、巨大兵器アームズフォートであった。

代替可能な多数の凡人によって制御され、ハードウェアとして安定した戦力を約束する。

アームズフォートは、正に企業の望むソリューションであり、事実としても、その戦力は平均的なネクストを遥かに凌いでいた。

物量とパワーの戦争。

大多数のネクストにとって、ジャイアント・キリングはその名の通り奇跡の親戚にすぎなかったのである。

「ほう、あの基地を落とすか。昔を思い出す。」

「国家解体戦争時にローディー様がお一人で制圧なさった基地でしたね。」

「誇張だよ。最終的に制圧したのは歩兵だ。」

「確かにな。“あの頃”の貴様にそれほどの実力があつたとは思えない。」

「口が過ぎるぞ、ダリオ。」

「その通りだ。誰もが経験を積んで力をつけていくのだ。いずれはここに名を連ねる逸材かも知れんぞ」

「ずいぶんと買っているのだな。王、手駒にでもする気か？」

「フン。」

「さて、雑談はこれぐらいにして本題に入ろう。」

「思いのほか。やってくれたようだな。メイチエル。」

「お膳立てを用意してやったのだから当然だ。しかし、本当に引き受けてくれるとは、な……。」

「あいつには依頼の選択権は無いからな。やれと言われればやるだけのやつさ。」

「しかしこれで旧北アメリカ大陸におけるアルテリア施設への攻撃がやりやすくなった。占拠も容易になるだろう。」

「こちらには大規模な歩兵が存在しない。歩兵の存在がこれほどまでに大きく感じられたのは初めてじゃ。」

chapter 2 - 15 (後書き)

どうも、なんか反省点が多すぎる気がする鈴木シキです。

忘年会シーズンがやってまいりました。もう懐が一気に寒くなってきましたよ。そして、今週から夜勤の可能性が浮上まあ構わないんですけどね。

今回、ジャイアントキリング云々の下りに説得力を持たせるためにこういう終わらせ方になりました。物語では起の部分にたくて頑張ったのですがなんか上手くいかない。

そして、物語は後半部分に進みます。オリ主という特性上原作におけるチャプター2から3の部分に当たり一気に終盤に向け加速させる予定。今後の目標は頑張って2週に一回の更s(ryいや、落ちてしまったらしまったでそれ相応の出来の物を上げていく事。

いや、小説+二次創作という利点を最大限に生かすEDも考えてあるんですけどね。

さておまけです。こっちのネタも尽きてきたよ。

LRに登場するVRアリーナランク29、レイブンネーム、クオモクオモ ACネーム、ALIEの紹介です。

重二脚にパルスガンに格納パルスとブレードという軽武装を施した機体でそこそこ早いがそれなりに堅くもたもたしているとブレードで削り切られるなんてこともあり得る。

LRゆえやっぱりこいつも早い。しかし早いのはこちらも同じパルスだけでは削り切れないためブレードに注意しつつ速攻で片づける事をお勧めする。

追記

しょうやさん。誤字のご指摘感謝します。早速修正を行いました。ご意見を参考にさらに読みやすく楽しめる物語を作って行く所存です。

企業連は依然として抵抗を続けるラインアークに対し対空陣地の設営が急ピッチで進められている電源施設メガリスへの攻撃を表明、クエーサーをはじめとする通常軍での攻撃が1週間中に行われる予定である。この声明を出した目的は、ラインアーク側への牽制と雇われる可能性があるネクストAC及びリンクスへの牽制があると思われる。

次のニュースです。

最近目撃されている不明ネクストの所属は依然として不明であり、鋭意捜査中との発表が行われました。

また、一部ではアルテリア襲撃犯の可能性があるのでと目されておられその筋も視野に入れて操作が行われているようです。

最後のニュースはインテリオル・オーメルの合同開発AF『アンサラ』が報道陣の前に公開されました。

映像が切り替わる。

かなり離れた所からの映像の様で若干砂で茶色みがかかっているが海上をゆつくりと飛行するその様は空中要塞といっても遜色ないだろう。骨だけの傘にも見えるそれには着陸脚らしいものが見受けられずなお且つブースターの様な従来の推進システムも確認できない。フィミルのような技術を使っているのだろうか。それにしてもあれほどの質量を持ちあげられるとは驚きだ。

ここまで来るとある種の神々しさすら感じる。神の剣「Frag^{アン}サラ」の名にふさわしい。

ランサーは気まぐれに自室で朝食をとりながらそんなニュースを見ていた。相変わらず部屋には本人も原作を知らないデフォキヤラのフィギアをはじめとする癒しグッズが並び、最近では香木のそれを模したお香にハマり始めた。

その土臭いともいえる香りに落ち着きを覚えるのは自分が人だからだろうか。それにしても、散発的なテロ攻撃は以前からも少なからずあったがアルテリア施設が大破するような攻撃が始ってからも随分たつ、ジュリアス達の仕業だろうかここまで捜査が遅れるのは異常だ。

企業は食い口を減らす気なのだろうか。だとしたら、好きにやらせるわけにはいかない。

今日の予定をケータイで確認する。大きさそのものは手の平サイズだがもはや携帯“電話”と言うより携帯端末と言った方が正しい。今日はジェラルドとの電話会談の予定が入っている。カロードの？が直々に仕事の事で電話をしてくるのだ。なにか大きな仕事があるのだろうか。

アスピナの政治中枢を担っているアスピナ機関の会議室で双方複数の関係者の顔が表示されたディスプレイが並びその後ろには何故かマスコミが集まっていた。こいつらは一体何のつもりでここにいるのだろうか。

その会議室の広さはお世辞にも大きいとは言えない。入って10人、木目を模した樹脂製のイスと樹脂製の机が並び赤い絨毯と少し派手な内装はまさに会議室と言った様相を呈していた。

「久しぶり、と言うほどでも久しぶりではないか。活躍しているそうじゃないかランサー。」

「ジェラルドこそ、こんな格下の相手にわざわざ連絡をするなんて何事だ？」

ふと口元がゆるむ。

「いや何、一つ仕事を頼もうと思ってね。」

「・・・冗談だろ？」

笑顔が消える。ジェラルドのランクは5、間違いなく最強クラスのリリンクスだ。そんなレベルの人間がわざわざ仕事の話をするという事はそのレベルでも手に余ると判断されたからに他ならない。

「いや、真面目な話だ。」

「で？相手は何だギガベース10機か、それともランドクラブ10機か。それともどこかの下請け企業が反乱でも起こしたか。」

今度はジェラルドがほくそ笑む。

「いや、イレギュラーネクスト一機だ。」

「おいそれって・・・」

「いや、この機体の攻撃を受けたのはAFの乾ドックだ。同ネクストはここを占拠し続けているらしい。無論通常軍が動いたが全滅した。」

「生存者は？」

「4割と言ったところだ。」

「トラセンドが居るだろ。あいつはどうした？あいつだって俺なんかより数段上の実力者だろ。」

「撃退されたよ。」

後ろのマスコミが騒ぎだす。

「マスコミの皆さん。これを報じるのは我々が同ネクストを排除した後にしていただきたい。我々がここにあなた方を招き入れた理由その意味をお忘れなく。」

ローゼンタール側の報道官だろうか。すかさずマスコミに釘を刺した。

「要点は理解した。所長もこの依頼受けるつもりなんだろう？」

AFの建造には大きく分けて2種類の工法がある。一つは水を使う方法、もう一つは水を使わない方法。その巨大すぎるパーツのた

め普通に建造すると手間がかかり特定の場所でバラバラに建造された部品と言っても高さ20mを超える物ばかりだが、それらを湖や海で浮かしながら浮きドックで組み立てるか、谷の様に巨大な乾ドックで組み立てるかして形にしてゆく。

それぞれに一長一短があり、これと比べて確実な手段は確立していない。ただ確実に言える事はこれらの施設には膨大な数の労働者が従事し、その周囲はちょっとした町になっているという事だ。

そういえば、ここの工場で組み立てられていたAFは何なのだろうか。ネクストだけで事が足りているローゼンタールには所有のAFは無かったはず。オーメルも組み立て工場は持つているがそのほとんどが水を使用する物で今日もイクリップスを組み立てているはずで、海上にある一番大きな組み立て工場はインテリオルと共同で新型AFを建設しているはず。ランドクラブやギガベースなんて作っていただろうか。

そんな組み立て工場から50キロほど離れた野営地で2機のネクストがミツシヨンのための準備を始めていた。

その周囲にはメカニック達がせわしなく動き回っているのだがどちらがどちらの人間かはみればはつきり分かった。

「やっぱり、あいつの野営地は派手だなあ〜」

普段着に大きめの帽子をかぶり滅多に使わない輸送機の個室から外の様子を覗いてみるとその様子が確認できる。

ランサーの方は仕事も素早く無駄と言える無駄もなかったが、良く言えば長らく愛用された、悪く言えば使い古された作業着を着ており、物が乱雑に置かれていたりと正直きれいとは言えなかった。

たいしてジェラルドの方は綺麗な作業着を着ており物も整然と整えられ、なお且つ仕事が効率的だった。

それが投資されている金額の差なのかは不明だが、二人の資産の差はそれ以外の部分を見れば一目瞭然だ。

ランサーの方は積載量を優先し、標準的な航空機に似た飛行機の下部分の下部に巨大な格納庫を抱える大型輸送機でこの中に野

営地としての機能を十二分に備えているが、ジェラルドの方はネクストを寝かせて運ぶ事が精一杯、だが移動速度が早くなお且つ垂直離着機能を持った高速輸送機だ。

それは野営地の様子にも表れていてランサーの方は全て輸送機内で済ませているが、ジェラルドの方は複数のトレーラーが集まりテントを建てたり整備用のハンガーを立ててそこで整備していたり豪華な食事を用意していたりと金を使い放題だ。

無駄遣いと言ってしまうえばそれまでだが、やはりどうせ働くならああいう職場で働きたいと思うのは罪ではないだろう。

格納庫へ出てみればザン達が強襲仕様のピラムにマシンガンにマガジンを装着しコジマ粒子のタンクをジェネレーターに装着し推進剤を機体に注入しているさなかだった。

既にパルスキャノンへの発振機の装着は完了しているのだろう。

「よう！。そつちの準備は良いか！」

「問題無しじゃ。トップクラスのリンクスの御前じゃから手酒を飲めねえのが残念じゃ。」

「野暮な仕事は無しにしてくれよ。」

ザンはその言葉を「ガハハハ」と豪快に笑い飛ばした。僅かばかりの草が生える荒野に足を踏み出すとハンガーに固定されたノブリス・オブリージュの傍でウエットスーツにも似たほぼ全身を覆う対Gスーツのインナー姿でジェラルドが腕組みをしながら整備の様子を眺めていた。あのインナーはある程度の対塵性がありネクストから脱出する際に残留するコジマ粒子で火傷を負わないようにするという役目がある。

chapter 3 - 1 (後書き)

遅くなりました。鈴木シキです。

いやはや、夜勤とはやりがいのある物ですね。僕は夜型なのか朝型なのか・・・(苦笑)。

あ、Fragarachの下りですが、わざとです。僕も当初はアンサラーはfa主(strayed)に対する企業の回答者(Answerer)という方向で話を組み立てていたのですが。

問題が発生。『ランサー銃兵』という主人公が居れば予想がつくと思いましたがまああれです。大人の事情です。また、この物語は主人公の主観だけによって語られている事をお忘れなく。

さて、おまけですが・・・。

なんか、僕の様なヘタレがこんな事書いているのが恥ずかしくなってきました。今回の紹介を最後におまけを打ち切ろうと思います。さて、紹介するのは当初の話通り。愛すべきネタキャラ?と化しているレイブネーム、ゲド ACネーム、ゲルニカの紹介です。逆2脚に中量EOコア、Eマシシヨ腕、そして干頭ことアンテナ頭、10連小型ミサ。ネタキャラ扱いされる事がEN負荷の低いアセンに高火力EN兵器と意外と理にかなっている為、ここで躓く初心者が多い模様。

何より注意すべきは武器腕の火力、一瞬で熱暴走に追い込まれるだけでなくそれぞれの物の火力も脅威。しかし、見ての通り装甲が非常に薄くそこにつけ込めば勝利は容易いだろう。

本来、一切の戦闘行動が禁止されたエリアであるためか空を見上げると青く澄んだ空には薄い霧の様な雲が僅かばかり漂い、太陽はご機嫌で大地を照らしている。

そのせいか逃げ水や陽炎があちらこちらで発生しているがそれを気にする者はいない。

「よお、ジェラルド。そんなかつこをして暑くないのか？」

「ちよつと暑いかな。」

インナーもなんか派手だ。俺のインナーは良く言えば実用特化、悪く言えば殆どタイツ状態で申し訳ない装飾しかないがジェラルドの物は普通に服と言われても違和感のないものに仕上がっていた。

ジェラルドと軽い抱擁を交わすと、次いで僚機のリンクスとして固い握手を交わした。

手を離すとジェラルドの表情が旧知の友人から戦場を職場とする傭兵リンクスの表情に変わる。きつと自分も同じ表情をしているだろう。

「敵の情報は先にもらったデーターから把握しているが、俺なんか僚機でよかったのか？相手はガトリングだらけの重装タンクだつて言っじゃないか。」

「まあ、それだったらなんだが。問題が起きてね・・・」

「問題？」

「どうも、イレギュラーが姿を消したらしい。綺麗にな」

「なるほど、下手に通常軍を索敵に出して殉職者増やすよりはこっちの方が確実だ。」

周囲を見渡せばカメラを大切そうに抱える人間の姿を確認できた。それに、プロパガンダに使える。」

どうみたってマスコミだ。仮に手遅れだったとしてもその気がある事を示しておけば例え、仕事が遅すぎるといふ批判が出てもある程度抑えこめる。

ジェラルドが苦笑をこぼし、ハンガーに固定された高級感あふれる愛機を見上げた。だがその目は機体を見てはいない。プライド？いや違う故人？いや違う。彼はいつもこうだその向こうにある何かを見つめている。

2機のネクストが飛んでゆく。ノブリス・オブリージュとピラムはここでも対照的だった。当然のことのように飛行し青系統の塗装のため殆ど目立たないピラムと白の高級感あふれる塗装故、高貴な存在感を示し機体の重量故ゆつくりと飛んでゆくノブリス・オブリージュ。

二機の間にはそれなりの距離が開いているが初めから二人ともそのつもりで飛んでいた。

「見えてきた。」

「話には聞いていたが、やっぱり大きいな。大きすぎる。」

A Fの組み立てドッグは赤茶けた地面に南北に延びる大きな穴を掘り、その掘ったときの壁に資材を取り付けてライン化した物だった。その周囲には熱や砂から中身と建築物その物を守るためか背の低い半球状の大小さまざまな建築物が並び、その様は沸騰した水面の様でもある。

これで雨が降ったら大変なことになりそうな気がするが、それはそれで水を確保するために利用しているのだからと勝手に解釈する。カメラの望遠機能を使い谷になっている場所を見てみると攻撃を受けた際に交戦したのか、製造ラインにある程度の被害が確認できる物のラインには“何もなく”設備への被害をそれほど気にせず存分に動きまわれそうだが、なぜか仕事柄よく見かけるコジマ粒子タンクがいくつも点在していた。おかしい、あんな物A Fを建造する上では必要ないはずだ。

「ジェラルド、そっちで何か捉えたか」

「残念だが、“空っぽ”の製造ラインしか確認できない。」

何かがおかしい、その事をジェラルドも感じ取ったようだ。

「リンクス、製造ライン内でネクスト反応。一機です。」
ジェラルドが息をのんだ。HMDに管制の方でとらえた映像が表示される。

青い塗装、かつての空の王者である音速戦闘機に似たライールのcore、細く骨格標本のようにも見えるランスタンのlegとarms、仮面の様なのっぺりとした同じくランスタンのhead。トラスのやつら、変態じみた新フレームだけじゃなくあれも作っているのだろうか。つくづく、労働者の体調が心配になる。

武装はレイレナードのブレード(02-DRAGONS LAYER)、同じくマシンガン(01-HITMAN)、オームルの強化散布ミサイル(MP-0200I)そして、肩にカタログでも見た事が無い物がついている。外見からコジマ技術に関する物と予測を立てるが何に使うのだろうか。

「始めてみるネクストだ。管制、アセンから予測される敵ネクストのスペックをよこしてくれ。」

ジェラルドが自分のオペレーターに指示を出す。自分はぱっと見ておおよその性能を予測するがそちらの方が確実だろう。

HMDに敵のデータが年式や想定されるスペックがグラフの形で表示される。やはり、PA特化型のネクストらしいだが肩の装備についてはUnknownの文字が伸びている。それ以外はリンクス戦争の最中から終結しばかりの古いパーツばかりで、改修の後もみられると表示されていた。

旧アクアビットの関係者だろうか。ジョシユア・オブ・ライエンもここで致命傷を負い死亡したというし見逃していても不思議はないか。現にその武勇をたたえてアスピナには彼の愛機ホワイト・ケリントが強力なコジマ兵器によって破壊され状態で観光用に公開されている。疑いの余地はないだろう。

「不確定事項が多すぎます。くれぐれも深追いをしないように。」
「了解した。ジェラルド聞こえてるか？俺が前に出て斥候をする。」

可能なら背中のでかい物を叩きこんでくれ。」

「無茶をするなよ。」

何かある。そう感じるがそうなる前にPAを削り切ってみせる。一気に加速しイレギュラーに突撃をかける。進入したドックの内部はやはり広かった壁面には南北に壁ごと動く巨大なクレーンが複数取り付けられ床は金属ではなく分厚いコンクリートが敷かれている。これなら2機のAFを組み立てられそうだ。

相手もマシンガンを撃ちながら突撃をしかけてきた。おかしい、ブレードがあるがあのアセンではEN環境は最悪だろうこっちは強化マシンガン2機相手は標準型マシンガン1機、撃ち合いをすればこっちが有利のはず。

距離が詰まる。500、400、300。射程に入った。その時だ、イレギュラーネクストのPAが黄緑色に輝き、肩の武装についたファンらしき物が黄緑色の光を出しながら回転を始めAAの準備動作に入る。

「マス。」

その瞬間理解した。この特化したアセンはAAの威力を限界まで引き上げるため、肩の妙な装備はPAかAAの機能を補助するための物、「ランサー、逃げるんだ！」通信にジェラルドの声が飛び込んできた。逃げ切れるほどの距離などない。AAで爆風を相殺しようとするが間に合わない。

黄緑色の爆発が発生した。PAはあっさりと消し飛びHMDが黄緑色の閃光で覆い尽くされた。黄緑色の爆発は装甲を直接叩き、塗料を焼き圧力に負けた関節部をあらぬ方向へと曲げ複合系アクチュエーターを破損させる。

HMDに一齐に損傷状況を占めず表示が現れ、今の一発で戦闘用の機能の3分の1は持つて行かれた事を現している。だがこれはチャンス、奇跡的に保持を続けていてくれた2機のマシンガンをコジマ粒子の煙の向こう側にいるはずのイレギュラーに向ける。

だがその直後に煙を突き破って青いイレギュラーネクストがブレ

ードを突きを放つ体勢で接近してきていた。その仮面のような頭部が今はそれは恐ろしい死神の顔に見える。

近い、QBで避けられるか。左、後ろ、さらに左と連続QBを行うがイレギュラーはブレードを発動させるタイミングを遅らせてついできた。

「こいつ」

そこに6条のレーザーが襲い掛かり、イレギュラーはブレードの発動をキャンセルしながら後方方向のQBでこれを回避した。ノブリス・オブリュージユの破壊天使砲ことEC-O307AB が火を噴いたのだ。

「大丈夫か。ランサー」

「損傷率40%と言ったところだ。まだいける。」

「下手に前に出るのは危険だ。二機で挟み撃とう。」

ジェラルドが牽制のためにライフルを撃ちながら通信してきた。

イレギュラーは地上に降り、必要最小限の動きでこれを回避しENを回復させながら、コジマ粒子タンクへと近づいている。

自分の機体の特性を良く理解した上の立ち回り、皆無に等しいENを活用し高速戦闘をする技術、ブレードが発動までの時間が決まっているはずなのにそれを無視しなお且つキャンセルさせることが可能なAMS適性、間違いなく十本の指に入る実力だ。

「気をつけるジェラルド。こいつ、本物だ。」

「分かっているさ。いくぞ！PAを展開させるな。」

「了解だ。AAはもう使わせない。」

chapter 3 - 2 (後書き)

どうも、鈴木シキです。ちょっと愚痴らせてもらいます。

先ほど、バクマンを読んできたが……。やっぱり、これはモノクロな気がしてきた。

ん〜。“笑い”ね。

原作がある以上、結末は皆知っているわけでこれを崩しすぎるわけにはいかないわけで。

暗から明へ一気に話を持ち上げるか。

それでは、2週間後にまたお会いしたいと思います。

「演習での立ち回り忘れていないだろうね。」

「体が覚えてるから問題ない。」

二機はそう言っている間も距離を離し、挟撃の態勢に入り始めて
ている。

あれのAAは危険だ。それにしても威力がある肩の武装はAAの
機能を補助する装置か。それにしても、損傷が激しいこれほどの危
機感を覚えたのは久しぶりだ。

「そうだ、ジェラルド。ここで何が作られていたか知っているか？」

「さあ、私も知らない。」

「そうかい。気をつける、あいつかなりの腕前だ。」

ピラムが左に、ノブリス・オブリュージュが右に展開する。チャ
ンスは互いに一回切り、ピラムがやや前に出てマシンガンを乱射し
つつ動きをけん制し、ノブリス・オブリュージュが必殺の一撃を狙
う。

後退していたイレギュラーがコジマ粒子タンクの真上で止まった。
こちらのPAはようやく膜として機能を始めた所、突っ込めば一瞬
でやられる。

「まさか、あれでPAを回復する気じゃ」

「阻止する。」

破壊天使砲が火を噴いた。イレギュラーはさも当然の様にQBで
回避し流れ弾はコンクリートの床を真っ赤に溶解させる。

「停止状態から“レーザー”を回避するとは。」

回避しながらイレギュラーは別のコジマ粒子タンクを指しつつ
両機に向かって牽制の散布ミサイルを撃ってきた。ジェラルドはさ
も当然の様にこれを回避し、此方も撃ち落としてつつ回避する。

「PAが回復した。行けるぞ、ジェラルド」

とはいう物の、実力は遥かに向こうが格上、後2回AAを食らっ

たらこつちは行動不能でノブリス・オブリユージユも何処まで弄つてあるかは知らないがそれほど持たないだろう。なら、やれることは一つ。

ノブリス・オブリユージユがブレードと破壊天使砲を起動した状態でP Aが回復し切らないイレギュラーに切りかかり、イレギュラーはZ軸方向のQ Bでこれを回避すると短く高威力のブレードで突きに掛る。

ジェラルドはブレードが発動するタイミングを見切り、右方向にQ Bを発動させながらその余剰推力で旋回しイレギュラーを破壊天使砲の射角に入れた。D Tドリフトターンと呼ばれるQ Tの上位技術だ。推進力も噴射時間も“並み”であるS Bを用いてあれほどの重さの機体で平坦とやつてのけるあたりのトップ10はやはり違う。すぐさまマシンガン援護射撃を行い、頭を押さえこんだ。

イレギュラーはそのままノブリス・オブリユージユの懐に飛び込む。イレギュラーのP Aはそれを待つていたかのように膜としての機能を取り戻しあつという間に再展開が完了する。

「ジェラルド！ A Aがくるぞ！」

「！」

ジェラルドが息をのむ音が聞こえた。まずい、装甲が接触する間際の至近距離でA Aを食らったらノブリス・オブリユージユもただでは済まないはず。それにあのブレードは裸の状態では危険すぎる。

イレギュラーのP Aが輝き、緑色の閃光が周囲を照らし地面を抉りノブリス・オブリユージユを破壊する。

「ジェラルドー！」

その瞬間鉄同士が激突する音が聞こえ光が消えたとき、そこにはイレギュラーのレーザーブレードを機体をそらしてかわし、その腕で抱え離脱できないよう拘束しているノブリス・オブリユージユの姿があった。しかし、破損もひどい前面の塗装は殆ど焼け細かなパーツが幾つか吹っ飛んでしまっているようだ。痛々しいことこの上ない。

ネクストはあんな動作もできたのかと感心しつつ銃口をイレギュラーに向けた

「ランサー。弾を叩きこんでくれ。」

イレギュラーはその腕を必死に引き抜こうとしているが使われているアクチュエーターの数が違う。力負けし引き抜けずにいる。

有効射程ぎりぎりまで一気に接近し、マシンガンを発砲する。P Aが無いネクストなんて一部例外を除いてノーマル未満の耐久力しかない、押さえつけたこの状況ならマガジン一個でどうにかできはず。

大量の砲弾が申し訳ない程度の厚さしかないイレギュラーの装甲を穿つ、あれより少しマシな程度の装甲しかない軽二ヒラムに乗っている立場からすれば核心と共にまた別の恐怖を覚えた。

「落ちろ、墮ちろ、墜ちろ！」

イレギュラーはまずいと判断したのか掴まれていた左腕をパージし離脱するとQBの出力を調整し殆ど真円を描きながらノブリス・オブリュージュの真後ろに回りマシンガンを放ち牽制しつつ後退しコジマタンクへと向かう。ノブリス・オブリュージュの背中に何発か被弾させたがあれでどうにかなるほど脆くはない事をランサーも知っている。

「やはり早い。」

ジェラルドはそう言い、抱えていたイレギュラーの腕を離しつつQBを行い流れ弾と牽制の砲弾を回避する。

こいつら、本当に器用な事をする。いったいどれほどの量の電流が脳内に流されているのだろう。

「ジェラルド、今のであいつの推進装置に損傷を与えられたはずだ。」

「分かった。引き続きAAに警戒しながら追いつめていこう。」

コジマタンクから噴水のようにコジマ粒子が噴射し始めた。イレギュラーがそれに飛び込むと外部からコジマ粒子が供給され一瞬でP Aが修復される。

「やはりその為の物だったようだね。」

厄介だ。何をいまさらという気もするが、全て壊してしまえば楽はできるしかしそれではここがコジマ粒子に汚染されつくしてしまう。

イレギュラーは左腕が無くなった分軽くなりスピードがさらに速くなるが左周りに動いている。左腕が無くなった事で肩部のブースターが失われ右方向の推進力を殆ど失ったのだらう。

だが、ブレードが無ければ危険視すべき対象は無い。どうせ、後1発は耐えられるのだ。二人係で押し切れれば。

「ジェラルド、俺は突撃する。」

「正気か!？」

先ほど、ノブリス・オブリュージュはAAを至近距離で浴びたのだ。その威力はよく分かっている事だらう。しかし、しばらくして別の答えが返ってきた。同じ結論に達したのだらう。

「死ぬなよ。」

「ああ、後でシャンパンでも飲もうか。」

マシンガンを発砲しながら突撃をかける。イレギュラーはさも当然の様にそれを左方向に旋回しながらかわす。そこに6条のレーザーが襲来しこれをDTでかわしこちらに振り向きAAを発動させるがこちらもAAを発動させ爆風を相殺するとそのまま体当たりする気で突撃をかけイレギュラーを後退させるとそれを待っていたかのように6条のレーザーが襲い掛かり左足を吹き飛ばす。

ジェラルドはリンクスを殺さないつもりようだ。

イレギュラーはこちらにマシンガンを撃ってくるがこちらの射程はこちらの射程だ。その火力で押し切りさらに後退させる。

「行けるか。」

こちらの装甲とイレギュラーの装甲に無数の砲弾が食い込み文字通り八チの巣にしてゆく。ただし、数は向こうが2倍多い。しかし、イレギュラーは機体を上昇させ一瞬でこちらの頭上をとるその位置は丁度コックピットのハッチを狙える場所だ。前方向のQBを命じ

るが間に合わない。

「やらせない！」

ジェラルドの声が聞こえるよりも早く6条の閃光がイレギュラーに着弾しcoreの下部を吹き飛ばす。イレギュラーはそれをものともせず攻撃を行おうとするがMBが小爆発を引き起こし慣性のまま頭から地面に激突しグシャという金属がつぶれるとともにその衝撃で頭部はつぶれ、coreの肩も拉げる。

「やれたか。」

QTで大破したイレギュラーに振り向きながら警戒する。ジェネレーターのコジマタンクが破損したわけではなさそうだがイレギュラーからコジマ粒子が漏れ出す。

「コジマ爆発。回避を！」

ニーナの声が飛び込んできた。すぐさま、連続QBで距離を取る。直後AAとは違う黄緑色の爆発が発生しイレギュラーはバラバラに爆散した。

「機密保持か。いったい誰が乗っていたんだ。」

「なあ、やっぱり何かおかしくないか？」

「なにがだい？」

「こいつはなんで最後まで戦ったんだ？」

「確かに。」

この依頼もこの組み立て工場もこのイレギュラーも全てがおかしい。

chapter 3-3 (後書き)

どうも、やることは決まっているもののネタが本格的に枯渇し始めた鈴木シキです。

ホント、この部分ではやれること無いです。原作ではミッションが沢山出てきてなお且つ武装も充実してきて楽しめる所なんです
orz

と言うより、AC無しで思いっきり盛り上げられるようになりたい。なかなか難しい物です。

それでは2週間後の更新をめぐに努力行きますので今後ともよろしく願います。

「敵ネクスト撃破を確認。終わりだな。」

「ああ、終わりだ。」

はたしてこのイレギュラーは誰が乗っていたのだろうか。そもそも、ここで建造されていたであろうAFは一体どこへ、第一になぜこんなところに貴重なネクスト戦力を置いたのだろうか。帰還してから少し調べてみようか。

無数のフラッシュがたかれ、中破した二機のネクストとジェラルドを撮影する。輸送機の格納庫からそれを見ている理解はしているが、やり切れない気持ちになる。

「やっぱり、上位ランカーは違うねえ」

ジェラルドが連れてきた給員が作った軽食を片手にそんなことをつぶやいた。機内におかれていた新聞に目を通しつつ公表されているアルテリア施設の配置をケータイで確認する。

現在、機能しているアルテリア施設は大小合わせて1000か所以上。ここ最近の襲撃で中継機としての役割を果たしているアルテリア施設の1割以上が破壊され“閉鎖”されている。復旧のめどは立っていない。

狙われた施設に共通する事は発電システムを持っていない主要アルテリア施設間をつなぐ中継機である事。現在進行形で施設は破壊されているのだから、もしここで主要アルテリア施設が落ちれば一気にクレイドルのエネルギー基盤は崩れさる事になる。

ジュリアス達の計画が進行しているのだろうかやはり異常だ。企業はこの事を知っていて自分たち出来ない事をやらせようとしている様にすら見える。

ニーナが血相を変えて、操縦室があるブロックから飛び出してきた

た。

「ランサー、大変です。メガリスの破壊をストレイドに阻止された企業連がラインアークへのネクスト機による攻撃を声明しました。」

「本気かよ。」

マスコミの方を向いてみると数人が拳動不審だ。情報が伝わり、騒ぎ始めたのかもしれない。

ネクストでの攻撃声明、それは戦略レベルでの攻撃を行う事を指しラインアークへの攻撃を行うという事は住居がある場所へネクストを投入するという事。戦闘の規模にもよるが死者は2000、3000等という数字では収まらないだろう。

だが、あそこには現行最強と言われるホワイト・グリントが守護者として活動している。生半端な戦力は確実に返り討ちにされるだろうし、当然ラインアークもネクストを雇いに掛るだろう。

「企業連はランク1、オツツダルヴァを投入するそうで現在僚機を選定中とのことです。」

まずいな。彼はリンクスになって日が浅いが彼以上の実力を持つたリンクスは現れないだろう。もし、ストレイドがラインアーク側に加担しオツツ・ダルヴァにホワイト・グリントと共に戦闘を行えば撃墜されるのはオツツ・ダルヴァだ。

「まずい。大いにまずい。」

現在進行形でジュリアス達の計画が進行している今、実質上の最高戦力が失われれば彼女たちを止める手段は失われる。企業は自分たちの利益を最優先する組織この計画に加担しているとすれば一体どれだけの人間が死ぬのだろう。

2週間の月日が流れノブリス・オブリュージュによるイレギュラー討伐のニュースは企業の声明によってかき消され新聞の片隅に記載される程度になり、その事実を記憶にとどめている人間はごく少数だろう。

そういえば自立型ネクストの改良モデルがオーメル・サイエンスが発表した。ネクスト離れが進んでいる今いつたい何を思ったのだろうか。

今アスピナにはフラジールとCUBEは居ない。今はラインアーク側が放送しているテレビ画面の中、夕焼けの中永遠と続く海上道路はさながら無限回廊の様そこに立つオッツ・ダルヴァ乗機ステイシスの横にその姿があった。アングルから推測してラインアークの動脈ともいえる海上道路に固定された定点カメラの映像の様だが、反対側、つまりホワイト・グリントとその僚機の映像も画面分割という形で映し出されている。

その中でも異彩を放っているのがその僚機の方だった。見た目はフラジールに並ぶ物は居ないと思っていたがそれを凌いでいる。

フレームはアリアをベースに重量のためかアルゼブラの旧標準にcore変更され、腕はBFFの新標準に変更されている、加え頭部はローゼンタールの旧標準に変更されているが中身はどうなっているか想像できたものではない。BFFの分裂ミサイルに肩連動腕には新モデルのつつきと初期から存在するスナイパーライフル。「あいつ、ステイシスとは撃ち合う気か。」

確かに性能面では優位に居るだろうが相手はランク1。何処まで立ち向かえる。

「政治屋どもめ、リベルタリア気取りも今日までだな。」

「こちら、フィオナ・イエルエフェルトです。貴方達はラインアークの主権領域を侵犯しています。すぐに離脱してください。さもなければ実力で排除します。」

「フィオナ・イエルエフェルトか、アナトリア失陥の元凶が何をえらそうに、行けるな。フラジール。」

「はい。そのつもりです。」

よく言う。お前だって敵の実力を知らないわけではないだろうに。「ミッション開始。企業のネクストを排除する。見せてみるお前の可能性を。ステイシス、ランク1オッツ・ダルヴァか企業連も本気

「と言う事だな。」

OBで一気に接近する4機のネクスト交差する砲弾にレーザーそしてミサイル。人間離れた人間たちに戦いにフラジールはかき回されながらもそのスピードで追いついてゆく。

両者とも手堅い戦い方をする、相手がどう動こうと自分の距離を崩さない。それでいて確実にダメージを与える戦い方は理にかなっていると言っでいい。

「ホワイト・グリント大げさな伝説も今日で終わりだ。進化の現実ってやつを見せてやる。」

「貴方は、昔の私たちと同じです。考えてください何のために戦っているのか。」

ステイシスが逃げる。それをホワイト・グリントが追撃する。遠方を監視するカメラが遙かかなたでAAの発動を捉えた。

「さようなら、縛られたリンクス。」

「メインブースターが完全に逝っでいやがる。浸水だと、バカなこれが私の最後だというのか。認められるかこんな事。だが、私一人では死なん。」

背中から黒煙を上げながら海に沈んでゆくステイシス、ホワイトグリントはQTをしつつOBを発動させる。そこに一回り太いオレンジ色のレーザーが突き刺さった。コジマ粒子が充填されていたOBに着弾したレーザーは推進剤とコジマ粒子の混合物を異常燃焼させ爆発を発生させる。ホワイトグリントのcoreの半分近くが吹っ飛び、海面へと白いスクラップが落下してゆく。

「ホワイト・グリント戦闘不能です。彼はもうあなたの助けにはありません。ごめんなさい。」

「これで一対一と言う事ですね。テストの汎用性は高くなりました。いい傾向です。」

「ハッ！。もう障害は無い。終いにしてしまえ。」

ストレイドが全ての武装をパージしつつ、OBを発動させる。そのままの状態で突撃黒い砲弾と化したストレイドは一瞬の交錯でフ

ラジールのlegsを切り落とす。その手には居合ブレードが装備され、先ほどの一瞬の間に切り捨てたようだ。

「プランD、いわゆるピンチですね。」

フラジールが旋回し射角にストレイドを納めようとするがストレイドは止まらなかった。OBの出力を調整し、OBを発動させたまままでQTを行い180度旋回すると猛スピードで接敵する。避けようとするフラジールだが、CUBEがその動きを始めたときにはストレイドは目の前にいた。

一瞬だ。

交錯したその一瞬にフラジールのT字型のcoreは2つの居たと一本の棒に解体され落下していった。

「AMSから光が逆流する。ギャアアア！」

「フラジールの撃破を確認。結局お前一人か、信じられんな。」

一拍会った後セレンヘイズが言葉を続けた。

「そうだな。ホツとしているよ今は。」

「リンクス。彼に変わりお礼を申し上げますありがとうございます。でもこれで、ラインアークは終わりかもしれません。」

chapter 3 - 4 (後書き)

どうも、鈴木シキです。

リアルがいろいろと半端ない状況に追い込まれてどうも執筆する時間が消し飛んでいます。

それはそうとACEPが何時の間にやら発売され、AC?が再始動しましたね。バンナムか……。あそこから10日には某お祭りゲーが発売されるんだよな。

休日が、執筆時間がさらに消し飛んでゆく……。

あ、今回のストレイドは動画で見かけるAクラスランカーの機体がモデルになっております。実の所実際に動かす時間も取れなかったのですの……いろいろとすいません。

それでは2週間後を目標に執筆していますのでまたお会いしましょう。

ラインアークのホワイト・グリントは倒れ、カロードのランク1、オツツダルヴァも水中に没する

クレイドルで最も優れたリンクスたちの戦いはただ一人だけが生き残って終わり、

ラインアークはその最も重要な戦力を失った。クレイドルは安定期に入った。

誰もがそう考え、企業はきたるべき経済戦争の激化に備えはじめる。だが、まさにこのとき、濁り水はゆっくりと流れはじめていたのだ。

実質、運用可能なネクストが1機に減ったアスピナのネクストACガレージでランサーは見た事もない兵装を装着される愛機を見上げていた。

それを装着しているのはオーメルそしてインテリオルの開発チームでアスピナのメカニックであるザン達は安全な位置からその作業を目を輝かせながら眺めていた。

まあ、仕事に情熱を持てるのは良い事だろう。

フィミルを縦と横に4分割したような構造物にUの字型の構造物が突き刺さっている。それはVOBと同じような固定装置で機体に固定され見方によっては虫の翅の様にもみえなくない。

腕には左腕には肩のハードポイントを経由してパイプで繋がれたバズーカ並みのサイズがあるブレードが装着されている。

どうみてもこの時点で重量多過だ。動けるわけがない。渡された塗りつぶしばかりの資料を見る。

そもそも、何故こんな物をネクストに装備する必要がある。空も地上も海もノーマルACやMTそしてAFで十分足りるだろう。

「装着完了しました。明日には動作テストを始められます。」

「よし。壊さずに持ち帰ってください。ランク14のランサー。」
「善戦する。」

昼の休憩時間の間をここで過ごす軍関係者共に軍事区画の展望エリアから居住区画を見下ろしながら至る所が黒く塗りつぶされた資料に目を通す。同区画の下層部にあるここからはアスピナの街並みが一望できる。何度もここには足を運んだがこの街並みは殆ど変わっていない。区画整理された街並みとドームを支えるための巨大な支柱を兼ねた超高層ビル。至る所が緑化され秩序だった街並みを演出する。

ネクスト用試作フロートシステム、アヴァロン。独立したジェネレーターを持つアヴァロンはネクストの長時間にわたる滞空可能とし理論上大気圏外でも移動可能。

そのジェネレーターから直にコジマ粒子の供給を受ける事でトーラス社のコジマ兵器の様に使用するたびにPAを減衰させる事が無くなった実用化実験仕様コジマブレード、アラウン。

しばらく前にコジマブレードをリリースしたと思ったらもうこれか、まあコジマ粒子をブレードにする技術は昔からあったし時間の問題だと思っていたが意外と早い物だ。

どうも資料によるとこれの技術開発にはアンサラーの存在があるらしい。以前からニュースや公開されている資料で動きを見ていたがなるほど、兵器である以上使えば壊れるし定期的なメンテナンスが必要だがフロート技術はコジマ技術の発展だ。そんな場所ではへりなんて飛ばせないし、半端なMTは活動する事自体が不可能だろう。

もう面倒だから、既存の特殊ACにフロートを付けて飛ばしてしまえばその役割を一手に担えるという事らしい。合理的というかただの手抜きというか、まあ変な物作って採算が取れなくなるよりはよっぽどましだろう。

「久しぶりです。ランサーさん。」

「めずらしいなエヴァじゃないか。」

ふと口元が緩み笑顔になる。もう癖だ直しようが無い。あの日以降、軍事施設のあちこちで見かけるが何をしているのだろう。いくら母親が現役のオペレーターだったとしてもその職権でどうにかなるレベルを超えている。

「CUBEさん。残念でしたね。」

「相手が悪かったんだ。しょうがないさ。」

改まって口を開いた。

「ランサーさんは以前僕に『この平和は平和ではない。』なんて事を言ってくれましたよね。」

「ああ、それがどうかしたのか。」

エヴァが面白そうにケータイを取り出してこちらに画面を見せるとそこには『私たちは戦死したくない。』を命題とした反戦団体のHPが立ち上がった。シンプルで誰もが考えることだ、分かりやすく理解しやすい。それを証明するかのように既に万単位の間人間がこれに参加しているようだ。

「世の中にはこの戦争を是としている人が多すぎます。けど、自分が戦死したくはないんです。だったら、人間を使わなければいいんです。人はゲームと呼ぶかもしれませんが。」

エヴァは続けた。

「遠隔操作でおこなう無人機同士の陣取り合戦。これなら人も死にませんし、なにより今の経済戦争を持続させることができます。」

ただの逃げそうも思ったしそんなことでは何も解決はしないが企業は収益を得たい、一般人は死にたくないこれ以上は無理だという結論に達した。

それにこの子の言うように経済戦争は雇用を生み出し多くの人間が得をしている。それを蔑ないがしろにして反戦を叫んだ所で『バカどもの戯言』程度に流されてお終いだ。

「だがな、エヴァ。『人が死ななければどんな強力な兵器を使って

も問題ない。』その考えはこの星を焼くぞ。」

企業だ。国家とは違う、そんな利益にならないことはしないと思うが延長にあるのはそれだ。

「ところで、誰がこんなの立ちあげたんだ。」

エヴァは胸を張って答えた。

「僕です。見ていてくださいランサー。僕たちは母さんの様な人を出さずに済む平和な世界への第一歩を実現して見せます。」

そういうとエヴァは躓き返し去って行った。もしかしたら軍関係者にも呼び掛けてゆくつもりかもしれない。

「次の世代か……。ジュリアス、お前たちは彼らの意思にこええられるか？」

ふと、あの日ジュリアスが俺たちを反動勢力に誘った時の言葉を思い出し笑いながらそんな独り言をつぶやいた。

さて、そろそろ時間だ。これから例のフロートシステムのシミュレータ訓練を受けなければならない。

確かシミュレーション相手はトールラスの新兵器だったが、もしかしてアンサラアの周囲を任せる兵器の選定も兼ねているのだろうか。

chapter 3 - 5 (後書き)

どうも、3週連続土曜も出社の鈴木シキです。

本当にすまない。

今までは平日の車の中や、布団の中でネタを練ってほとんど土曜日に文にしていたのでかける暇がほとんど吹き飛んでしまっておりどうにも今まで通りの投稿は不可能という状態に陥ってしまいました。

ACVのスクリーンショットが次から次へと公開されていますね。常々思うんだがACEがいそがしくてこっちまで手が回っていません。つたんじゃ。

そうそう、ニコ道のタグの中に『押し寄せる無数のジャック・O』と言うタグがあるのですがこれが百科事典に登録されていた時は大笑いしました。僕も彼らの様な物語を描きたいものです。

それではまた。今度の更新は何時になるか分かりませんが月1の更新は何としても継続させていきますので今後ともよろしくお願います。

さて、そろそろ時間だ。これから例のフロートシステムのシュミレータ訓練を受けなければならない。

確かシュミュレーション相手はトーラスの新兵器だったが、もしかしてアンサラーの周囲を任せる兵器の選定も兼ねているのだろうか。

シュミュレーターの捜査室の隣、ブリーフィングルームで真っ白な有機ELディスプレイに幾つもの図面が映し出されていた。しかしそれは外装だけで内装は確認できない。

新型のナノマシンが入った点滴を受けながら手に持つ冊子に目を通すと同様の図面や操作方法が書き込まれており、必要な資料は2つある事になる。

「いいですか。ランク、14今回の訓練は実戦テストにおけるフロートの運用をより円滑に行うための訓練です。その為にフロート起動時に想定される精神負荷を模した物を貴方のAMSにかけます。

さらに言えば、我々のテストパイロットではなく貴方を選んだのはソプレロの精神負荷に耐えられる貴方ならこのフロートの精神負荷にも耐えられると判断したためです。」

「そんな物を量産したって他のリンクスは使えないんじゃないか。」

「問題ありません。これは本来無人機に搭載する物です。」

「あつぞ。」

単純にAMS適性の高い者にやらせればいい物を、いやそういった人間は希少だから俺が選定されたのか。

「今日はまず、貴方の脳波をAMSをかえして読み取りフロートの動作に必要なプログラムを作ります。シュミュレーターに乗り込んだら我々の指示に従ってイメージを行ってください。」

やはり、既存のブースター類とは勝手が違うのか。

「了解した。」

「では、我々の用意した対Gを着込んでシミュレーターに乗り込んでください。」

シミュレーターの中は共通規格で量産された物とはレイアウトが変更されていた。基本的な所は同じだがタッチパネル式のキーボードや今まで拘束具に存在しなかった対Gスーツのインナーに縫い付けられている電極からの情報を読み取るための端子まで付いている。

その代わりにキノコのような形をした操縦桿もペダルもない。先ほどの講習で習った通りそれらを不要にするシステムが組み込まれているらしい。

「いいですか。このシステムは先ほど話したように実験的に人の筋肉に流れる電気信号を拾ってそれを反映する事で操縦桿やペダルを廃する事に成功しています。その分AMSに集中できる作りになっていますが何分勝手が違います。まずはシステムに慣れて頂きそのうえでフロートシステムの訓練を開始します。宜しいですね。」

「了解だ。」

まどろっこしい訓練が始まる。いくらか疑問があるがこれも鍛錬だと思つて頑張ろう。それに今のままではあいつらには遠く及ばないのも事実なのだから。

こんな事になったのはホワイト・グリントとステイシスが海の藻屑と消えて数週間後の事、ホワイト・グリントという現行最強のネクストが失われた事で企業は勢いづいただろう。

早速実験段階だったAC用フロートを試験段階にまでもっていき形にしてしまった。まあそれまでは良かったようのだが。アスピナ機関に一通のメールが来た事で俺には関係ないと思つていた事が重大な事項に変わった。

「

『アスピナ機関』様へ

アスピナ機関にお願いがあります。

我々が現在試験中のフロートシステムの試験にあなた方の実験個体をテストパイロットとして貸していただきたいのです。

つきましては前任者による試験で得たデータを参考として添付いたしますのでどうかご一考いただきたく存じます。

『企業連兵器技術研究所』

俺も見せてもらったが様は自分たちのテストパイロットは精神負荷に耐えられず潰れたらしい。そこでそんなソブレロの精神負荷に耐えたことがある俺に白羽の矢がたつたのだ。全く、少しは人員を大切にしたらどうなんだ。

そして、実機訓練の日がやってきた。

G A領は企業連に属する射爆場にあまりの超重量ゆえ立つことから困難であったために脚部をA A L I Y A Hの物に変更し、暫定的にオーメルのパルスガン通称『手持ち花火』を追加で装備したピラムがその時を待っていた。

今回はあくまでフロートのテストであるため内装は変更されていないが細かな部分が最新モデルに変更され幾分か快適になった。もう聞きなれたが機体がギシギシと悲鳴を上げている。

「リンクス、今回の目標を再確認します。」

H M Dにこのあたりに地形を模したC Gが表示される。

かつては観光名所として名を連ねたここも国家統治体制の崩壊と共にあつという間に寂れ、周囲から風に乗って運ばれてきた砂は谷底に溜まり川を枯らしそれに伴い緑が失われ赤い峡谷が広がるばかり、砂に変えるのを待つばかりふと空を見上げると遙か遠方、射爆

場に設定された飛行禁止空域の外にクレイドルの編隊が確認できた。

あそこで暮らす彼らはこのあたりを観光していた人々の子孫に当たる人々だろうか。

そこにはいくつもの円が並び飛行コースを現していた。道中グシャグシャに歪んだルートがあるがここでは、ACでは不可能ありMTがいまだに現役の兵器として活動させる要因の一つである高機動飛行をするプランだ。道中にある赤い点は破壊目標となるダミー、そこに線で撃破方法が記入されている。

「今回の訓練では、フロートシステムの実機運転を行うとともにシステムがネクストの機動力にどのような影響を受けるか、それを検証する事が目的です。また、このテストは企業の経営部や出資者が視聴しているため成功させれば貴方の覚えを良くする機会にもなります。ご健闘を」

フロートが起動し背中中で蛇でもものたうちまわるような感覚と異様な異物感に飲まれる。まるで焼けた剣でかき回されるような感覚だ。だが、ソブレロに比べたらどうという事は無いこの位なら十分に耐えられる。

膨大な量のゴジマ粒子がフロートから放出されやがて上へと向かう力を発生させる。

「脚部重量センサーの値の減少を確認50…40…30…」

機体がゆっくりと持ち上がり始めた。それに伴い金属がきしむ音も無くなつてゆく。

「20…10…0、重量センサーマイナス値に突入、機体離陸します。」

足が地面から離れ、それと同時にかき回される感覚が幾本にも増える。

「リンクス、発汗量が異常な値を示しています。大丈夫ですか。」

「これぐらいなら問題ない。訓練の実行を申請、標的の軌道を要求する。」

銛^{もり}で突かれた魚の気分だ。しかし、ブースターで飛ぶときは全く違うそれが当たり前だと言わんばかりの静かな浮遊感、何処までも飛んでゆけるのではないかとすら思えてしまう。

「訓練開始、ランサー気をつけて。」

chapter 3 - 6 (後書き)

どうも、お久しぶり鈴木シキです。

ようやく更新できました。そして4月分の用意が全くできていないという醜態を晒し中。

最もプロットはあるのですが。しかし一カ月間悩みに悩んだおかげで、ようやく人に見せられる程度にはなったかな。なんて思っていますけどどうなんでしょうね（苦笑）

あつと、オリ兵装の詳細は後日、活動報告の方で詳しく解説していきますと思いますのでよろしく願います。

さて、4月分を執筆する作業に入るか。

機体が完全に地面から離れ普段とは明らかに違う浮遊感に包まれる。

「ランサー、第一目標への移動を開始してください。」

言葉が出なかった。AMSが発生させる幻痛で声を出そうとしても声になるだけの息を吐く事が出来ていない。

「ランサー？、ランサー！！返事を！！」

深呼吸をする。もう一度する。もう一回する。

「了解した。第一目標への移動を開始そのまま訓練を実行スル。」

やばい、最後の方まで息が続かず声がかすれてしまった。操縦桿を操作し機体を旋回させ移動を開始する。まるで氷の上にいるような滑らかな感覚だ。これがフロートの機能なのだろうか。

「第一目標、ハイマニューバ訓練開始してください。」

HMDに道が三角形の枠の形で表示される。まるでどぐるを巻いた蛇だ。機体を横に傾け急旋回しつつ何周も同じ所を回ってそのまま急上昇をかけ音速域突入する雲ひとつない空をあっという間に駆け上がり高度4000mに到達する。そこから一回転して地面に向けて一気に降下を開始する。

計器が踊り狂い初めて受けるGの中、ふと笑んでいる事に気づく。これだけ振り回されて当たり前のように機体に動作できているフロートにも驚きだが、自分が思い描いたように機体が空を駆ける感覚は自分が空を飛んでいる錯覚すら与える。精神負荷から逃れるために分泌されているアドレナリンがそうさせるのだろうか。

純粹に『楽しい』のだ。

地面まであと数百mの所でQB後ろ方向のQBを噴射させて縦方向のQTを決める。ほとんど無いような旋回半径で地面すれすれを飛行し再び同じような軌道を描く。

「リンクス、フロートへの負荷の検証に必要なデータは十分得ら

れました。続いて第二目標へ移動を開始してください。・・・?。」
「そんな必要はありません。」

心地よいフルートの音色の様な透き通った清流の様な声が無線に割り込んできた。どこかで聞いたことがある声だが誰だ。

「エリア内のドローンの反応が消滅、目標地点にネクスト反応。イレギュラー?そんな何時の間に、今の武装では危険です。退避を進言しテストの中断を要請します。」

こちらの光学系もネクストと瞬く間に撃破されてゆくドローンの姿を捉えた。鎧袖一触とはこういう事の事を言うのだろう。空を飛ぶ物はミサイルでたたき落とされ、近づいて来るものはブレードで一閃され、離れた物は寸分の狂いのない射撃精度で行動不能に追い込まれる。

フレームはローゼンタールカラーのHOGIREオーギルの様だがどうも練習機の様に見える。武装もローゼンタールの標準的な武装つまり、ローゼンの改良ライフル(MR-R100R)、ローゼンのブレード(EB-R500)、散布ミサイル(MP-O200)にチェーガン(CG-R500)、どんな相手でもそれなりの戦果をあげられる汎用性に富んだ武装だ。

「そんな心配もいりません・・・。」

「誰ですか。今は正式な手続きを踏んだ公開訓練の最中です。干渉されるようなら、きちんと手続きを踏んでください。」

「手続きなら踏みました。出資者権限と開発関係者の権限で・・・。」

出資者となると、どこかの財閥の関係者か。それにしてもどこか空白な喋り方をする。怖気づかないあたり実戦経験もあるだろうか。

「こちらランサー、管制室聞こえるか。訓練の続行の是非を確認したい。」

交戦するのは簡単だ。だが、相手の正体がわからない以上下手な事をして責任問題になったら困るのはクライアントだ。

しばらくの沈黙の後、男性の声で通信が入ってきた。

「こちら管制塔、同ネクストを訓練モードで撃破せよ。」

ブレードを起動させる。ブレード内に格納されていた整波装置がせり出しコジマ粒子の充填を開始する。

「御好意感謝します。さあ、その兵器で私を撃破しその優等性を証明してください・・・。」

ドローンの残骸が転がる大地からオーギルが飛び立った。相手は練習機に武装を施した物のようだ。フレームそのものは初期に量産された物を使っているだろうから性能は断然劣るだろう。しかし、ドローンとはいえ今の規格に合わせて量産されているそれをこのリンクスは補って見せたのだ。

こいつは何者だ。フロートを活用し亜音速域に突入し一気に接近する。タンクのOBに匹敵する速度での接近だ。パルスガンを連射しながらブレードの射程にまで間合いを詰めた。被弾を気に留める様子は見えない。肝が据わっているのか余程の自信があるのか。

「流石に早いですね。ですが・・・。」

オーギルがMBを停止させ、後ろ方向のQBと脚部のブースターを使い空中であおむけの状態になる。一度ついてしまった加速はそう簡単に止まる物ではない。今さっきまでオーギルの居た位置をそのままの速度で通り過ぎるとその場で旋回すると目の前にはOBを吹かして猛烈な勢いで追撃を行うオーギルの姿があった。

「コいつ。」

「スピードに頼り過ぎです。」

駄目だやはり、上手く口が動かせない。だが、これでの射程内。

「イト太刀で終わらせてもらう。」

己を鼓舞するように自己暗示じみた叫び声をあげてブレードを発動させる。

ブレードからまるで噴水のように噴き出すようコジマ粒子が放出されるに霽の様なそれが高出力の整波装置によって装甲を文字通り破壊するほどの黄緑色の刀身となる。

ブレードを横薙ぎに振りかぶり、切り捨てにかかる。しかし、オ

ーギルは脚部と胸部のブースターの出力を巧みに調節し、逆さまになるとブレードを空振りさせ慣性のまま後ろに飛び去って行く。クルビット。ドックファイトを行う時に航空兵器が稀に行う機動に似ている。

「!!!」

となれば次の敵の行動はただ一つ、がら空きの背中に砲弾を叩きこむ事。だが、ネクストには本来あのような軌道を行いなお且つ、その状態を維持する機能は存在しない。よって反撃する事は出来てもその後はただの的だ。

QTを行うといまだに展開され続けているブレードを振りかぶりに掛った。案の定オーギルは慣性のままその姿勢でいる。オーギルはその姿勢のままの放物線を描き落下しつつチェーガンとライフルを一緒に放ち反撃してきた。しかしこちらはには自由に空を飛ぶ兵装フロートがある。

イメージする。

相手を突き刺し、貫くイメージ。

イメージする。

圧倒的な威力を秘めたその粒子の刃で敵を突き刺すイメージ。

「貫け!!!」

口には出さず、そう強く念じた。

フロートがその命令に従い前方向の推進力を発生させブースター類もそれに応じるように動作し爆発的な加速を発生させる。

音速域の突撃、CGで再現された刃がPAに振れた瞬間その刀身を作り上げるための整波装置が生み出す力場によってPAを形成するコジマ粒子が刀身に取り込まれ、その刀身がその青い胸部装甲に振れ塗装を焼いた。

chapter 3 - 7 (後書き)

どうも、更新ペースが完全に崩壊した鈴木シキです。

なんか、原発のニユースを耳にするたびコジマ粒子垂れ流しの兵器のネタを考えている事に胸を痛むことがたびたびある今日この頃。さて、シナリオは主人公が老人たちの陰謀に巻き込まれる所が本格的に始まりました。

はい、この主人公は企業連サイドで話が進んでいきます。

そして、オーギルに乗っているのは勿論あの子です。

主人公はこのまま、ジョシユア・オブライエンと同じ道を行ってしまうのか。それをもあがき、逆に『老人たちの過去』にたどり着き、隠された記録を目にするのか。そして、それを歴史にすることはできるのか。

そんな話を、書けたらいいな。

後、少し詳しい人は気付いていると思いますが今回のオリAC周りの名前はケルト神話から拝借させてもらっています。

「こんな物ですか・・・。」

彼女は装甲を焦がされる事を知りながら淡々とその口に述べた。

粒子の刃が霧散しオーギルは肩のSBと胸部のBBの左側だけを器用に噴射させ逆さまのままQ.Tを行うと音速域の突撃をまるで蝶の舞うようにひらりと回避する。

「くそつたれ！」

口には出さず、そう毒づいた。コジマブレードはレーザーブレードとは根本的に違う。レーザーブレードはその名の通りレーザーを剣の様に射出し続ける事で刀身を形成している。よってブレードの威力は発振機の性能に依存し高出力のレーザーを短時間で形成するために持続性を犠牲にしているのが一般的だ。

しかし、コジマブレードは膨大な量のコジマ粒子を強力な整波装置で剣の形にする事で作り上げる超々高密度のPAよって装甲を“削り取る”兵器だ。

展開時間はブレードに溜めこまれたENに依存し、それゆえに消費するコジマ粒子の量を抑える意味でも長時間の展開を行えるように設計されている。そのENが切れれば見ての通りだ。再びコジマ粒子とENが充填されるまでの間、一切の動作が不可能になる。

後ろを見ようと思うとHMDの片隅で脚部のブースターの出力を器用に調整して宙返りするかのよう姿勢を元に戻しているオーギルの姿が確認できた。

「地対空ミサイル並みの機動力を与えられた試作対ACミサイルの一斉射です。かわしてみてください。」

どこか樽の様に見えるミサイルポットからミサイルが発射される。煙の帯を引きながら一斉に飛来するミサイルは川を遡上する魚の様にもみえる。そう言いながらオーギルは消費したENを回復するためだろうか降下を始めている。

フロートをつル稼働させて音速域を維持しつつミサイル群を引き離しに掛るがミサイルの方が圧倒的に早いこれだけ早いとネクスト同士の撃ちあいには向きそうにないがなるほど、こいつを装備した機体や空戦MTを相手にした時これほど頼りがいのある物は無いだろう。

だったら、相応の回避運動を行うだけの事。思いつきりピッチアップを行いそのままの速度を維持しつつ宙返りを行うとそれにミサイルは大きく膨らんだ弾道を描きながら宙を飛び交う鳥の群れのごとく一斉に進路を変えそうしてなお獲物に食らいつく鮫の様にこちらへ食らいついて来る。

ならばと今度は空中へと躍り出たスノーボーダーが描く軌道の様な動きをしながらまっすぐに地面に急降下する。ミサイルはこれほど動き回ってなおこちらを追尾してくる。レーザー誘導方式のミサイルだろうか。地面ぎりぎりまで降下すると今度はQBを用いて一気に減速、その余剰推進力で機体を起き上がらせそのまま、オーギルへと接近する。

次々と旋回を開始するミサイルだが、こちらには減速する機能があるしかし向こうには無い。ミサイル群は地面に激突し小爆発を連続して発生させる。

「なるほど、従来のACには不可能な機動ですね。」
オーギルが怖気づく様子はなかった。それどころかこちらが接近を開始したと見るや後進しながらミサイルとライフで迎撃してきたミサイルをQBで回避しライフルは左右に機体を振る事で被弾を最小限にとどめがやはり音速域での被弾は痛い。風によって圧縮され黄緑色に輝く正面のPAを貫通してほとんどそのままの状態で大きな傷を作って装甲にはじき返される。

コジマブレードはまだ起動できる状態に無い。速度を調整しつつ接近し周囲を高速で旋回しながらパルスガンを撃つがPAが減衰しレーザーが装甲を焼こうとも避ける様子はない。耐えているようにも見えるあのリンクスはこの“手持ち花火”ではどうやっても古い

機体とはいえオーギルはあと一步落ちない事を知っているようだ。

「演習の長期化に備えてもう一機乗せておいて正解だった。」

口には出せなかった。パルスガンを撃ち切るとすぐさまcoreに格納させていた予備のパルスガンを装備させる。

コジマブレードが発動できるようになるまであと10秒ほどか。

オーギルが動いた。QBを丁度こちらが正面に回り込む形になるタイミングで発動させるとその勢いをそのままにブレードを振るった。こちらはオーギルが振るうブレードの有効射程に自ら飛び込む形になり避け切れずに装甲を一字に焼かれる。QBで距離を取るのがもう遅い。すぐさま追撃のライフルとミサイルが飛んでくる。

「なにをのんびりしているんですか。その背に背負った物のスペックはこの程度ではないでしょう。コジマブレードはどうしました。もう使用出来る状態でしょ。」

さつきは攻撃を受けていてくれたがこいつが本気になればこっちの攻撃など殆ど当たらないだろう。いいように踊らされている気がするが、粗製なりの意地を見せてやる。

コジマブレードを発動させる。根元から伸びていくように構築される必殺の威力を秘めた黄緑色の刃、もうまっすぐは突撃してやらない。

フロートに急上昇を命じ、オーギルの頭上を取るネクストの頭上方向には生憎と戦闘用のカメラなど存在しない必要が無いからだ。オーギルはカメラにこちらを捉えるため後進を開始する。

しかし、純粋な移動速度ではこちらが上だ。元々、その為につくられた装備なのだから。そして頭と正面を抑え込む位置に一気に急降下を行い袈裟切りにブレードを振り下ろした。しかし、オーギルには予測されていたのだらうあと少しの所で後方へのQBで回避されるだがこれでいい。この密着状態のまま突きを放てば左右へのQBを発動させる事はできないだろう。

「墜ちろ！」

放たれた突きにオーギルに黄緑色の刀身が迫る。しかしオーギル

のブレードを装備された左腕がこちらに向いていることに気付けていなかった。

ブレードがオーギルの装甲を焼き衝突したコジマ粒子が粒子レベルで装甲を破壊しオーギルのレーザーブレードが人間で言う所の脇腹に装甲に穴を開けた。だがその程度ではネクストは止まらない。コジマブレードはcoreを貫き、コックピットがある位置を大穴に変えた。

「ランサーそれまでです。」

HMDから損傷を示す表示が消えCGによって再現されていたオーギルの損傷も一瞬のノイズの後に綺麗に消えた。一呼吸あってオーギルの方から通信が入る。

「見事でした。私でもそれを使いこなすことは不可能でしょう。」

フロートを停止させ着地する。とたんに機体がギシギシと悲鳴を上げ背中痛みも若干治まりはしたが対Gスーツの内側は脂汗で蒸している。さっきまで我慢していたが正直限界だ。

「ありがとうございます。とりあえずガレージで休憩させていたいただきたいのですが。」

そして、ガレージに入り機体をロックした所から俺の記憶は綺麗に無い。気がついたときには医務室で寝かされていたのだった。

chapter 3 - 8 (後書き)

どうも、GWに更新リズムを取り戻そうとしたもののどうにもならなかった鈴木シキです。

いやー、ACVの実機プレイ映像がついに配信されましたね。

とりあえず一言。

「この変態どもめ!!!」(最上級のほめ言葉)

こうなるとOWがいかなるものになるかなおさら楽しみになってまいります。

物語はクレイドルは安定期に入ったと判断した企業がネクストAからAFおよび周辺兵器群を効果的に運用システム作りのために試行錯誤し始めている様子を自己解釈で描いています。

主人公が片足突っ込んでるのは何度か書いてるようにアンサーの周辺で活動するための兵器開発に伴う実用性試験です。

∴ ACは差別化のためにも兵器の動きしかできないのがきついです。そして、1万文字ぐらいアクションなしで物語を描けるようになれはずっとましな物語になるんだろうな。

目を覚ますと清潔感あふれる白い天井が見えた。医務室独特の消毒液の臭いが鼻を抜けてここが何処だか教えてくれる。

「えーと、どうしてここにいるんだ。」

演習所の医務室だけあってそれほど広くはなくベットも2人分しかなく、医師もおらず必要最小限の医療器具だけが置かれている。居るのは俺とニーナだけだ。

「ハンガーに機体をロツクした途端に気を失って眠ってしまった。ました。」

「ああ、そういうこと。」

苦笑をこぼしながら良く我慢していた物だとおもった。ソブレロの精神負荷に堪えられる俺だからどうにかなっていたものの異常に高い適性を持っているのならともかく他のリンクスだったら潰れて当然だ。

「単純な疲労の様なのでしばらくここで安静にしてください。水を置いておきますね。」

「ありがとう。そういえばあのオーギルに乗っていたリンクスに挨拶をしておきたいだがどうしているんだ？」

「今は記者の取材を受けている所です。お呼びしますか？」

「状況に任せるよ。」

今の落ち着いた状態ならわかる若い女性であの空白なしゃべり方し尚且つ高いAMS適性と戦闘技術を持つリンクスは一人しかない。カリード、ランク2。

「失礼します。」

例の声が聞こえた。こんな早く来るとは意外だ。深呼吸の後、口を開いた。

「どうぞ、お気になさらずに。」

ドアが開き、数人の記者とともに彼女が入ってきた。ニーナは完

全に気圧されてあとから肩身の狭そうに入ってきた。

若い、それが彼女への第一印象だった。

「横になったままで失礼。お初にお目にかかります。コロニアスピナのリンクス、ランサーです。」

今、憧れの領域にいるリンクスの一人が目の前にいる。オッツ・ダルヴァがM I Aした今、公には彼女が最強のリンクスとなる。そうどんな形であれ『最強のリンクス』戦う事ができたのだ。

強さに憧れる者としては胸が熱くならないわけがない。

「はじめまして、ランサー。B F Fのリリウム・ウォルコットです。」

「すかさずニーナがそこにあつた医師の椅子を彼女の背後に移動させ、軽く払うと自らのハンカチを座席の上に置くと彼女は恭しく一礼しそこに座り握手を求めてきた。」

感慨もひとしおに握手をすると記者が写真を撮った。

「それにしても、本当に驚かされました。『アヴァロン』をあそこまで使いこなせるリンクスは貴方を置いて他に居ないでしょう。」

「!?!。いえいえ、私など……。」

「事実です。私も以前あれを使用したことがありますから。」

彼女もフロートを使用したことがある。その言葉にある種の恐怖を感じた。自分は度重なる訓練の結果、ようやく人前に出せるようになったのだ。彼女ほどのAMS適性と実力があるリンクスがあれを使用したとき一体どれほど動作が可能となるだろう。

「もつとも、10分もしない間に危険と判断されて降ろされました。あなたなら、かの実験機に搭乗できるかもしれません。」

「実験機?。SOBREROのような物ですか?」

「あれとは違います。アンサラー計画はご存じですね。」

「知っています。このフロートも空中で滞空し続けるアンサラーの艦載機に必要なものと聞いています。となると、実験機とは例の無人A Cのことですか?。」

「ええ、現段階では残念ながら無人A Cは有人機ほど器用に動くこ

とはできません。しかし、人間の動きを模様することはできます。新型AMSの投与も受けているはず。それが定着すれば、かの実験機を自由に動かせるようになるでしょう。」

フロートについては承知の上でここにいるのだが、新型ネクストを動かせるのには興味をそられる。要するにテストパイロットという名目のスタントマンをやらせようとしているらしい。

さて、これは出世の好機なのかパンドラの箱なのかどっちだろうか。

『ヴウー……！……！……！』

突如として、敵の接近を知らせるアラートが鳴り始めた。リリウムはすぐさま躓き返し、医務室を飛び出してゆく。彼女も訓練されたリンクスだということだ。

「管制室何事ですか。」

ニーナもインカムを頭に付け状況の確認を始めた。完全に置いてきぼりを食らった記者団は戸惑っているが一人が部屋から出て行ったのを皮切りに皆がいつせいに施設の外へ向かう方向に走り出した。普通シエルターに逃げるものだが流石はジャーナリストといったところか。

「待って、何かの冗談では……。はい、目が覚めたばかりです。」

「さて、俺も……。」

ニーナが「待ってください！」あわてて制止した。

「この状態で機体乗るつもりはないさ。それに俺が行ったって足手まといになる。」

「でしたらどこへ行くつもりですか。」

ふと、微笑をこぼしながら口を開いた。

「シエルターしかないだろ。ザン達にも退避準備をお願いしておいてくれ。仕事以外で撃たれるのはごめんだ。」

ピンポンパンポン 突如として場違いなアナウンスコールアラートに割り込んで鳴り響く。医務室はなんと morphology がたい微妙な空気に包まれ放送が始まった。

「ああー。これで繋がっているのかな？」

「はい、ばっちりです。」

「案外このセキルティーもぬるいな。こつもたやすく通信回線をジャックできるとは。」

「主任、今放送中です。」

「いったい、どこの馬鹿どもだ。軍用の回線をジャックするというのはかなりのリスクを伴うことくらい知っているだろうに。」

「それでは皆さん。西の空をご覧ください。」

「西の空？すまないが見てもらえないか。」

「わかりました。」

「ニーナが窓をあけ外をのぞくと「冗談でしょ？」と叫んだ。

「何があつた？」

「ソルディオス砲が6機、空に浮いています。」

「へ？」

ソルディオス砲といえば旧G A Eつまりトーラスの前身となった企業が開発した史上最凶のコジマ兵器で多くのコロニーを焦土に変え、人が住めない環境にした事は有名な話だ。当時は最強と名高い『アナトリアの傭兵』とおれの憧れであり目標とする人物のひとりであるジョシユア・オブライエンの二人係でこれを撃破したという。そのソルディオス砲が空に浮いている冗談ではない。

「どうだ！この機動力！」

「どうした？という間にニーナは失笑を浮かべながら「連続でQ Bを使っています。」と答えた。

「これは、ギャグか？」

「さらに！アサルト・アーマー！」

「はるか遠方で爆発音がした。」

「そしてこれが！新生ソルディオス砲の力だ。」

「今度はビームの発射音と着弾音が聞こえた。」

「ランサー、今しがた3秒ほどでチャージを完了したソルディオス砲が発射されました。」

もつとつにでもなれ。

どうやら俺は、実験機のテストパイロットをする前にあれの相手をする残業をしなければならぬらしい。

そう思うとおれは異様な疲れを感じもつと眠りしておくことにした。

後で知ったことだが、例の演習は大成功だったらしい。

俺はそんなことしたつもりはないのだがACには不可能とされていた動きが見れたことに観客は大いに感銘を受けたらしくアンサラー関係の投資はさらに加速しているらしい。

乱入してきたソルディオス・オービットについてはトーラスの一部が無断で行ったものようだったが現場にいた多くの投資家や企業上層部にその存在を強く印象付け“トーラスにソルディオスあり”とコジマ技術の高さを改めて示した。

こんなことになってアンサラーにもしものことがあったらどうなるのやら。

chapter 3 - 9 (後書き)

どうも、鈴木シキです。2か月ぶりか、お久しぶりです。
輪番休暇が始まった今日この頃。

ACVのクローズド テストの生放送がありましたね。近作は対AC戦がよりシビアになったようでよりやりこみがいありそうです。さて、対ソルディオス・オービット戦はあまりにワンパターン化したので断念したのですが・・・さて、今度はORCA旅団決起です。

設定どおり全員トップクラスの实力者なのでそこを描きつつ企業の意思つまり、『砂漠を見渡したsurvey the desert』答えを表現できたらなと思っています。

それでは皆さん絶対に完結させますので気長にお待ちいただけるとありがたいです。

警報音が鳴り響き、機体が限界に近付いていることを警告するだが逃げることはできない。逃げられない。

こっちは必死に目標を射程内に収めようと立ち回るのだが完全にもてあそばれほとんど何もできていない。

「やっぱり、強い。あ。」

HMDにyou lostの文字が表示され撃墜されたことを伝えていている。これでかれこれ27敗目、戦闘データから本人に可能な限り似せて組み上げられたAIで動くシミュレーター内の敵は角張った外見が特徴のBFFフレーム装備はレーザーライフルに突撃ライフル、攪乱用ミサイルにレーダーとBFFの物のみを使用したアンサンプル、言うまでもない。

現ランク2、リリアム・ウォルコットの搭乗機『アンビエント』だ。この前のプレゼンテーションのあと暇つぶしにでもと誘った模擬戦で彼女は型落ちした訓練機に搭乗し、こっちは装備を持ち込んでいた強化マシンガン二丁に積み替えて挑んだのだがまあ結果は言うまでもない。

ぼろ負けした。

まあ、分かっていたことでこちらも全力で挑んで負けたのだから悔いはない。その上でこうしてオフの日の日課となったシミュレーター室にこもって何とか格上のリンクスたちに立ち向かえるように訓練を続けている。

まあ、この頃は新型AMSのテストだの実験機の訓練だのと戦場しよくばに出るよりアスピナ機関の実験室に居ることのほうが多くてどうにも外へ出たくてしょうがない。

そういえば、二人に出会ったのも戦場へ飛び出してみたくてしょうがなかったリンクス候補生の時だったか。

「さて、本日の訓練メニューをこなしますか。ニーナ、休憩終わり。」

実験機の訓練を開始する。」

「リンクス、あまり無理をしないでください。」

そう苦笑を浮かべながら通信が聞こえるとHMDの表示が変わった。まず現行機と比較してはるかに見やすい、すっかりは見慣れたがやはり違う。

つづけて、機体の状況が表示されるこれはシミュレーションだ。オールグリーン問題なし、しかし現行機と比較してある一点を除いて一回りほど性能がいい、つづけて装備の情報が表示された。

すべて、将来的な無人化を想定しているためAIの性能を生かす方向で作り上げられた装備で性能がはつきりと分かれている。

コジマブレードにフロート、メインの装備とすべく大型化された『手持ち花火』ことEG-O703、アンサラーに搭載予定のコジマキャノンを応用した指向性AAアンブ。

こんなものにアンサラーのキルゾーンの中で集団で襲われたものならたとえ上位ランカーでもひとたまりもないだろう。

アンサラーは間違いなく歴史に残るAFになるだろう。

7月

多くにとつて、それは突然に起きた。

正体不明の複数のネクスト機によるアルテリア施設の同時襲撃。

そのほとんどは成功し、クレイドルは依って立つエネルギー基盤を大きく揺るがされた。

そして、ORCA旅団と、旅団長マクシミリアン・テルミドールの名で、ごく短い声明が、世界に発信される。

“To Nobles・Welcome to the Earth”

それは、全ての空に住む人々への、明確な宣戦であった。

企業は、安全な経済戦争を放り出し、狂気の反動勢力に対することを余儀なくされ、

人々は、覚束ない足元にはじめて気づいたかのようにそれを恐怖するしかなかった。

企業連より緊急の依頼です。

アフリカ大陸屈指の規模を誇るアルテリア・オルカリアが未確認機による襲撃を受けました。このアルテリアは地下に巨大な地熱発電所を有し、他のアルテリアへの電力供給も行っているクレイドルの要所です。

ここを襲撃するということクレイドルに住む幾億の人々の命脅かす絶対的な悪行です。

このアルテリア常備軍が駐在していますが先ほどの連絡で危機的な状況に陥っているようです。あなたはアフリカを拠点とするほかのネクストと共に未確認機の排除に当たってもらいます。

距離があるのは承知の上ですが、正義のためあなたの力を貸してください。

アルテリア・オルカリア。

そう呼ばれているこのエリアは国家統治体制の黄金期にアフリカで世界最初の地熱発電所が設置された場所だ。ここはここがケニアと呼ばれていた頃から大規模な地熱発電所群が建造されていたのだが、膨大な地下水とマグマに目をつけた企業によって大規模な地熱発電プラントに改造され複数の蒸気噴出口が絶えず白煙を上げ、山という山で送電機が黄緑色の光を放つ無残な姿をさらしていた。

だが今はさらに無残だ。そこを守っていた対空砲やミサイル砲台は爆散し、MTやノーマルは大穴を開けたスクラップとなり果て、車両をはじめとする通常兵器群は焼け焦げスス塗れになり、果敢に立ち向かったパワードスーツや歩兵はPAの副産物である高熱によ

って黒こげの何かになり果てていた。

そして、アフリカを拠点としていたため、いち早く駆けつけることができたのであるうかロード？23バツカニアがcoreに大穴を開け推進剤に引火したのか背中のおBが吹き飛び大破していた。

「半日か。アスピナからの距離を考えれば十分な早さだな。」

輸送機から降下したピラムにこの時に備えて装備を整えた搭乗する俺はそんな様子を眼下に見据えながら、敵機を視認し笑みを浮かべた。

やや、赤みがかかった白に各所に配色された紫色はよく映えている。

機体は機動力に重点を置いた軽2脚に試作ハイレーザーに機動戦用レーザーライフル、レールキャノンとMPミサイル、明らかに重量多可がそれすら感じさせない動きはリンクスの技術力の高さを証明していた。忘れようもない、幾度もの模擬戦で敗北を重ねてきた目標である人物の一人の搭乗機アステリズム。

「ジュリアス・エメリー。カーパルスはいいのか？」

そういうと左腕に装備させたマシンガンの銃口を向けた。正面からやっても確実に負ける今の実力ではそれこそかすり傷すら与えられずにそこで大破しているバツカニアの二の舞をさらすことになるだろう。

こちらだって、そのつもりで装備を変更してきたのだ。普段は背中に2機のパルスキャノンを積んでいるが今は軽プラズマキャノンとアルドラのグレネードに変更している。

命中精度はともかく中距離での射撃戦における瞬間火力では指数計算上こちらが上回っている。

あれから様々な武装を実戦で使用し、何度も何度もシミュレーターのジュリアスに撃墜されてまぐれ勝ちぐらいはできるようになった。実力差は天と地、「機体性能に頼りすぎ」と笑われようがこれに掛けるしかない。

「あちらには私などは羽虫のようにあしらわれる実力をもったリン

クスが向かっている。なに、ジェラルドは大丈夫だろうさ。」

「そうかい！」

2機の軽量2脚がQBを発動させ空中へと躍り出ると機動戦を開始する。

中距離戦をすれば中二脚に撃ち負け、正面から撃ち合えばタンクに押し切られ、地上を駆け回れば四脚に逃げ切られて、空中での滞空能力では逆二脚に水をあけられる。

軽二脚に出来るのは機動力に任せて可能な限り短時間で相手を押し切ることだけ、二機のネクストは手段は違えど原則としてやることは同じ、空中へ躍り出た二機の間にはプラズマやミサイル、レーザーやグレネードがさながら流星群のように飛び交う。

多少の被弾など気にせず、ピラムをプラズマとグレネードの有効射程距離に押し込むこの際気をつけたいのはアステリズム一番のダメージ源であるハイレーザーだ。あれを引っ込めている間はいきなり撃墜されるということはない。

回り込まれないギリギリの所まで接近しグレネードを撃った。ジュリアスは難なくこれを回避したところ確認するとQBによる横移動が終了するその直前でプラズマキャノンを発射する。

当たる。そう確信した。しかしジュリアスは逆方向にQBを行うとこれを容易く回避、レールキャノンを回避不可能な距離で発射、至近距離で発射された砲弾はPAを貫通しこちらの装甲に深々とめり込み砕け散った。

「さすがに本物にはあたらないか。」

ジュリアスがハイレーザーを起動させこちらに砲門を向けた。

「！」

そこから撃ち出されるのは最大の破壊力を秘めた極光、QB、いや先ほどまでの飛行とプラズマキャノンの消費でEN残量が残りわずか使えるとしてもあと一回。

レーザー、キャノン、どっちが来る。

chapter 3 - 10 (後書き)

うん、土日休みって何おいしいの？なんて状況になっている鈴木シキです。

なんか更新が不規則なうえ質が落ちている気がするでしょうがないです。さて物語はORCAが本格的に動き始め時代は大きく動きま

す。
緩やかに消費されてきた物資は一気にそちらに流れ込み、ネクストやAFが次々と失われていく戦争という名の怪物の姿を描けたらいいな。

今度も一カ月先の更新になってしまおうと思います。が今後ともよろしく願います。

砲門が向けられる。QBでの確実な回避は不可能、だったら打ち返すまでグレネードを発射しつつプラズマキャノンからマシンガンに変え牽制射撃を行いながら機体を降下させる。

アステリズムが左方向へのQBを行いさも当然のように回避するとほんの少しだけ砲門が下に向けられたのが見えた。

落下位置の予測、特定個所の破壊、何であれあれを食らうわけにはいかない。アステリズムはQBによるステップとでもいうべき動作が終了していない。さっきは回避されたが今は少しばかり状況が違う、今は攻めに意識が傾いているはずだ。それこそが決定的な変化となって現れる。

すかさず、プラズマキャノンを起動させ発射するがそれより一足早くハイレーザーが発射される。すれ違う二つのエネルギー体は精密な狙いのもとピラムの左腰部関節を溶解させ、機械補正による偏差射撃はアステリズムのPAを減衰させcoreの装甲を焦がした。HMDに損傷状況の情報が表示される。「！」その異常な火力に驚きを覚えながらつつけてグレネードを放つがやすやすと回避された。

「弾の威力を最終的に決めるのは銃の種類ではないのだよ。ランサー」
よくよく見ればハイレーザーの銃身つまりレーザーを作り出す発信機あたりから異様な煙が出ているのが確認できた。あれはおそらく発信機が破壊される寸前まで光の増幅をおこなったために発生した熱によるものだ。さしずめレーザー版の強装弾といったところだろう。

もしかして今までハイレーザーを温存していたのはこの為？使わなかったのではなく使えなかった。機体が地面に着地した瞬間その衝撃で左足が股関節に当たる位置からラゲ複合系アクチュエーター

から駆動油が漏れ出すさまはさながら人間の出血だ。すぐさま自動で姿勢制御が行われ片足だけで地面をホバー移動するが機動力の低下は否めない。積載重量が実質半減したのだから当たり前だ。

「ランサー危険です。撤退を提案します。」

「私からも提案するぞ、猪武者ではなくなったようだがお前は凡人のリンクスだ。」

プラズマキャノンとグレネードを同時に発射し牽制射撃をおこなうニーナ状況確認のための通信を行う。

「ニーナ、他のアルテリアはどうなっている。」

「現在、各アルテリアではイレギュラーとトップランカーが交戦しています。しかし、主要アルテリアのほとんどが占拠されクレイドルへの送電は全体の60%が停止しています。」

「クラニウムはどうした。」

「不明、ストレイドらしき機体が確認されたという情報を最後に通信が途絶えています。」

ジュリアスも降下しハイレーザーの砲門をこちらに向けながら同じ方向に先回りしつつホバー移動している。いつでも撃てるそう言っているのだ。

ストレイドの実力はSOMの撃墜に始まり、ラインアーク攻防戦でその戦闘技術をステイシスと同等に渡り合うことで世界にしめし果てには、あのソルディオスの改良型をたった一機でその搭載AFもろとも破壊してみせた。もっとも、そのソルディオスの一部は戦場をくぐりぬけ例の射爆場に鮮烈たるデビューを飾ったが。

ジェラルドはジュリアスと引き分けることすらあつた実力派だがオッツ・ダルバアには勝った記録がない実際にその戦闘能力をまじかで見ただ俺にはわかる。危険だジェラルドはストレイドに勝てない。「この地域の送電の状況を教えてくれ。」

「このアルテリアの送電が停止したため他のアルテリア施設への電力供給も停止していますが余剰電力を回せばまだ十分クレイドルを飛ばせます。」

「では、その準備ができるまでの時間は？。ネクストがその気になればどこも行動範囲内だろ。」

「一時間もあれば緊急用の送電線のネットワークが起動されるでしょうまさかランサー。」

「とういうわけだ。もう少しばかり付き合ってもらうぜジュリアス。」

最高の間合いと位置を維持し続けるアステリズムから通信が入る。

「正気か？。たしかに長いとは言えないネクストの行動持続時間を考えれば不可能ではない。しかし、死ぬぞ。」

「おれは死ねないさ。あんた達に認めれもらえる所まで行くまではな！」

そう言いながらマシンガン二機を連射しながらの突撃というにはあまりに遅い突撃をかける。しかしこの程度ジュリアスにしてみれば子供が駄々をこねるのと変わらない。

「ならば、なおさら下がれ！」

ジュリアスが声を荒げた。珍しいなと思いつつも状況を見定めながらAMSにイメージを送り特定の動きをするように命令を出しHMDの表示を変更させる。

全身に纏わり付くような圧力を両手には操縦桿ではなく銃のグリップを握っている時のような感触と重さを感じピラムが破損した左足に損失感を感じる。まるでネクストという服を着ている感覚だ。

「下がらない。」

ハイレーザーが飛んできた。これをごくごく短い間QBを噴射させてレーザーをぎりぎり掠らせるPAを貫通したレーザーは大きくその威力を減衰させてその背後にあつた建築物を焼いた。

「QBの噴射時間の操作をするとは、標準的なAMS適正しかないお前にそんなことができるとはな。」

「新型AMSと最新型のEECの力さ。エンジンコントローラユニットそれに今は各武器の射線が見えている。」

HMDにはこちらに向けられている兵器の射線が緑色のラインで表示されていた。正直これがピラムにも搭載されると聞かされた時

には機械に踊らされる気がしてあまりいい印象は持てなかったが実際に使ってみるとかなり良いものだ気づく。

「なぜだ。なぜおまえはそこまで企業に肩入れする。」

アステリズムのレールガンの起動と同時にHMDの表示が切り替わり、ロックオン警報と射線の色が緑から赤に変わった。この表示はもう間もなく発射されるという警告、今のピラムには発射プロセスを感知し敵の攻撃を予測するつまり一部の者がたどり着くという超直感、それを機械で再現する機能が働いている。

先ほどの攻撃を避けられたのもこれのおかげだ。超高速の砲弾をQBで回避しこちらの倍近い速さで移動するアステリズムに向けての突撃をなおも続ける。

「アスピナが最高のリンクスだったと胸を張って宣伝するジョシユア・オプライエン。」

最強の称号を実力で勝ち取ったアナトリアの傭兵。

研鑽の結果最高クラスのリンクスにまで上り詰めたローディー。

おれの先輩で目標であり続けたジュールアス・エメリーにジェラルド・ジェリドリン。

そして、今まさにその最強伝説を創造しているストレイド。

おれは所詮、機械に頼ってやつとあんた達にそこそに対抗できる凡人さ。アスピナに現れたスピリットムーン、あのAAに特化したイレギュラー、ジェラルドとの共闘、リリウム・ウオルコットとの模擬戦、これだけの実力者の戦いを目にして思ったのさ。企業、アスピナイやそんなことどうでもいい。ただ強くただ強くなりたいてな。」

アステリズムの動きが守りから攻めに変わった。HMDはレールキャノンに通常よりはるかに高いエネルギーが充填されていると警告している。

何かやるきだそう思った矢先OBを短距離で発動させるとこちらの頭上を一瞬で飛び越えた。ちょうどグレネードがある左肩に視線を受けるような違和感を感じたAMSを介してここが狙われている

ぞと伝えてきているのだ。

こちらがQBを発動させるより早く超高速の砲弾がグレネードの弾薬庫に着弾する。危機を察知したCPUは自動でグレネードをパージしそれと同時に勝手にQBを発動させた。

すさまじい爆発の衝撃波とQBのGに耐えながらQTを行うがそこにはもうアステリズムの姿はない。AMSはこちらだと感覚を伝えていてそれによればこちらの旋回に合わせてアステリズムも移動し背後に付き続けているようだ今度は人に近付かれたときに感じる圧迫感とでもいふべきものと右足股関節に違和感を感じた。まずいそう思った時にもう遅い。

巧みなブースター操作でハイレーザーの砲門を突きつけたアステリズムが発砲した。今度は左足が吹き飛びピラムは前のめりに倒れはじめた。

あとはほとんど無意識の行動だった。訓練通りAMSに脱出装置の起動と起動のためのパワードをイメージとして送りその直後にコックピット上部のパッチと装甲板が爆砕ボトルの爆発で弾け飛びコックピットブロックごと射出された俺はその衝撃と周囲の構造物に激突する轟音に耐えながら止まるのを待った。

惨敗だ。さんざん手加減された拳句、機械に頼って何とか一矢報いたつもりになってそれでちよつと本気を出された途端、行動不能に追い込まれた。

本当に処刑台に上がる死刑囚の気分だ。今まで俺が蹂躪してきたノーマルやMT、通常兵器の搭乗者もこんな気分だったのだろうかそんな現実逃避をしながら文字通り棺桶の中でじつと次にくる間隔を待っている。

chapter 3 - 11 (後書き)

どうも、ここ2ヶ月の間土曜も仕事の鈴木シキです。

こりゃ今年も夜勤かな(苦笑)。

さて、物語は転の終盤に入ってきました。結ではただ強さにあこがれていた主人公がその強さの使い道を自分ではどうしようもない大渦にのまれながら見つけていく姿つまり、答えを得る姿を描けていたらいいな。

何とか月1の更新はできていますがなんか前にもまして質が落ちた気がする。

それでも完走は何としてでもやりとげますよ。

そういえば、ACVの情報があるいと更新されましたねランカ
IACに月光、唐沢、そしてACLRとの連動企画の詳しい内容ですか。

それではここまで読んでくれた皆さん、来月中には必ず更新したいと思いますのでお待ちいただけるとありがたいです。

追記

デイスガイア2の幻想入りが先を越されただと。

HMDはネクストのカメラがとらえる映像から内蔵されているカメラの映像は必要最小限の光源のみ照らすコックピットを映し出しているリンクスを出鱈目なGから守るための拘束具はコックピットの停止と共に解放され、同時に常備品のPDWとサバイバルキットサブマシンガンが持つて行けと言わんばかりの位置にある収納ボックスからそれぞれ顔を出していた。

まるで踏みつぶされる直前の虫の気分だが不思議と悔しさはなかったどんな形であれすべてを出し切って負けたのだ寧ろ清々しいくらいだ。

「どうした。ランサー出てきて手を上げないのか。」

コックピットハッチを解放するとどこからか飛んできた砂埃でぼんやりとした夕日が差していた。HMDに汚染度計が表示されその表示が跳ね上がりアラートが鳴りだした。この対Gスーツが対塵スーツを兼ねていなければ放射線で火傷している危険なレベルだ。だがその原因はすぐにわかったアステリズムがPAを展開した状況でこちらのすぐそばで北の方向を見ていたのだ。

その姿で何をしたいか十分に伝わってきたネクストに乗れなくすより生き残らせて別のネクストに載せたほうが後に利益になるのが経済戦争、後のために「さっさと帰れ」そう言っているのだ。

「ランサー、聞こえますか。」

無線にニーナの声が飛び込んできた。

「ああ聞こえているよ。」

「無事でよかった。これよりエリアに突入しあなたをフルトン回収します。バルーンの準備を行ってください。」

ジュリアスもこの通信を聞いてはるはずだったがそれを阻止する様子はなくただ北の方向を見続けている。

PDWを残しサバイバルキットだけを収納ボックスから取り出す

と狙撃を警戒しながら外へ出てサバイバルキットからバルーンを取り出し内蔵式のビーコンを起動させる。

搭乗者をしつかり固定するために対Gスーツから垂れているベルトをアタッチメントに差し込みベルトの長さを既定の長さに調整していくこれでバルーンが膨らめばちょうどお姫様だっこされるような体勢になる仕組みだ。

「なあ、ランサー。あの酒場でのことを覚えているか？」

アステリズムの拡声器からそんな言葉が聞こえた。

「ああ、あれがどうかしたか？」

てきぱきと訓練通りに作業を進めながらオープン回線で返事をする。

「あの時、格下のお前に話した理由がわかるか？」

「戦力がほしいからじゃないのか。」

「あの時はな、お前なら私がない間も故郷アスビナを守っていてくれるそう思ったから話したんだよ。」

緊張の糸が一気に緩み思わず吹き出してしまった。

「笑うなよ。私は真剣なんだ。」

ふと口元が緩んでいるのに気がついた。

「…迎えが来たようだ。じゃあなランサー。」

はるか遠方に低速で侵入する輸送機の機影が確認できたあの距離ならあと一分もしないうちにここの上空へとたどり着くだろう。

「俺からも一つ聞かせてくれ。」

「なんだ。」

「ジェラルドに伝言があるなら聞いておくれ。」

それだけ、個人通信で伝えられた。先輩で友人で目標の人の頼みなら仕方ない。

「了解だ。じゃあなジュリアス。約束のため生き残れよ。」

「じゃあな。この一か月お前に出撃要請がかからないことを

祈るよ。」

「本名で呼ばれるのもひさしぶりだ。」

バルーンに繋がった液体ヘリウムの入ったボトルのピンを抜いた。加圧から解放されたヘリウムが一気に気化しバルーンを膨らませ体を文字通り大空へと連れ去った。

大破とは言わずも脚部を破壊されてはもはや単独での戦闘エリア離脱は不可能なピラムと破壊されたアルテリアを眼下にふと思った。「これからどうしようか。」と。

「ジェラルドとダリオが墜とされたか。」

「そのようだな。スクランブル発進したほとんどのネクストが撃墜されてしまったか、ストレイド、ハリ、ほか数名が造反し先の2名を除き我々に撃墜された残っているのはこうして通信している我々と機体のメンテナンスで出撃できなかったものだけだ。」

「彼らのことなど、忘れてしまえばいい。どの道生き残っていても戦力にはならんさ。アンサラも間もなく実戦投入可能だあれさえあれば敵がどこに潜伏していおうと問題ではない。大気ごと焼き払ってしまえるのだからな。」

「王大人のおっしゃるとおり、それに彼らの穴埋めはリリアムだけでも十分に可能です。」

「えらくご執心だな。しかし激務になるぞ、リリアム・ウォルコツト。」

「アンサラか。わしならフロート基部を30秒もあれば破壊できるがね。」

「それを防ぐための無人機だ。テストリンクスも存命と聞くアンサラとの連携にはしばらく時間がかかるだろうが無人機の量産はいつでも可能だ。なに、単機でもインテリオルのフィミルよりは使えるだろう。」

「・・・まあいい。防衛対象が減ったことでこちらでも戦力を集中できるようになったことだけは確かだ。今後は複数機での共同戦線が主になってゆくだろう。その時はよろしく頼む。」

夕闇の中、指定された拠点へ向けて最大速度で飛行する空っぽの格納庫を抱えるアスピナの輸送機に企業連から一通のメールが公文書という形で送信されてきた。

「ランサー、企業連が有事特法を施行したようです。」

「おれが撃退されてから3時間も経ってないぞ。呆れるほどの対応の早さだな。」

有事特法つまるところ企業連はORCA旅団の宣戦布告に対し応じたということだ。これから安定した収入を得るため制限されていた使用する弾種や兵器、諸々の交戦規程が一切排され文字通りの殺し合いが始まる。

まあ、今の今まで交戦規定など一部リンクスは完全に無視してたし、乱戦になれば出てこなくてもいいような連中まで出てきてしょうがないからこれを排除した経験だって結構ある。それより厄介なのは弾や各兵器に掛けられていた制限が無くなるということだ。ネクストであれば企業連から無料でメモリーが貸し出されほとんどのネクストはフルチューン状態になるし、ノーマルにだって採用されていないだけでPAの発生装置も十数年前に国家軍残党が開発しているし、ただの移動砲台となるがネクストをたたき落とすためのミサイルならMTにだって積める。

冗談のような惨状を思い浮かべ、思わず苦笑いを浮かべていることに気付いて戦争という行為に対する危機感というものが完全にマヒしてゲーム感覚でいる状態に気がついた。

「破壊に成功したアルテリアは14か所、再制圧されたアルテリアは3か所か。まあ予想通りの展開だな。」

「ああ順調だ。GAのアルテリア施設は新設した補給路がやっと機能し始めたところで施設の復旧は仮に制圧に成功したとしても一か

月はかかるだろう。インテリオルはレイテルパラッシュとヴェーロノークを主力に攻勢をかけてくるだろうがこちらはジェットでその脇腹を小突いてやればいい。」

「問題はオーメル、ルーラーなど捨て置けばよいがストレイドが初めて生かしたジェラルドの動きが気かりだ。アンサラーの件もあるいつ出鼻を挫くか。」

「その点はまかしておいてくれればいい。企業がどんな手を打ってこようと、それが自律型ネクストであろうがオービットであろうがチェックメイトだ。ところでジュリアス、君が出した“お願い”のことだが私は両機とも両リンクスともいや、交戦したすべての敵を戦闘不能にしておけと言っておいたはずだが。」

「ミツシヨングにある通信の内容通りだ。それ以下でもそれ以上でもない。」

「我々は兵力や地の利だけではない。兵の鍛練、命令系統、賞を出したくても出せるものはなく、罰を下して減らす兵力もない。すべての意味においてここにある全てが我々の“全て”なのだ。企業全体と比較したら水滴の一滴と津波にも等しい。一つの行動が原因で飲み込まれればすべてが一気に瓦解する。君には今後私の下で動いてもらう。異議はあるか？」

「…分かった。」

chapter 3 - 12 (後書き)

どうも、鈴木シキです。

まどマギをみてそれに触発されて書きはじめたファンタジーものをヨーロッパファンタジーテイストで書く決めて裏でゆっくりとのんびり書いている今日この頃。

まどマギやっぱいろいろと凄すぎです。

さて、次から対ORCA旅団の戦いが始まります。

オリACを企業意志の体現としてうまく表現できたらいいな。

それでは一ヶ月後の更新を目指しますのでよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1711i/>

armored core for answer survey the desert

2011年12月11日09時51分発行